

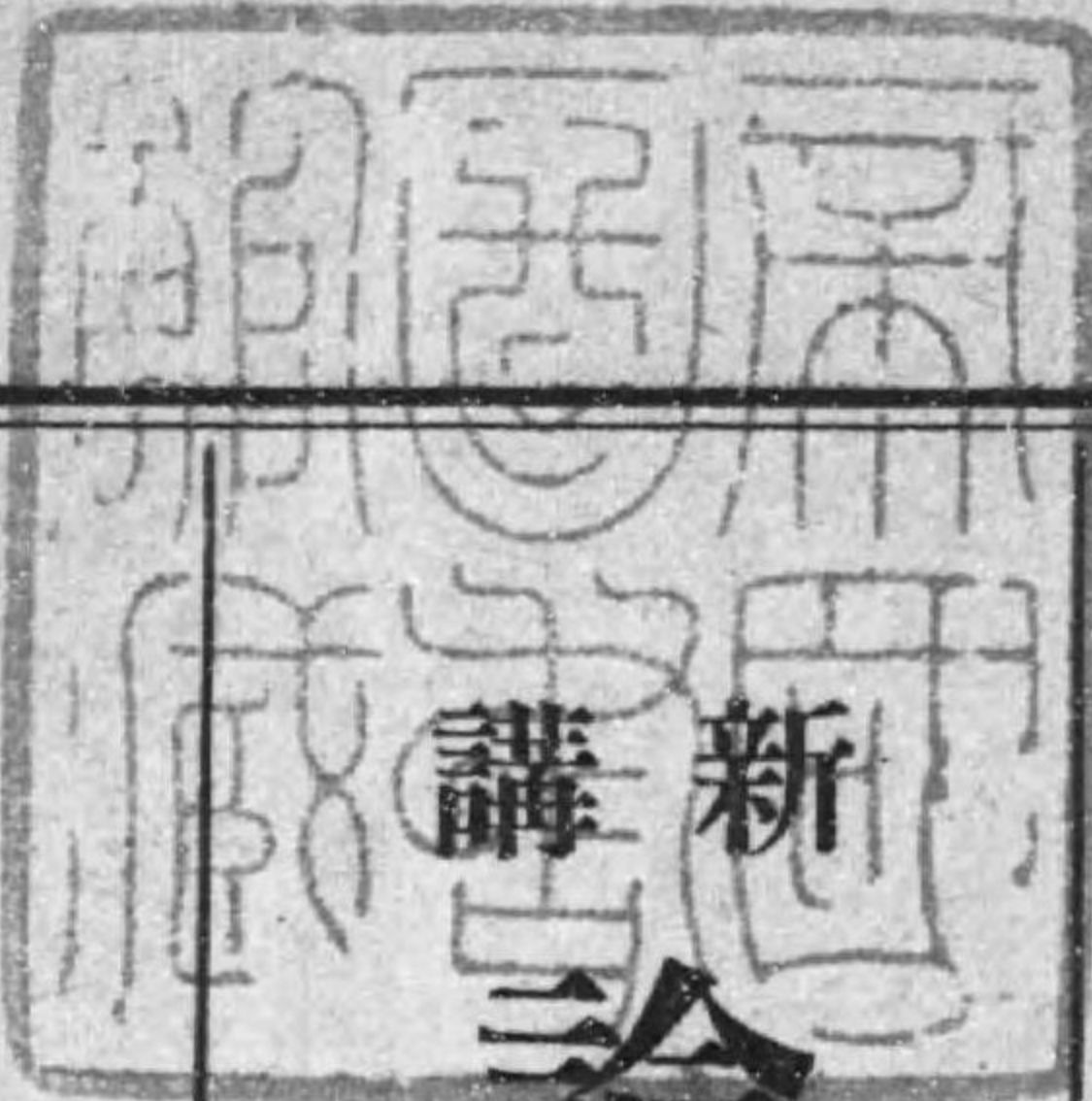
新論語讀本

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 80 1 2 3 4 5

始



特214
306



西川光二郎著

新講
論語讀本

春陽堂書店



四書に就いて

儒教では四書と云つて、『論語』『孟子』『大學』『中庸』を一番に尊重いたしますが、全く此の四書を熟讀せば、古聖人の心が能く分ります。ソコで私は此の四書を今日の國民にも理解させたいと存じ、多年各所で有らゆる階級の人達に、四書を講じて参りました。

而して今又茲に、多年の經驗に基きて、『新講四書讀本』を著述せんとの計畫を立て、先づ『新講孟子讀本』を出版、幸ひ大方の御好評を得ましたので、第二卷として『新講論語讀本』を出版することになりました。引續き第三卷として『新講大學、中庸讀本』を出版します。

拙著『新講四書讀本』が、儒教を普遍化する上に、一助たると共に、聊か世教に益あるを得ば幸甚。

はしがき

私は大正十三年に、「現代に活かした論語講話」を出版しました。これが私の、論語に關する最初の著述であります。

次に私は、「論語の味」「論語十二回講話」を出版し、昭和八年に、「論語心解」を出版しました。心解は論語全部を逐條的に講義したもので七百頁の大冊です。

既に「論語心解」がありますので、「新講論語讀本」は、逐條的に講義することをさげ論語の諸句をソレソレの題目に分類して、修養講話の形式で講話することとしました。此の方が一般の方々に、「論語の教訓」を知らす上に、有力であらうと存じます。併し、講義の仕方がコンナ風である所から、同じ句を何度も引用してあるが、之れは勢、止むを得ないのであります。

『新講論語讀本』をお読み下されし方々に、『論語心解』の併讀をおス、メします。

序手に、『論語』を讀む時の態度に就て一言しておきたい。

曾て或人、基督教の一牧師に向つて

聖書はドンナ態度で讀むべきや。

と尋ねしに、牧師は直ちに

それは、お父さんから、教へ諭されてると思ひつゝ讀めばよろし。

と答へられたと云ふ。

「論語」も先づ父の言葉と思つて讀めばよろしい。

親の意見と、茄子の花は、千に一つも無駄がない。

なほ「古人の精讀振り」に就ても一言しておきたい。

貝原益軒先生曰く

讀書、詳緩に之れを讀みて字々句句々分明なるべし、一字をも誤るべからず、必ず心に到り眼到り口到るべし、此の三到の内、心到を先とす。

論語を讀むものは第一に先生の此の言を記憶して、讀むこと叮嚀親切であらねばならぬ。古人が論語を手寫せしは、手寫が則ち人をして書を読むこと親切ならしむるからである。白河樂翁の如きは普ねく書生をして此の事を知らしめんが爲めに、四書五經を親寫して諸館に藏せしめたと云ふ。

佛者の間に行はるゝ讀經の心得は、儒者のそれよりは更に一層嚴格なるものにて、中に左の如き語がある。

正しく經を開き、之を誦すること、其聲高からず、下からず、異曲の音を出さず、一心専念に、之を誦し奉りて、一一の文字、皆佛身なることを、觀念すべし、亦復觀すべし我誦する所の息風は世界の衆生の耳に觸れ、音聲は世界の衆生の耳

に入りて其息風に觸れ、其音聲を耳にする者は悉く皆菩提心を發し、菩薩の行を行じて大覺位に登らしめんことを。

斯かる心を以て論語を敬讀すると共に、讀むこと千遍萬遍ならねばならぬ。

朱子は云へり。

讀書千遍意義自から通ずと。

熊澤蕃山先生も曰く、

論語孟子にても足ぬべし、五經にてもたりぬべし、其中十が七八までも解し残すと

も妨なく候、要は書中にあらず、我心にあり、大意を得る時は天下に疑ひなし、

何ぞ書の文義を事とし候はんや。

拙者若き時、田舎に獨學いたし、聖言を空に覺え、山野歩行の時も心に思ひ口に吟

じ候へば意味の通じがたきもふと道理うかみよろこばしく候き。

此の度々讀むと云ふことに就き思出せしことがある。私は救世軍の大將ブースの文集

説教集などを讀む毎に、彼の聖書の句を活用することの巧なるに驚き、讀むこと千遍萬遍ならずしては何人も然かる能はざるべしとの感なきを得ない。又陽明の傳習録を讀みて同様の感なきを得ない。

新講論語讀本 目次

一 孔子の略傳……………	一
二 孔子はドノ様の人なりしか……………	五
三 孔門の人々……………	一〇
四 論語は學の字を以て始まる……………	二〇
五 道德の順序……………	二六
六 孝に關する諸句……………	三六
七 反省とありて、人を見よとは教へてない……………	四三
八 克己とあつて、人に勝てとは教へてない……………	四七
九 己を責めて人を責むるな……………	五五

一〇 仁は善の總稱なり……………二六

一一 忠 恕……………六五

一二 禮儀を正しくせよ……………七四

一三 敬に就て……………八三

一四 勇氣に就て……………九〇

一五 過を改むる事……………九八

一六 恐懼戒心……………一〇五

一七 子供らしさを去れ……………一一三

一八 君子を目標とせよ……………一二〇

一九 聖人に常師なし……………一二六

二〇 聖人の行狀……………一四一

二一 聖人は徳を尊んで心を尊ばず……………一五一

二二 聖人は甚しきを爲さず……………一六一

二三 度を越さぬ様に……………一六六

二四 人生の快樂……………一七二

二五 喧嘩の種……………一八二

二六 枝葉と根幹……………一九〇

二七 現代人心の傾向と東洋道德……………二〇一

二八 心實ならざるべからず。又虚ならざるべからず……………二〇八

二九 先づ其の私心を去れ……………二一五

三〇 古人齋戒して君に告ぐる所以……………二二三

三一 進んで止まざる心……………二三五

三二 青年よ、先輩と個人的に接觸せよ……………二三七

三三 孔子は政治家でもあつた……………二四〇

三四 孔子の貧富觀……………二四五

三五 朋 友 論……………二五八

三六 負けるが勝……………二六四

三七 實踐躬行にも工夫あり……………二七二

三八 心の梶とり……………二七九

三九 時。處。位に就て……………二八七

四〇 周圍を見廻はす餘裕……………二九三

四一 善事を行ふに敏なれ……………二九九

四二 仲違ひした場合……………三〇五

四三 生活を第一の念願としてはならぬ……………三一三

四四 徳川家康と論語……………三一三

四五 孔子と隱者……………三二八

四六 道の活用……………三二二

四七 人道の要……………三二六

四八 大なるかな……………三三九

四九 衆賢の力……………三三三

五〇 和 と 直……………三三六

五一 天 命……………三四五

五二 思 無 邪……………三五〇

五三 孔子の精神的自傳……………三五二

五四 吾言に於て説ばざる所なし……………三五三

五五 人物を見別ける方法……………三五五

五六 歴史を忘るゝな……………三五七

五七 聖人證なきの言を爲さず……………三五九

五八 性情の正を養ふべし……………三三二

五九 仁遠からんや……………三三四

六〇 仁者と不仁者……………三六七

六一 朝に道を聞かば……………三六九

六二 約を以て之を失ふ者は鮮し……………三七二

六三 婿選びの標準……………三七三

六四 言と行……………三七五

六五 子産論……………三七九

六六 人才得難し……………三八〇

六七 僥倖……………三八五

六八 博文約禮……………三八七

六九 求めぬ者に與へ様なし……………三八八

七〇 子四を以て教ゆ……………三九〇

七一 最も非難さるゝ句……………三九二

七二 詩と禮と樂……………三九六

七三 盲人其他不具者に對しては……………三九七

七四 九十九までは誰でもする後の一が問題である……………三九九

七五 法語の言、巽與の言……………四〇四

七六 知 仁 勇……………四〇六

七七 孔子は情にあつき人であつた……………四〇九

七八 迹を踐まずんば亦室に入らず……………四二二

七九 應 病 與 藥……………四二六

八〇 請ふ斯の語を事とせん……………四二八

八一 子張明を問ふ……………四三〇

八二 勤め人への良訓言……………四三二

八三 難きを知れ……………四二四

八四 經々然小人なる哉……………四二八

八五 迷 信……………四三二

八六 小人は怪我にも善い事をせぬ……………四三三

八七 賢をス、ムるの美德……………四三四

八八 君子忠厚人を待つ……………四三七

八九 下學して上達す……………四三八

九〇 己を恭しくして正しく南面するのみ……………四四〇

九一 言忠信、行篤敬……………四四二

九二 言を失ひ、又人を失ふこと勿れ……………四四四

九三 人、賢師友なくば……………四四五

九四 雷同すること勿れ……………四四七

九五 人能く道を弘む……………四四九

九六 小 知 大 受……………四五〇

九七 仁 と 水 火……………四五二

九八 君子に三戒あり……………四五三

九九 君子に九思あり……………四五五

一〇〇 小人道を學べば使ひ易し……………四六三

一〇一 郷原は徳の賊なり……………四六五

一〇二 徳を之れ棄つる也……………四六九

一〇三 陋劣なる人間と一緒に仕事は出来ない……………四七〇

一〇四 徳を執ること弘きを要す……………四七二

一〇五 君子に三變あり……………四七四

一〇六 大徳 小徳…………… 四七五

一〇七 努めずして出来る事…………… 四七六

一〇八 五美と四悪…………… 四七七

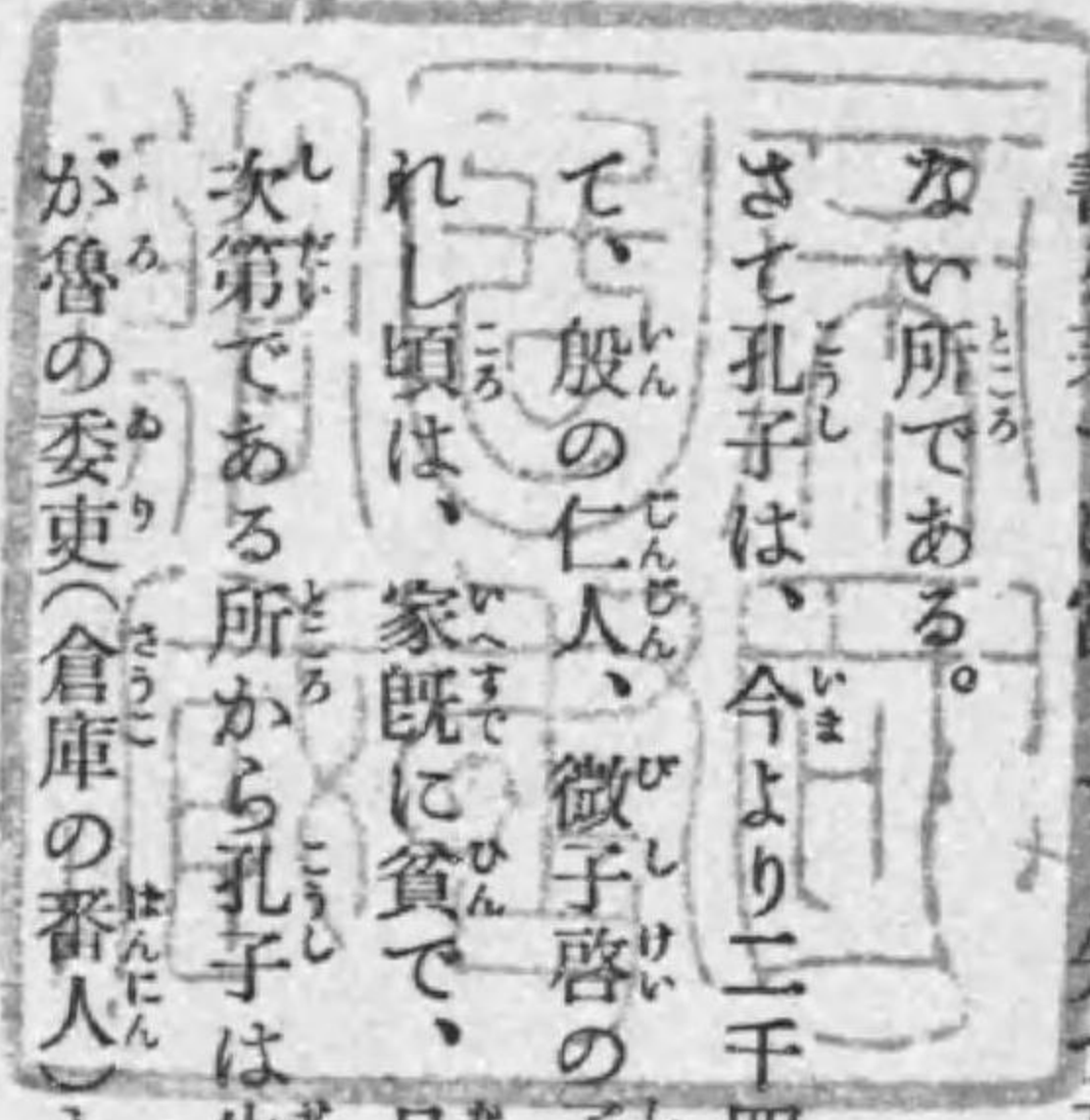
目次終

新論語讀本

西川光二郎著

一 孔子の略傳

論語は孔子の言を、門弟竝に門弟の門弟達が蒐めて編集したものである。されば此の書を著すに當りて、先づ孔子の略傳を述べて置かねばならぬのは、元より云ふまでもない所である。



さて孔子は、今より二千四百七十餘年前、支那は魯の昌平郷陬邑に生れた人であつて、般の仁人、微子啓の子孫であると云はる。斯かる名家の子孫なれども、孔子の生れし頃は、家既に貧で、且つ父叔梁紇は其の三歳の時に此の世を去つた。さう云ふ次第である所から孔子は生活の爲めに若かくして職を求めねばならなかつた。之れ彼が魯の委吏(倉庫の番人)となり、次で乘田(牧場の番人)となつた所以である。

生活の爲めに求めた職であつても、今時の青年の様に、之れを粗末には勤めなつた。倉庫の番人としても、牧場の番人としても立派に之れを勤めた。而してこゝが彼の

二
偉い所だ。何を爲しても眞剣なればこそ、彼は偉人となり得たのである。
而かも職務の餘暇、孜孜として勉強し、之れと云ふ先生についたのでなく、全く獨學
であつたに拘はらず、三十歳の頃には既に門弟が出来るに至つて居たと云ふから、如
何に明敏の人であつたかゞ想像さるゝ。
孔子の知識欲は斯く旺盛であつたが、彼は單なる博學者たらんと欲して而かく熱心に
知識を求めたのでなく、彼の心は常に、義を聞いて徙る能はず、不善改むる能はざるを
憂へとして居たのであつた。されば其の知識の進歩と共に其の徳も進みつゝあつたの
である。

○
孔子三十五歳の時、魯を去つて齊に往く。之れは魯國が大に亂れたから、前年齊の景
公が其臣晏嬰と共に來つて魯の禮を尋ねられたことあるを思出し、齊に往つて用ゐら
れんことを欲してゝある。而して之れから七年齊に居たが結句志を得ずして魯に歸

つた。時に年四十二。魯に歸つて後は、専ら育英の事に従つて居たが、斯かりける間
に、孔子の魯國に於ける名聲が次第に高くなると共に、孔子を措きて他に人なき有様
となつて來た所から、其の五十一歳の時、用ゐられて魯の中都の宰となり、次に司空
となり、更に進んで司寇となり、宰相の事をかね行つた。こゝ暫らくの間は、孔子の
得意時代であつたのであるが、齊の人々は、孔子が政治の局に當る様になつてから魯
國大に治まり、將に大に興らんとしつゝあるを見て恐れ、魯の君に女樂をおくりて、
其の心を邪道に導き、孔子の仕事の妨害をした。其の爲め孔子は魯國を去らねばなら
ぬ様になつた。

○
之れより十四年の間、孔子は衛、陳、匡、宋、鄭、晉、葉、楚、等の國々を巡遊して、
立脚の地を得、志を當世に致さんとしたのであつたが、遂に志を得ずして魯に歸
り、再び専ら育英の事に従ふ身となつて、七十三歳で此の世を去つた。

孔子の一生は不遇の一生であつた。併しながら向上の一生であつた。不遇が孔子を偉大にした。私共は孔子の一生から「當人の心だに確かりして居れば、不遇は却つて其人を大にするものだ」と云ふ教訓を學ばねばならぬ。此の偉大なる人格の人、孔子の心的歴史は論語であるから、皆様どうか、「論語」を能く味つて下さい。

四

二 孔子はドノ様の人なりしか

之れから論語の講話を始むるのであるが、それには先づ、孔子は二千五百年前の人であり論語は我國に渡來してからも既に千六百有餘年になるのに、何ぜ今でも尊いと云ふことから語らねばならぬ。

若しも「論語」が學説を書いたものであらば、サウは行かぬが、孔子と云ふ一大人格者の周圍に當時の眞面目な青年が集まつての、修養上の實際問題に就ての問答録であるから何時までも尊いのである。

○

さて「論語」がどの様に尊い書物であるかに就ては、講話を重ぬるに従つて明瞭となる次第であるが、先づ「論語」の中から、孔子の爲人を示せる句と、門弟中主なる數氏の爲人を示せる句とを引きて講話し、カウした先生の周圍にコンナ眞面目な青年の

六
集まりて、血の出る様な眞劍さの間答であるから尊いと云ふ所以を明かにしませう。

子曰。默而識之。學而不厭。誨人不倦。何有於我哉。(述而第七)

子曰く、黙して之を識し、學んで厭ず、人を誨へて倦まず、何か我にあらんや。黙して道を考へ、之れを味ふを樂しむこと。學んでも、學んでも、厭ふに至らぬこと。人を教ふる幾年なるも、倦み疲れぬこと。此の三事は、長所と云はゞ我の長所であつて、此の外には、私には何んにも、人様に申上ぐる様なことがないとの意。「何か有らんや」の上へ、「此の外」の三字を加へて、コ、は解釋すべきである。

子曰。德之不修。學之不講。聞義不能徙。不善不能改。是吾憂也。

(述而第七)

子曰く、徳の修らざる、學の講ぜざる、義を聞て徙る能はず、不善改むる能はざる。是れ吾が憂へなり。

修徳の業が思ふ様に進まず、講學の業も思ふ様に進まず、氣の付くまゝに早速にヨリ正しき方へ徙ることも、早速不善を改むることも出来ぬと、孔子が或日嘆息せられたとの意。

葉公問孔子於子路。子路不對。子曰。女奚不曰。其爲人也。發憤忘食。樂以忘憂。不知老之將至云爾。(述而第七)

葉公、孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚ぞ曰はざる、其の爲人や、憤を發して食を忘れ、樂んで以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らずと。

或日葉公と云ふ人から、門弟の子路は、孔子先生は、どんな人かと尋ねられた。此の時に、流石の子路も、一口で先生の爲人を云ひ現はすには、何んと云へばよいかと説明の仕方に窮し、何んとも云はずに其の座を立つた。

後日孔子は、此の事を聞かれて、ニコ／＼しながら子路に向ひ、お前はなぜ彼の時

に「先生は、發憤努力して道を求め、其の熱心さは食時を忘るゝ程である。又道を樂しんで、人生の百苦を忘れ、我身の老ゆるを知らぬ程であると云はなかつたか」と、仰せられたとの意。

八

我非生而知之者。好古敏以求之者也。(述而第七)

子曰く、我は生れながらに之を知るものにあらず。古を好み、敏以て之を求めし者なり。

弟子達の中には「先生は生知安行だ」などと云ふものがあつたので「私と雖も、生れながらに知つてると云ふワケではない、古聖人の言をスキ好みて、人の道を知らんと努めて、やつと知り得たものである」と云はれたのである。との意。

右の諸句に現はれてる通り、孔子と云ふ先生はどこまでも、道を求むること、反省すること、道を傳ふることに熱心で、一生涯、曾て一度も、开を怠る様な人ではなかつたのである。

孔子は確かに強烈なる「進んで止まざる心」の持主であつたのである。

二 孔子はドノ様の人なりしか

九

三 孔門の人々

さて斯くの如き先生の周圍に集まりし青年達は、如何なる人々なりしか。二三子の事を談れば、其の大體を想像することが出来るであらう。

○ 孔門第一の人と云はるゝ、顔回につき、「論語」の中に、左の如き句がある。

子曰。賢哉回也。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。

賢哉回也。(雍也第六)

子曰く、賢なるかな回也。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂へに堪へず、回也其の樂を改めず、賢なるかな回也。

食べものはと云へば、小さな竹の器に一杯丈、飲ものはと云へば、小さな瓢に一杯丈、又家はと云へば小さな長屋の一軒、之れ程貧乏になると、普通の人ならば、貧乏なことのみに氣になりて、心配で心配で、何事にも手がつくまじきに、顔回は、平氣で、夷然として道を樂しんで居る。エライな顔回はとの意。

子曰。語之而不惰者其回也與。(子罕第九)

子曰く、之れに語て而して惰たらざるものは、其れ回か。

何を一つ話しても、うっかり聞き流して仕舞ふことなく、必らずソレを味つて、吾身に適用せんとして止まざるものは顔回であるとの意。

顔回は、斯くの如くに道を樂しみ、斯くの如くに眞理體得の工夫に専念する人であつた。

○ 曾子に就ては、左の如き句がある。

曾子曰。吾日三省吾身。為人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。(學而第一)

曾子曰く、吾れ日に三たび吾身を省る。人のために謀りて忠ならざる乎。朋友と交りて信ならざる乎。習はざるを傳ふる乎。

私は毎日、何度も反省することにして居る。どう云ふことに就て反省するかと云ふに、第一には、「人の爲めに謀りて忠ならざる乎」と云ふことに就て反省する。人我が區別を無くすることは六つかしいもので、曾子程の人でも、コ、に悩みがあつて、ソレで毎日、コレに就き反省されたのである。

或有徳者が、其の門弟の一人から「先生程に修養が出来てると、もう、自分のこと、他人のこと、を、區別する様なことは、ドンナ場合にも、ないでせうね」と云はれた時に、「イヤさうは行かぬ。私の家に或時、兄の娘をあづかつたことが

るが、其の娘が或夜病氣をした、看病は無論、家内に委せて置いたが、大分ワルさうなので、私は夜中三度も、其の娘の枕頭まで行つて見た。併し寢床へ歸ると、よく眠れたことであつた。然るに我娘の病氣した場合には、看病は家内に托して、夜中一度も見舞に行かなかつたが、其の夜は終夜眠れなんだ。私はコンナ淺間しい人間である」と。懺悔話をされたと云ふことがある。

第二には、「朋友と交りて信ならざる乎」と云ふことに就て反省する。曾子程の人でも、眞に友人に對して信義を完全に行ふことが六つかしかつたのである。

第三には「習はざるを傳ふるか」と云ふことに就て反省する。曾子は、未熟な私見は口外することをさげ、先生から教へられし古人の道しか後進に語らぬことにして居たので、うっかり調子にのつて、私見を混ぜて語る様なことはなかつたかと、反省することも、日課の一つとされて居たのであるとの意。

曾子有疾。召門弟子曰。啓予足。啓予手。詩云。戰々兢々。如臨深淵。如履薄冰。而今而後。吾知免夫。小子。（泰伯第八）

曾子疾ひ有り、門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け、詩に云ふ、戰兢々々として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し。今にして後ち吾れ免るゝを知らかな。小子。

曾子、疾重くして、死期近きを覺悟せし時、其の門弟達を枕頭に呼び集めて、「私は今の今まで、寸時も油断せずに、其の身に怪我などあらしめまじと、氣をつけて来た。深い淵のワキを通る時の様に、薄い氷を踏んで河を渡る時の様に、ビク／＼しながらやつて来た。其のため手にも、足にも、小さなカスリキズ一つつけずに、ヨ、まで来た（言外に、病氣もせず過つて罪を犯し父母をはづかしめる様なこともなかつたとの意あり）之れでやつと、安心したとの意。

曾子は斯く慎しみ深き人であつた。日々の三省を生涯續け、戰々兢々としてと云つても、よい程注意深くして、有終の美を爲し得た人であつた。

今の世、有終の美を爲す人の、至つて少ないのは、名教すたれて、人々が全く反省しなくなり、慎しみ深く、なくなつた、爲である。現代の人々よ。曾子に學ぶ所あれ。

子路に就ては、左の如きの句がある。

子路有聞未之能行。唯恐有聞。（公冶長第五）

子路聞くこと有りて、未だ之れを行ふ能はず、唯だ聞くこと有らんを恐る。

子路と云ふお弟子は、先生から何にか良い教を聞くことがあると、开を實行することに夢中になり、此の一事を未だ能くせぬのに、更に他の良い事を聞くことを恐れたと云ふ程、實行に熱心な人であつたとの意。

子路無宿諾。(顔淵第十二)

子路、諾を宿することなし。

子路は、一度び承諾したことは、其の日の中に實行し、承知したと云ひながら、明日にしよう、明後日にしよう、其の實行を日延する様な人でなかつたとの意。
子路と云ふお弟子は、かくも實行に急なる人であつた。

○

閔子騫に就ては、左の如き句がある。

子曰。孝哉閔子騫。人不間於其父母昆弟之言。(先進第十一)

孝なるかな閔子騫。人其の父母昆弟の言を問せず。

其の父母や、其の腹ちがひの弟達が、どんなにホメても、他人がソレはホメすぎる、と嘴を入れることがない程に、閔子騫は孝行であつたとの意。

閔子騫には、カウした逸話がある。

閔子騫は、生れて間もなく母を亡ひ、其の父は後妻を迎へ、後妻のお腹から二人の男の子が生れたのであつた。スルト繼母は我が子の成長するにつれて、繼子の彼を憎み出し、色々意地悪いことを仕出した。併し彼は繼母の陰口を父に向つて云ふ様な人ではなかつた。それで父は繼母と彼との間に、どんなことがあるかを全く知らなかつたのであるが、或雪の降る日、外出に際し、彼に車を御することを云ひ付けて、出かけたが、途中彼は餘りの寒さに思はず手から手綱を落した。其の時に父がドウしたと云つて、彼の肩に手をかけし所、變んな感じがした。怪しみて、縫目を破り見しに、彼の冬着に入つてゐるのは綿ではなくて、ガマの穂であつた。一目見て父には萬事が讀めた。父は怒つて直ちに引き返させ、我家に歸ると、いきなり後妻に向ひ、「出て行け、不都合な奴だ、何ぜ繼子をイジメルか」と叱りつけた。其の折り彼は靜かに父を制し「母居ませば一子寒し、母居まされば、三子寒し」と云つ

て、父に繼母を許されんことを請うた。流石の繼母も此の一言に深く感じて、此の瞬間から彼を無上に愛するに至つたとのことである。

閔子騫は、コレ程の孝子であつたから、孔子先生から「孝なるかな閔子騫」とまで云はれたのである。

○

南容に就ては、左の如きの句がある。

南容三復白圭孔子以其兄之子妻之。(先進第十一)

南容三たび白圭を復す、孔子其の兄の子を以て之に妻す。

南容と云ふお弟子は、日に三たび白圭の詩を口誦された程に、言語を慎しまれた人であつたとの意。

白圭の詩には「白圭(白き玉)の瑕は、尙ほ磨いて除くことが出来る。併し人一度び、

下手なことを云へば、其の言葉の瑕ばかりは、何んとも仕様がなない」とある。孔門には、コレ程、言葉を慎しむものもあつたのである。

○

孔子の人格は、右の如くであり、又其の周圍に集まりし青年達の爲人も、上述の如くであつた。而して「論語」は、カウした人達の、修養に就ての實際問題の問答録なのであるから、尊ばざるを得ぬではないか。

四 『論語』は學の字を以て始まる

「論語」を開いて見ると、「學而第一」とあつて、其の最初の句は、

子曰。學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不
慍。不亦君子乎。

子曰く、學んで時に之を習ふ。亦説はしからずや。人知ずして慍らず、亦君子なら
ずや。

コ、で學ぶとあるのは、人の道を學ぶと云ふこと。「時に之れを習ふ」とは、其の學び
得し人の道を寸時も忘れずに、實行せんと勵むこと。時を時々の意味と解する人あれ
ど、人の道を學びて時々思ひ出した時だけ、實行を心掛けると云ふのでは意味をなさ
ないとは、山鹿素行先生の説であります。私は其の説に従ひます。「亦説はしからず

や」とは、ツマラヌことに腹を立てたり、人を怨んだり、或は又欲心を起したりする
日もあるのに、今日は道を學ぶこと。道を行ふことに専心することが出來た。何んと
說しいではないかとの意。ホントにサウです。人間にとり、之れほど悦ばしきこ
はありません。

「朋あり遠方より來る」とは、類を以て集まること。小説讀みには小説讀みの友。活
動好きには活動好きの友。碁打には碁打の友が出來る様に。道を學ぶ心掛の人には、
又直ちに道友の出來るものであります。而して道に志すものに道友の出來し場合に
は、よく善を助長せしむることが出來ると云ふこと。「亦樂しからずや」とは、少し眞
劍な話となると、多くの人は相手になつてくれない。眞面目な人程相手が少ない。然
かるに今計らずも道の友の來訪に接した。實にうれしいではないか。私ばかりでなく
先方もうれしいであらうと思ふ所から、樂しからずやとしたものでありませう。樂の
字には衆と共に樂しむとの意があります。

「人知らずして慍らず」とは、「右手で善事を行ふ時には、左の手にも知らずな」とか。「陰徳陽報」と云ふことは、イクラ承知して居ても、人にはソレと矛盾した自分のしたことを知つて貰ひたいと云ふ氣持もあります。其の矛盾は小人程甚しい。小人はチヨツトしたことに、禮を云はれぬと直ぐ腹を立てる。ソレで茲に人あり、密に善事を行つて、永い間誰も知つてくれなくても心中に怒をふくむことなしとせば、其人こそ亦君子ならずや」ではありませんか。

此の句は、ツマリ君子の三樂を説いたものであつて、論語全卷の趣旨が此の一句に集結して居るとも云へませう。

これで一通り、句意を説明しましたから、次に、「何ぞ論語は、學の字で始まつて居るか」に就て述べませう。

さて青年に向つて、「君、今夜、何々先生の修養の講話があるが、さゝに行かならうか」

とス、メると。「修養の話なんて聞かなくても分つて居るぢやないか。善いことはせよ。悪いことはすなに定まつて居るぢやないか」との、御挨拶に接することが珍らしくない。口ではコンナ露骨なことを云はぬまでも、ソレと似たり、よつたりの考へのものが少なくないのであります。今日カウした人の少なくないことから考へて、昔もサウした人が少なくなかつたことと思はれます。

ソレで孔子先生が、先づ此の謬見を打破して學ぶと云ふ氣持を、起さすことを第一の肝要事とされた、従つて「論語」も學の字で始められてゐるものと、思はれます。

例へば親孝行にしても、青年に向つて、孝行の話でも始めると、分つて居る、分つて居ると言ふものが少なくない。併し「サウか、分つてをればソレでいゝ」と言つて、ステておいて御覽なさい。其の青年は親孝行者になれぬに定まつてをります。

勿論「親孝行とは、親を大切にすることだ」と言ふ位のこととは、分つて居るに相違ないが、尙ほ聖人は孝の道をどう説いてあるかを學べば、得る所があるし、古今の孝子

傳を讀めば、讀む度に、刺激されて、孝の道に進むことが出来ます。之れ學ぶと言ふことの大切な所以です。

二四

同じことが、他の徳目についても言へます。

學ぶと言ふことには、讀むこと、聞くことの外に、問ふことも大切であると言ふので孔子先生は、「舜問ふことを好み」とか。「下問を恥ぢず」とか言はれてありますが、「論語」の中に

子曰。由、誨女知之乎。知之爲知之。不知爲不知。是知也。（爲政第二）

子曰く。由（子路の事）女に之を知るを誨へんか。之を知るを之れ知ると爲し。知らざるを知らずと爲す。是れ知れるなり。

「人間は此の小さな頭で、世の中の凡てを知りつくすと言ふワケには行かないが、凡てを知れると同様になる道がある。ソレをお前に教へようか」と。或時、孔子先生が

お弟子の子路（由）に申されました。子路よろこびて、「どうぞ」と請ふと。先生は、「知つてゐることは知つてゐるとし、知らぬことは知らぬとし、ハッキリ其の區別をつけ、知らぬことはたづねることとしたら、いゝのだ」と云はれましたとの意。

一寸讀んだ丈けでは、如何にも馬鹿々々しい問答の様に思はれますが、能く味うて御覽なさい。味へば味ふ程意味深長であります。

誰れしも、一寸したことだと、知らぬことは、知らぬとして、氣輕に人に尋ねるも、少し込み入つたことになつて來ると、容易に知らぬことを知らぬとして、人に尋ねぬではありませんか。若き男女が戀愛の問題に悩む折りなぞ、「コンナことは、親にも相談出來ぬし」と言ふのが常ではありませんか。中年の男子が家庭の問題に苦しむ場合なども、之ればかりは、打明けられぬと言つて、自分には何んとしていゝやら分らぬクセに、獨りで解決しようとする、もがくのが常ではありませんか。而して多くの無分別が、から生れ出て居るではありませんか。

斯く考へて來ると、右の句に深長なる意味のあることが、分つて來るではありませんか。

なほ「論語」に

學則不固。(學而第一)

學べば則ち固ならず。

とある。

「學べば則ち固ならず」とは、見聞が狭まくて、自己の體驗からのみ萬事を判斷する人は、小さく固まりていけない。サウならぬために見聞を廣くせよとの意。

子曰。學而不思則罔。思而不學則殆。(爲政第二)

子曰く。學びて思はざれば則ち罔し。思うて學ばざれば則ち殆し。とある。

古訓を學ぶと云ふことは、大切に相違ないが、併し其の學んだことを、身に當てはめぬ様であつては、學んだことが、身の光にはならない。(ソレで罔しと云ふ)。又、考へる、工夫すると云ふ方は怠らぬにしても、古訓を學ぶことをしない様であつては、見聞狭まき、識見ひく、固陋となり易いから危ないとの意。

世に、どつかへ偏せぬ人の、至つて少なきことを思へば、此の教訓大に尊重せざるを得ませぬ。

五 道德の順序

儒教道德の特色として一番目につくのは「道德の順序」と云ふことを喧ましく云つてあることです。

一寸と考へると、善いことは、どこからしても、善い様に思はるゝが、儒教ではソレはいかんと云つて、ソコを喧ましく云はるゝ、何ぜであらうか。

「論語」に

有子曰。其爲人也。孝弟而好犯上者。鮮矣。不好犯上而好作亂者。未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者。其爲仁之本與。(學而第一)

有子曰く、其のひと爲りや孝弟にして上を犯すことを好む者は鮮し。上を犯すことを好まずして、亂を作すを好む者は未だ之れ有らざる也。君子は本を務む。本立て

道生ず。孝弟は、其れ仁を爲すの本か。

有子は孔子のお弟子の一人であるが、孔子死せし時、弟子達が相談して、孔子に仕ふる所以を以て有子に仕へんとしたことがある程の人望家である。其の有子の言葉に、親には孝、兄や姉には悌(從順)なる人柄のもので、社會へ出てから、目上の人に反抗する様なものは先づない。其の反抗を好まぬものが亂を爲すことを好むと云ふことも亦ない。ソレで徳の高い君子は第一に本を務めよと云はるものである。孝弟と云ふ本が立たねば、道の體得は出来ぬ。先づ孝弟の人とならねば、仁徳を行ふの人とはなれぬとの意。

とあるが、實際、親に孝行の出来ぬ様なものは、一切仁徳の人にはなれぬものであらうか。之れは理窟の上からも、容易に説明する事が出来る。自分に一番因縁の深い、又最もお世話になつて居る、父や母に對してすら、敬愛の心を持つことの出来ないものが、他人を眞に敬愛することの、出来よう筈がないではないか。又事實が更に明白

に論語の言の眞理であることを證明して居る。昔でも今でも、親に不孝なもので、他人に親切であつたものが、一人でもないではないか。而して昔でも今でも、親孝行なものは、皆な他人にも至極親切ではないか。

例へば、彼の京都、川岡村の儀兵衛さんの如き、餘り孝行なので、お母さんが有難がり、時折り「ア、忝けない」と云つて、我子を拜む程の孝子であつたが、此の人は、用事ありて京の町へ出かける毎に、近隣へ「京へ行くが、用がないか」とふれて歩き、又途中でも老人の荷物を持てるを見れば、必らず持つてやつたと云ふ程の、他人に對しても親切なのであつた。

大和の清九郎さんは、一夜過つて亡き父の木枕を足で踏んだので恐縮し、さんざ考へた末に、天井から繩をブラ下げて、父の枕をくくりつけておくことにした程の孝子であるが、親に斯くヤサしきものは、又其の飼馬に對してすら、誠に情け深いものであつた。馬に薪をつけて、高取の城下町へ賣りに行つた歸りには「行きしなには、苦勞

をかけたからと云つて、馬の鞍を自分が脊負つて歸るが常であつた」と云ふ程の、情け深さであつた。

○
序手ですから、親孝行に關する「論語」の句二三を、コ、に引用してお話しておきませう。

子游問孝。子曰。今之孝者。是謂能養。至於犬馬。皆能有養。不敬何以別乎。(爲政第二)

子游孝を問ふ。子曰く、今の孝は、是れ能く養ふを謂ふ。犬馬に至るまで皆な能く養ふこと有り、敬せずんば、何を以てか別たんや。

子游と云ふお弟子が孝行に就て質問せし折り、孔子先生がかく云はれた。此の頃の人

守り、馬は飼主のために、重荷を負ふ。されば若し親を尊敬することなくば、犬馬とかはらぬことになる。との意。

筑前の孝子正助は、親を尊敬することに於て無類な人であつた。彼は生涯貧乏で、自分の家のことは、何んでも自分でしたが、家の屋根のふきかへの時のみは、人を頼みて、ふきかへして貰ひ、自分では曾て一度も屋根の上へあがらなんだ。或人怪しみて尋ねしに、座敷に坐つてござる父母を指し、私が屋根にのぼれば、お父さんやお母さんの頭をふんだ形になるではないかと、云つたと謂ふ。彼はソレ程に親を尊敬した人であつた。

彼は尙ほ、用事ありて外出し歸宅の折りなど、座敷にお父さんお母さんのござるのが見えたと入口の幾間も前から、頭を地につく程下げ、すり足で、内へ入つたと云ふ話がある程に、親を尊敬した人であつた。之れ程、親を尊敬した人さへありしに、さて私とは反省すべきである。

子夏問孝子曰色難有事弟子服其勞有酒食先生饌曾是以爲孝乎。(爲政第二)

子夏孝を問ふ。子曰く色難し。事有れば弟子其の勞に服し、酒食有れば先生に饌す。曾ち是れを以て孝と爲すか。

子夏と云ふお弟子が、孝行を問はれし折り、孔子は顔色が六つかしいですなあ。父兄の代りに、自分が先づ骨の折れる仕事を爲し、御馳走のある場合には、先づ父兄におス、メする。それ丈では孝行と云へない。父兄に不快な顔を見せる様では駄目だとの意。

朱子の語に「孝子の深愛あるものは、和氣あり。和氣あるものは愉色あり」とある。お父さんがカウ云つた、お母さんがコンナことをなさつたとすぐフレたり、ブツブツ云つたりするのは孝子とは云へない。

父母に對してばかりでない、他人に對しても同じこと、人に對して不愉快な顔色を見せる様なものは、人に輕視される。

若い人が、人に使はれてる様な場合に、何んぢや、かぢやと、すぐ不快、不平な顔をする様では、到底上役の信任を受くことが出来ない。

子曰、父母之年不可不知也。一則以喜。一則以懼。（里仁第四）

子曰く、父母の年は知らざるべからず。一は則ち以て喜び、一は則ち以て懼る。

凡そ世に父母の年を知らぬものは、なからう。然かるに何ぜ業々しく「父母の年は知らざるべからず」と云つてあるのでせうか。

誰でも人から

あなたのお父さんは、もう幾歳におなりですか。あなたのお母さんはもう幾歳におなりですか。



と訊かれると、ハッキリ答へることの出来る所を見ると、父母の年を知つてゐるに相違なきが如きも、平常

あゝ父はモウ幾歳になるも、まだ壯健で居てくれて有難いとも思はず。又丈夫な様でもモウ幾歳だ、いづどんなことがあるかも知らぬ、今の中に孝行しておかねば

と、懼るゝことも知らぬ所から見ると、父母の年を忘れて居ると云はれても仕方がない。

孔子は、人の子たるものに、此の意味で「父母の年は知らざるべからず云々」と云はれたのである。

老親をもつ、若かき人達よ。時々論語を開きて、此の一節を讀み、孔聖の此の警告に己が魂を驚かせよ。

六 孝に關する諸句

前條「道德の順序」の中に擧げし外に、なほ孝に關する句あり。开を拾つて見ることにしよう。

子曰。父在觀其志。父没觀其行。三年無改於父之道。可謂孝矣。

(學而第一)

子曰く。父在せば其の志を觀。父没すれば其の行を觀る。三年父の道を改むるなきは孝と謂ふべし。

子たるものは、父の在世中は、父の志のある所を觀てとつて、陰に陽に、其の志を助け行はしめねばならぬ。勿論之れは父の志の善事に向つて居る場合に就て云ふのである。而して父の此の世を去られて後は、父の行の跡を觀て(ソレは勿論善であ

る場合に限る)、父がなほ生きてゐられたならば、之れをもつと續けられたと思はるゝことを行はねばならぬ。幾年も〜以上の如く考へて、父の行を續けてゆくが孝子の道であるとの意。

○ 信州、高遠町の近くに、其の家の道路に面せる縁先に、毎日火鉢を出しおきて、旅人が煙草の火に困らぬ様にしてある家がある。之れは此の家の先祖が始めしもので、二代も、三代も开を續けて居るのである。之が右の句意の實行の一例であります。

孟懿子問孝。子曰。無違。樊遲御。子告之曰。孟孫問孝於我。我對曰。無違。樊遲曰。何謂子曰。生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮。(爲政第二)

孟懿子孝を問ふ。子曰く違ふ無れ。樊遲御たり。子之に告て曰く、孟孫孝を我に問ふ我れ對へて曰く。違ふこと無れと。樊遲曰く。何んの謂ぞや。子曰く。生けると

きは之に事ふるに禮を以てし。死すれば之を葬むるに禮を以てし。之を祭るに禮を以てす。

三八

或時、孔子先生が魯の大夫の孟懿子を訪はれし折り、孟懿子から孝に就ての質問があつた。お話し終りて外に出られてから、其の日の御者たりし門人の樊遲に、先生から、「孟懿子則ち孟孫から只今私に孝に就ての質問があつた。私は違ふなかれと對へておいた」とのお話があつた。カウ云はれた丈では、樊遲によく分らぬので、其のワケを尋ねられた。ソレで先生は「親の生ける時、親の死して葬むる時、又葬りし親のお祭をする時、何れの場合にも、禮に違はぬ様にせよ」と説明されたとの意。

これは生前の孝、死後の孝を説いたもので、自分のしようと思ふ丈けをしたのでは、人から彼れ是れ云はるゝことが生ずる。古人が定めてくれてある禮を調べ、其の禮にはづれぬ様にして、親に事へよ。其の葬祭もせよ。

孟武伯問孝。子曰。父母唯其疾之憂。(爲政第二)

孟武伯孝を問ふ。子曰く、父母は唯だ其の疾を之れ憂ふ。

孟武伯は、身體の弱い若者でした。ソレで先生は、親は最も子の疾を憂ふるものであるから、身體を大事にせよと云はれたのである。孔子先生の答へは、何時も應病與藥的である。孝行の定義を拵へておいて、甲にも乙にも同じ答へをさるゝのと違ひ、先生に問ふ人の一々急所に當る様答へらるゝが常である。これも其の一例と云へませう。此の時、武伯にとりては、身體に氣をつけて親に心配かけぬ様にすることが、何によりもの親孝行であつたのです。

子曰。事父母幾諫。見志不從。又敬不違。勞而不怨。(里仁第四)

子曰く。父母に事へては、幾く諫む。志の從はざるを見ては、又敬して違はず。

勞して怨みず。

子たるものが、父母を諫むる場合には、幾諫と云つて、そろく、やんはりと諫めねばならぬ。而して縦ひ、父母が我言を聞かれなくても、腹を立て、「コンナ分らぬ父母は、もう尊敬出来ぬ」とか。或は又、「モウこんな父母の爲めに働くのはイヤになつた」などと、云つて父母の言に違つたり、父母を怨んだりしてはならぬとの意。自分はどこまでも腹を立てずに居て、父母の心の和ぐをまちて、何度でも諫むべきであります。

世間には、初めから「お父さん何んと云ふことです」「お母さん何んと云ふことです」などと、叱つてかゝり、父母が其の言をきかぬと、直ぐ、「モウこんな親は駄目だ」とステてかゝる子が多い。カウした人達は、此の句を三唱して、深く反省すべきであります。

子曰。父母在不遠遊。遊必有方。（里仁第四）

子曰く。父母在せば、遠く遊ばず。遊べば必ず方あり。父母の存命中は、止むを得ざる場合の外は、遠方へ行かぬがよろしい。心配をかけるからである。止むを得ずして遠方へ出かける場合には、せめては行先を明かにして、少しでも父母の意を安んずる用意あるべきですとの意。

曾子曰。吾聞諸夫子。孟莊子之孝也。其他可能也。其不改父之臣與父之政。是難能也。（里仁第四）

曾子曰く。吾諸を夫子に聞けり。孟莊子の孝や。其の他は能くすべきなり。其の父の臣と父の政とを改めざるは是れ能くし難きなり。

私（曾子）は、かつて孔子先生から、「魯の大夫、孟莊子の孝行の中、外の事は兎も角、

何時までしても、父の用ひた家來と、父の政治の仕方を變へなかつた點は、之れはナカ／＼眞似の出來きぬことである」と聞かされたことがあるとの意。
 猥りに、父の用ひし良臣を退けたり、父の良法を廢したりすると、先徳を辱しめたこととなる。不孝之れより大なるはなし。ソレで孟莊子が、父の臣と、父の政とを改めざるを、かくホメラられたのであります。

七 反省とありて、人を見よごは教へてない

「論語」には、曾子三省の句を始めとし、諸所に反省せよ。己れを見よとは教へてあるが、人を見よとは教へてない。之れはドウ云ふワケであらうか。
 私共は兎角、人を見たりて、己れを見ようとはしない。私は書生時代に、新しい帽子を買つても、手拭を買つても、下駄を買つても直ぐに友達に見付られ、誰でも他人のことにはナカ／＼注意深いものだと思つたことがある。又私は或地へ講演に行つた折、知人を訪ねて店先で話を居ると、ソコへ主婦も出て来て挨拶をされた。其の時、店先を一婦人が通り過ぎました。スルト主婦は主人に「あの奥さんの羽織、アレは二三日前に買ったものであれにはナカ／＼話がありますよ」と云はれた。
 私は之れを聞いて、女の人の他人のことに注意深きに驚きました。併しコンナことに何んほ注意深くても、何んの益もありません。かゝる無用のことには熱心で、反省

することを嫌ふのはどう云ふワケか。

反省と云へば、キレイであるが、ザツクバランに云へば、自分の棚下しをすることであるから嫌ふのは尤である。

けれども反省を怠れば、人に進歩はあり得ない。之れ吉田松陰先生が、「論語」の中で、

曾子曰。吾日三省吾身。(學而第一)

曾子曰く、吾れ日に三たび吾身を省る。

の句を最も愛誦され、一日に何度も、弟子達に向つて

お前、あの句を云つて見よ、

と云はれし所以である。

松下村塾には二階がなかつたが、松陰先生は天井うらへ上れる様にし、休息時には、此の天井うらで静坐し、右手に短刀をぬき持ちて眼を半眼に見開き、考へ込まるゝが

常であつたが、かゝる際でも、不意に

品川(後に内務大臣になつた品川彌二郎さん)

と呼び、品川さんが怪しげな梯子を登りて

先生何にか御用ですか

と天井うらへ顔を出す

お前、あの句を云つて見よ

と云はれ、品川さんが、曾子曰くとやると、よし〜と云つて、ニツコリされたものであると云ふ。

伊豆の下田で、密航を企てた罪は、次第に許されて、親類あづけとまでなり、弟子を教ふることにさへ黙許されて居たのである。此の分では今少し静かにして居れば、全く許されたであらう。然るに幸か不幸か、此の頃天下の形勢が、たゞならぬ状態を呈して來ました。松陰先生は坐視する能はずして、何だか計畫をしたり、幕府へ意見書を

七 反省とありて人を見よとは教へてない

提出したりしました。そんなことから又憎まれて、江戸に護送されることとなりまし
た。其の日の朝早く松陰先生は松下村塾へやつて来て、集まれる弟子達に向ひ、

お前達皆んなで、あの句を云つて見よ。

と云ひ、皆なが聲を揃へて、

曾子曰く、吾日に三たび吾身を省る云々。

の句を暗誦すると、先生は大層悦ばれて、

私は或は歸れぬ身となるかも知れないが其の句さへ覚えて居て呉れば、お前等

人間になれる。役に立つ人間になれる。

と云はれたさうで、之れが松陰先生の弟子達に遺されし最後の御言葉であります。

何せ松陰先生はかくも、練り返し／＼同じことを云はれたのでせうか。人間は大概反

省と云ふことが嫌ひであるから、一度や二度では反省の氣持がしみ込まぬからであり

ませう。

八 克己とあつて人に勝てとは教へてない

「論語」の中に、克己と云ふことは、練り返し／＼説かれてあるも、人に勝つことは、
一度も云つてない。コレはドウ云ふワケであらうか。

人々其の天稟を異にして居るのであるから、他人と自分を比較する必要はない。た
だ各自自分をヨリ善くして行けばいゝのであつて其の自分をヨリ善くして行く爲めに
は、克己が何によりも大切だからであります。

例へば、五尺の高さしかない人間が、六尺の人と歩く競走をする必要がない。コンバ
スが違ふのであるから。たゞ自分の足を練習して、ヨリ多く歩ける様にする丈けが必
要なのです。

又他人から馬鹿と云はれても、はい左様ですかと受け流せばソレまでですが、自分自
身の心に馬鹿な量見が出ると、ソレこそドンナ馬鹿をするか知れない。して見ると、

八 克己とあつて人に勝てとは教へてない

一番恐ろしいもの、自分の大敵は、自分の心中にあるワケです。ソコで克己と云ふことを、何より大切だと教へてあるのです。

例へば此の財布、之れを中心として考へて見るに、此の財布の一番大きな敵は、外の誰でもなくて、自分自身です。

大抵な人は、お金を所持して居る場合、先づ第一に人に取られはせぬかと心配するも、其の實、人に取らるゝのは極めて僅かで、自分の出来心で、無用のことに費ふ方が、ドレ丈け多いか知れません。

同様のことが、何についても云へる。之れ自分の大敵は自分の心中にあると云ふ所以です。

ソレで克己が何によりも大切なのです。

所が此の克己と云ふ奴、ナカ／＼以て實行が六つかしい。酒にしても、煙草にして

も、毒とは知つて居ても、克己して禁酒禁烟を斷行することが容易でない。甘黨は又甘黨で、砂糖の害が分つても、菓子を制限するに難儀をする。「腹八合に醫者入らず」とは知つて居ても、三度の食事さへも程々にするは六つかしい。又しても食へ過ぎたりする。

カウした手近かなことに就てすら、克己は斯く六つかしいのであるから、人の忠言をきく場合なぞとなると、何んぼ「人の忠言はよろこんできくべきである」と分つて居ても、开をよろこんできくことは六つかしい。子路の様によるこび、禹の様に善言を拜すると云ふことは、ナカ／＼出来ない。

併し克己なぞ出来ることではないと云つて、克己しようとの努力を、全然すてたとしたら、ドンナ結果が生ずるであらう。

例へば諸君の中の一人が、朝ねむいのを我慢して起きることが出来なくて、毎朝遅刻するとしたらドウでせう。其人は失職して仕舞ふに相違ありません。又「ア、疲れた」

と云つては、手を休め、「今日はいやだ」と云つては、早や引けする人あらば、其人も失職するに相違ありません。

「オイ肉を買つて来い。オイ刺身を買つて来い」と云つて、少しも克己しなかつたならば、破産するにキマつて居ます。

お互にコレ位のことならば、よく分つて居るので、ドウやらソレ位の克己はして居るではないか。して見ると、克己の實行は、六つかしいには六つかしいが、全然やれぬと云ふことはありません。

○ フランクリンは、道徳を

一、節制。二、沈黙。三、秩序。四、決斷。五、儉約。六、勤勉。七、誠實。八、正義。九、中庸。一〇、清潔。一一、靜穩。一二、純潔。一三、謙遜
の十三に區別して、表を作り、毎夜此の十三項目の下に、點數を記入することにして

諸徳の實行を、ヨリ善くすることに努力した所、其の進徳の上に、大に効果があつたと云ふ。

○ 米國のピイチャと云ふ牧師は、人を憎惡することをしない様にした。又自身を憎む者とも和して行きたいと發願し、憎いと思ふ人には、克己して言葉をかけ。自分を憎む人へは、努めて手紙を出す様にした結果。段々ソレが上手に出来る様になつたと云ふことです。

○ 我國の白河樂翁公は太公望釣魚の繪を床間にかゝけて、何時も
年七十になつても、なほ斯く悠然として時の來るをまつ

此の氣象のありたいものと、想念して、遂に其の氣短のクセを直されたと云ひます。

斯く克己は出来ないことではないのですから、六つかしいと云ふのを口實にして、克己の努力を怠つてはなりません。且つ「論語」に

子曰。苟志於仁矣。無惡也。(里仁第四)

子曰く。苟しくも仁に志さば、悪しきことなし。とあり。之れは嘘にでも、戯談にでも、善い事をしようと思ふたら、善い事をしないまでも、悪いことはしない。例へば西に行かうと思へば、西に向つて走り出さないまでも西に向く。西に向けば、東は後ろになるから、東には行けない。のみならず、善い事をしようと思つて居ると、サウ思はぬ時よりは、一つでも二つでも善い事が出来るとの意味です。

「思ふ丈けならば、何にを思つても勝手に、何んでも思へるが、併し思ふと云ふ丈け

では、何んにもならぬ。全く空中樓閣ではありませんか」

と云ふものもあるも、サウではありません。例へば料理屋へ行つて、今御馳走を食べてると想像する。想像丈けならば、錢は一文も入らずに、唾の出る丈けが得であるかの様に見ゆるも、ソナナことを再々思つて居ると、遂には料理屋へ行くことになる。即ち思ふたことが實現したワケである。之れと同じ道理で、貯金したい。遅刻しまい。休むまい等々と思つて居ると、サウ思はぬ人よりは、ソレが少しでも餘計に出来るに至るではありませんか。

○

出来ぬとか。六つかしいとか、先づ考へると、出来ぬことが、餘計に出来なくなり。六つかしいことが餘計に六つかしくなる。ソレでソナナことは一切考へずに、先づ自己の生活を、ヨリ善く、ヨリ美しくするにはと考へて、プランを立て、其の實行を心掛けて居ると、段々に克己仕難いことも、克己することが出来て、其のプランは徐々に

實現し行くものであります。

九 己を責めて人を責むるな

子曰。躬自厚而薄責於人。則遠怨矣。（衛靈公第十五）

子曰く。躬自ら厚くして、薄く人を責むれば、則ち怨に遠ざかる。

「己を責めよ」と云ふのは、「反省して自己の短所缺點を知り、開を直すことに、力を致せ」と云ふことである。

人によると、「もつて生れた短所缺點は直せるものでない」と云ふも、サウではありませぬ。一寸やソツトで直せぬも、一生懸命になれば直せぬことはありません。

後光明天皇、性雷を畏る。之れを直さんと欲して、迅雷の日、御座を殿端に設けて静坐し、遂に雷を畏るゝに至らなくなり玉うたとの例もあります。

白川樂翁公が、畫家に、太公望釣魚の圖をかゝせて、开を床の間にかけて、朝夕之れに

對して靜坐し、遂に「せつかち」の性偏を更められたと云ふ例もあります。
又廣島縣賀茂郡西志和村青年學校の専任教師丸山更氏は、はじめ數學が頗ぶる不得手
なりしが、いよく明日は入營と云ふ前夜でさへ十二時まで數學を勉強したと云ふ
程に、其の不得手な學科へ力を集注して、遂に數學が人並になつたと云ふ話もありま
す。

缺點短所の直せぬのは熱心の足らぬからです。一つが直せぬと、もう一つのと、力
をぢきに他へ移すからです。一つを直すに何年かゝりても、たとひ一生かゝりてもと
熱心せば、案外早く直せるものです。

女二宮と云はれし丹下マツ女は、愛國婦人會の會員を募集する折、コレと目をつけ
し人は、遂に引き入るゝまで何日かゝりても構はざりしとのこと。カウした彼女は一
番澤山會員を募集し、二度すゝめて聞かざりし人は、見すてゝ、次から次と、勧誘
して歩きし人は、何れもサツパリ會員の募集が出来なると云ふ。ものゝ道理は、同

じこと、缺點短所を直す場合にしても、一つに力を集注し、成功するまでは止めぬ程
に思ひ込まぬと駄目である。横山丸三翁の歌に

淘宮は堀抜き井と心得へて同じ所をよいさゝ

とある。淘宮とは心をよなげること。則ち心の缺點短所を直すには、堀抜き井を拵へる
時の様に、水の出るまで同じ所を深く掘つて行けとの意である。少し掘つて、
コ、は駄目と、早くあきらめて、他へ移つる様であつては、一生井掘りをして居ても、
一つの井も掘れない。

○

「人を責むるな」と云ふワケは、凡そ左の如き次第だからであります。

人の子としては、少しにても親を非難するの心起らば、ソレはやがて大不孝の元とな
るから、大に恐れ慎しむべきであります。されば假りに、親を非難する話を、友達
としたり。不孝者に同情した文字を讀んだりすることは、心してさげなねばなりま

せん。

舜は随分、永い間、其の父瞽瞍と繼母とにイジメられしも、かつて一度も、父や繼母を非難するの心を起さず、ひたすらに「これと云ふも自分の誠の足らぬ爲め」と、自分をのみせめました。ソレで遂には流石の瞽瞍も舜を愛するに至りました。舜に限らず、凡ての孝子はサウでした。此の點大に味ふべきであります。

五八

臣の君に對する場合。部下たる人々の上長に對する場合にしても、日夜寸毫にても上長を非難する念の心に萌さざる様、心掛けなくてはなりません。

ソレを警戒せぬものは、知らず識らずの中に不忠なもの、言を聞いたり、不忠な文を讀んだりして、飽まで不忠の心を育て、仕舞ふものであります。

されば楠正成公は「苟くも君を怨み奉るの一念起らば」と、ひたすらにソレを恐れました。正成の大忠心たる所以はコゝにあるのです。

後三條天皇、皇太弟たりし時、僧成尊問て曰く、殿下常に北斗を拜するや。天皇曰く、月に必らず一拜す、敢て踐祚を祈るに非ず、しかれども時有りて或は念ふ、位に即かば則ち云々せむと、自省るに、此の念不忠に萌す。因て之を拜して以て過を悔るなり。成尊感泣して退く。

カウありたいものです。正成の心と少しも變りがない。

假りにも上長を非難するの心起らば、急ぎソレを制せよ。然からざれば、知らず識らずの中に其の念増長して、やがて不忠の臣となるであらう。やがて下尅上の人となるであらう。

吾々の眼は、西を見る時には、東の見えぬものである様に、吾々の心は人を批評したり、非難したする方へ向くと、自分を見ることを段々しなくなり、徳を積むことの次第に出来なくなるものである。此の意味からしても、人を批評し、人を非難する方へ、

九 己を責めて人を責むるな

五九

心を向けぬ様、心掛くべきであります。

一〇 仁は善の總稱なり

「論語」の諸所に仁の字が使はれてある。
一寸考へると、仁と云へば、人を愛すること、人に親切することを意味するかの如く
思はるゝがサウでない證據には、「論語」に左の如き諸句がある。

樊遲問仁。子曰、愛人。（顔淵第十二）

樊遲仁を問ふ。子曰く人を愛せよ。

樊遲と云ふお弟子、仁に就て質問せしに、孔子は、他人に親切をせよ、ソレが仁だと
答へられたとの意。

汎愛衆而親仁。（學而第一）

一〇 仁は善の總稱なり

汎く衆を愛して仁に親しむ。

汎く何人にも同情せよ。仁徳ある人には接近せよとの意。

仁とか、愛とか、慈悲とかと云へば、何人の頭にも、先づ浮ふのは、人に親切せよ、人に同情せよ、との意味である。併し之れ丈を以て仁の全意義だと云ふことは出来ない。仁には左の如き意義も含まれて居るのである。

子張問仁於孔子。孔子能行五者於天下爲仁矣。請問之。曰恭、寬、信、敏、惠。恭則不侮。寬則得衆。信則人任焉。敏則有功。惠則足以使人。

(陽貨第十七)

子張仁を孔子に問ふ。孔子曰く、能く五のものを天下に行ふを仁と爲す。請ふ之れを問はん。曰く恭、寬、信、敏、惠。恭なれば則ち侮られず。寬なれば則ち衆を得。信なれば則ち人任じ。敏なれば則ち功有り。惠なれば則ち以て人を使ふに足る。

仁の中には、恭、寬、信、敏、惠の五字の現せる意義が含まれて居る。何ぞか。身を持つること恭しければ、人に侮れるが如きことなく。寬大な心を持てば、多くの人の心を得るし。信用さるゝ丈の徳あらば、人々が安心して事を頼むに至るし。善事を行ふに氣輕であれば、手柄が出来るし。又惠み深くあれば、人々其の人に使はるゝことをよろこぶに至るからとの意。

顔淵問仁。子曰。克己復禮爲仁。(顔淵第十二)

顔淵仁を問ふ。子曰く、己に克て禮に復るを仁と爲す。

己の欲に打克て、かゝる場合に斯くするのが禮である、道であると、世人の信じて居る通りを實行して行くのが、仁であるとの意。
斯く仁の中には、他人に對する善事の外に、己を恭しくするとか、己の欲に克つとかの如き、自己に對する善事も含まれて居るのである。

○
孔子は何ぞ、かゝることを、特に力を入れて説いてあるのかと云ふに、世には人の爲めや、國の爲めや、社會の爲めに、盡すことを口にするもの多きも、开は己を深めること、己の慾に打克つことから始めねば駄目だと云ふことに氣付くものゝ、少なきを憂へられてゐる。
今日も之れに氣付くものが少ない。之れ私が孔子の此の教を繰返して、説いて止まざる所以である。

一一 忠 恕

「論語」は、忠恕と云ふことに就て、如何に教へてあるか。今回はソレに就て、お話をして見た。『論語』の中にある、忠恕に關する諸句を味ふ前に、一通り、忠恕の二字を説明しておきませう。

朱子の言に、「己れを盡す之を忠と謂ふ」とあり。曾子の言に、「人の爲めに謀りて忠ならざるか」とある。之れで大概、忠の字の意味が分る。則ち私心をすて、人の爲めに盡すことが、忠であるのです。

忠であれば人に信ぜらるゝに定まつて居る。ソレで忠と信とは形影の若く然かりと云はれて居る。論語には「忠信を主とし」などと、忠信の字、各所に見えて居る。

恕とは「思ひやり」と云ふことで、彼の鮑叔の如きは、其の友管仲に對し、頗ぶる思ひやりのあつた人です。管仲も鮑叔も後には何れも有名な政治家になつたが、二人と

もまだ若かくて貧乏であつた時代に、二人は一緒に商賣をしました。サウして若干の金を儲けました。何んぼ儲けたかは分らぬが、假りに（話の便宜上）百圓儲けたとしませうか。ソレを分配する時に、管仲は勝手に六十圓取つて、鮑叔には四十圓しかやらなんだ。然かるに鮑叔は少しも腹を立てず、「管仲は慾が深くつて、六十圓取つたのではない。家に老いて病める母あるが爲めであるからぢや」と云つたサウだが、コレが則ち思ひやりと云ふものである。

我國神代の神様の中、知惠第一の神様に、思兼の命と云ふ名がつけられてある。自分のことが分ると共に、人の立場に就ても考へてやることの出来るのが、思兼であつて、知惠の源泉コ、にあると云ふ所から、知惠第一の神様が、思兼の命と云はるゝに至つたものらしい。自分のことしか分らぬものは、愚者であることは申すまでもありません。

○

子曰。參乎。吾道一以貫之。曾子曰。唯。子出。門人問曰。何謂也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。（里仁第四）

子曰く。參や。吾道一以て之を貫く。曾子曰く。唯。子出づ。門人問うて曰く。

何の謂ぞや。曾子曰く。夫子の道は忠恕のみ。

孔子先生、或日、門人列席の坐で、參やとお弟子の曾子に呼びかけて、「私は色々な話をして来たが、其の間に一貫の道がある筈ぢや。ソレが分るか」と云はれました。曾子は直ちにニコツトされました。しばらくして孔子先生は坐を立たれた。其の後で門人達が曾子に向ひ、「只今の先生と貴君との問答、アレは何んの意味ですか」と問はれた。ソコで曾子は、「先生の所謂一貫せる道とは忠恕のことです」と云はれました。孔子が如何に忠恕に重きをおかれたるか、此の句で能く分ります。

○

子貢問曰。有一言而可以終身行之者乎。子曰。其恕乎。己所不欲。勿施於人。 (衛靈公第十五)

子貢問うて曰く。一言にして以て終身之を行ふ可き者のありや。子曰く。其れ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿れ。

子貢或日、孔子先生に、「先生、一生之れを用ひてよろしい一言は何んでありませうか」と問はれた。スルト先生、「ソレは恕であらう。則ち自分が人にされて不愉快に思ひしことは、コンナことをしたら、定めて彼の人も不愉快に思ふだらうと考へて、人に對してするな」と云はれました。

何事もない時には、「思ひやり」と云ふことは何んの造作もなく出来る様に思はるゝが、さて何事かあつて、ソコに感情や利害がはさまつて來ると、其の思ひやりがナカ／＼出来ない。全く恕と云ふ一字は一生用ゐて受用盡きずであります。

子貢曰。我不欲人之加諸我也。吾亦欲無加諸人。子曰。賜也。非爾所及也。 (公治長第五)

子貢曰く。我人の諸を我に加ふるを欲せざるや。吾も亦諸を人に加ふる無からんと欲す。賜や爾の及ぶ所に非るなり。

子貢或日、人からされて面白くないことは、自分も人に向つてしたくないと云つて、ソナナこと造作なく出来ること云はんばかりの顔をしました。スルト孔子先生、「ソレはお前(賜は子貢の別名)には六つかしからう」とたしなめられました。

子貢は才物である。才物には大概何んでも容易に出来ると思ふ悪いクセがある。所謂篤く志すと云ふことが缺けて居る。ソコで孔子先生斯く云はれて子貢の頂門に一針を加はれたものであります。

子曰。君子求諸己。小人求諸人。 (衛靈公第十五)

子曰く、君子は諸を己に求む。小人は諸を人に求む。

他人との間に争ひでも起りし場合。相手ばかり悪く思はずに、さて斯くなるには自分の方にも何にか無理がありはせぬかと考へて見る。コレが則ち諸を己に求むで、君子の態度が斯くあるが常である。併し小人はコンナ場合、相手ばかりを悪く思ひ、少しも反省することが出来ない。

「孟子」に、「行ひ得ざるあれば、反つて諸を己に求む」とあるのは、「論語」の此の句と同じことを云つたものです。

諸を己に求めさへすれば、人を恕することが出来ます。

寬則得衆。 (堯曰第二十)

寬なれば則ち衆を得。

苟しくも人の上に立つものは、寬大なることを要する。苛酷ではイケない。寬大ならざるものには衆望歸しない。

此の寬と云ふことも、恕の精神の出る源泉の一である。

子曰。衆惡之。必察焉。衆好之。必察焉。 (衛靈公第十五)

子曰く、衆之を惡むとも必らず察し、衆之を好むとも必らず察す。

多くの人が惡むからとて、直ぐ自分も其人を惡んではイケない。多くの人が好むからとて、直ぐ自分も其人を好んではイケない。能く／＼觀察し、能く／＼吟味した上でないと、好惡しないことにしたい。

かゝるも亦、恕の精神の生るゝ源泉となる。

孟氏使陽膚爲士師。問於曾子。曾子曰。上失其道。民散久矣。如得其情。則哀矜而勿喜。 (子張第十九)

孟氏陽膚をして士師たらしむ。曾子に問ふ。曾子曰く。上其の道を失ひ。民散ずること久し。如し其の情を得ば則ち哀矜して喜ぶこと勿れ。

魯の大夫孟氏が、曾子のお弟子の陽膚を用ゐて司法官(士師)とした。ソコで陽膚は曾子の所へ挨拶に来て、此の際一言を玉はりたしと請うた。ソレに對し曾子は「上に立つものが道にはづれたことをして、人民を苦しめて來たこと、久しいものだ。されば罪人をさばいて白状させた場合、罪を犯したもののばかりが悪いのではない。上に立つものにも罪の一半あるべきを思ひ、ア、氣の毒なものぢやと同情して、トウ／＼白

状させてやつたなぞと、よろこんではならない」と教へられました。

此の一句、今日でも、裁判官や、警察官への良き訓言である。彼等に此の一句を味うて、罪人に對して恕の精神あらんことを希望したい。

一一一 禮儀を正しくせよ

佐世保の港外に、崎戸と云ふ小さい島があつて、ソコに崎戸鑛業所があります。此の炭坑は以前は人氣の荒い所でしたが、今は一變して居ります。其の一變するに至つた主なる原因は

新に坑夫を採用する時に、採用されて後は、コ、と一緒に働いてる人々に對しては勿論、コ、を視察に来た人々にも、道ですれちがふ場合、必らず挨拶すると。誓はせたことでありました。

すれちがふ場合に、挨拶をすると、自分も氣持よく、相手も氣持がよい。一寸したことではあるが、これ位人と人との間を、温かにするものはありません。

又九州の或炭坑では、毎月、月初めの二日間若しくは三日間、毎朝、各戸の主婦をし

て坑夫達の入坑を、坑口まで見送らしめることにして居る。而して其他の朝は同じ心持で我が家の戸口まで見送らすことにして居るが、此の事一つで、各坑夫達の家庭が面目を一新して、一段と平和になりました。

私は最近にカウした事實を目撃して、今更の如くに、古人の禮儀のことを喧しく云つた所以が、分つた様な氣が致しました。

ダラケ切つて居る、此の頃の人の心を引きしめて行くには、先づ禮儀を正しくすることから叫ばねばなりません。

それで今回は、禮儀に關する「論語」の教に就て申述べるといたします。

ちつて「論語」に

子所雅言。詩書執禮皆雅言也。(述而第七)

子の雅に言ふ所。詩。書。禮を執るも皆な雅に言ふ。

孔子先生は常に詩經と書經との話をされた。ソレは詩は人の性情を理むるに必要であり。書は先王の政治を誌したものであるからであります。又禮を守ること、則ち起居動作のことも常に喧ましく云はれた。ソレはダラシのない様なものは、如何程勉強しても、道に入り難いからであります。

孔子先生は何時も斯く口やかましく、禮のことを云はれた。従つて「論語」の中に、禮に就ての教の句が澤山に出て居ります。

先づ人の上に立つ人への教の言葉として、左の如く云はれてあります。

君使臣以禮。(八佾第三)

君臣を使ふに禮を以てす。

上好禮則民易使。(憲問第十四)

上禮を好めば、則ち民使ひ易し。

富而好禮。(學而第一)

富んで禮を好む。

上に立つ人は、手下だと思ふと、つい心がゆるんで、部下には不禮となり易い。ソレで「君、臣を使ふに禮を以てす」とあるのです。上に立つ人が下に對して禮儀正しいと、下の者はよろこんで働いてくれる。ソレで「上禮を好めば則ち民使ひ易し」とあるのです。金が出来ると、横平となり易い。ソレで「富んで禮を好む」とあるのです。次に人の下に使はれてる人達への教訓の言葉として、左の如く云はれてあります。

事君盡禮人以爲諂。(八佾第三)

一二 禮儀を正しくせよ

君に事へて禮を盡せば。人以て諂へりと爲す。

臣たる者が君に對して禮を盡すのは、當り前であるのに、今や世人は當り前のことを爲すものを、諂へりと爲すに至つたと云つて、當時の薄俗を嘆ぜられた語であります。

今日も後輩が先輩に對し、部下が上長に對して禮を盡すと、「彼奴はおべつかする」と悪く云ふ風がある。併し何んと云はれても、先輩に對して禮を盡すの勇氣がなければなりません。

其事上也敬。(公治長第五)

其の上に事ふるや敬。

事君敬其事而後其食。(衛靈公第十五)

君に事ふるには、其の事を敬して、其の食を後にす。

臣たる者が、君に事ふる場合には、先づ其の職務に勉強すべきであつて、食祿のことの如きは考へないでよろしい。賞を希ふの心、事の先きにあるものは、小人にキマつて居ます。

青年などの中には、仲間から冷やかされるからとて、わざと上長に禮せぬものがある。臆病の至りである。仲間に諂へりと云はれても上長には禮を盡せ。上長を心で輕蔑して居ては、ホントの御奉公は出来ぬ。ソコで「其の上」に事ふるや敬」とあるので。又「君に事ふるには、其の事を敬して、其の食を後にす」とあるのは、自分に擔當させられた仕事を熱心にして、月給のことなど考へるなどの意である。

君子義以爲質。禮以行之。孫以出之。信以成之。(衛靈公第十五)

君子は義を以て質と爲し。禮以て之を行ひ、孫以て之を出し。信以て之を成す。

との教訓もある。

君子たる者は、一寸でも義しくないことはしない。則ち「義を以て質と爲し」であらねばならぬのは勿論であるが、同時に人に對して何にか爲す場合、禮儀に氣を付けねばならぬ。親切である場合でも、不禮な態度があると、反つて反感を抱かせることになる。ソレで「禮以て之を行ひ」とあるので。又何にか言ふ場合、不遜な言葉を口から出さぬ様、氣を付けねばならぬ。ソレで「孫以て之を出し」とあるので。「信以て之を成す」とは、自分のしたこと、云つたことには、どこまでも、責任を以て、ソレを成し遂げよとの意である。

○
序手に「禮記」の中にある左の一句に就て、お話をして、此のお話を終ることとしませう。
君と言へば、臣を使ふを言ひ。大人と言へば、君に事ふるを言ひ。老者と言へば、弟

子を使ふを言ひ。幼者と言へば、父兄に孝弟を云ひ。云々。

人の上に立つ君たる人と、お話をする場合には、昔、どこそこに何某と云ふ賢君があつて家來をカウ云ふ風に使つたと、君徳を養ふの一助となるべきことのみを云へ。郷大夫（大人）などとお話をする場合には、何某と云ふ賢臣は、カウ云ふ風にして君に仕へたと云ふ様な徳ある人の御奉公振りに就てのみ云へ。老人とお話をする場合には、年長者は若い者を使ふ時に、斯く／＼の思ひやりがあらねばならぬと云ふ風のことばかり云へ、又年少者とお話をする場合には、父兄に孝弟なるべき道に就て云へとの意である。

○
何ぜカウした教があるかと云ふに、大抵な人は油斷をすると、之れと反對なことを仕勝ちだからである。即ち姑と姑とが話をする場合、兎角嫁の悪口の競争が普通だからである。嫁と嫁とが出會ひし場合、お互に我が姑の悪口を云ひたがるが、普通だから

である。先生同志だと生徒の悪口を云ひ、生徒同志だと先生の悪口を云ひ。主人同志だと丁稚の悪口を云ひ、丁稚同志だと、主人の悪口を云ふのが普通だからである。奉公人に向つて、「君とこの主人も、人使ひが荒いか」などと云つてはならぬ。「君はナカ〜辛抱人ぢや。其の辛抱を續けることぢや、やがていゝ事があるよ」と云ふべきである。即ちカウ云ふ風に相手の人の徳を養ふ一助となるべき様なことのみを云ふべきである。之れが相手を敬し、相手に禮ある所以であります。

一二三 敬に就て

「論語」の中から、敬に關する語句を集めて、味はつて見ませう。

子曰。道千乗之國。敬事而信。節用而愛人。使民以時。 (學而第一)

子曰く。千乗の國を道むる。事を敬して信に、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす。

千乗の國とは、戦車を千もつ國と云ふことで、諸侯の國のことである。其の千乗の國を治(道)むるには、第一に、民事を敬して信用を重んずること。第二に、費用を成る丈け人民にかけぬ様にして、人民を可愛がり。第三には、人民に課役を命ずるには、農閑の時に於てせよとの意。治國の要道を示されたものである。何事をするにも、之れは大事なことをして居るのであると、敬の心を以てせねば、ホ

ントのことが出来るものでない。

季康子問。使民敬忠以勸。如之何。子曰。臨之以莊則敬。孝慈則忠。舉善而教不能則勸。(爲政第二)

季康子問ふ。民をして敬忠以て勸ましむる之を如何ん。子曰く、之に臨むに莊を以てすれば則ち敬す。孝慈なれば則ち忠なり。善を擧げて不能を教ゆれば則ち勸む。魯の大夫、季康子が「此の頃人民が上を尊敬もせず、忠誠でもないが、どうしたらよろしいか」と質問せしに對し、孔子は人民を責めず、先づ自己を責めよとの趣旨で「貴下が身を持つること謹嚴であれば、人民が尊敬の念を起すし。貴下が親に孝であり、子弟を可愛がりなざると、人民が忠誠となるし。又善人は擧用し、善を爲す能はざる者は教へ導く心であらるゝと、人民が奮勵して、善に向ふに至ること受合である」と云はれたとの意。

人が自分を尊敬する前に、先づ自分の内に敬の心あるを要する。

子曰。事父母幾諫。見志不從。又敬不違。勞不怨。(里仁第四)

子曰く。父母に事へては幾やく諫む。志の從はざるを見ては、又敬して違はず、勞して怨みず。

子たるものが、父母を諫めねばならぬ場合もあるが、ソナナ場合には、ソロ／＼諫め、而かも、父母が自分の云ふ通りにしてくれぬからとて、父母を尊敬しなくなつて、云ひつけをきかなくなつたり、父母を怨みてもうコンナ親のために、働いてやるのはイヤになつたと云ふ様なことでは、相成らぬとの意。

どこまでも親は親である。親を尊敬する心は、どこまでも持ち続けねばならぬ。

子曰。晏平仲善與人交。久而敬之。(公治長第五)

子曰く、晏平仲善く人と交はり、久しうして之を敬す。

齊の大夫の晏平仲と云ふ人は、人と一度び友人になれば、其の交際を何時までも續け得る人であつた。それはドンナに永く交際して居ても、其の交際の始めに於ての如く、相手を尊敬したからであるとの意。
朋友との交はりに於ても、敬の心が大切である。

樊遲問仁。子曰。居處恭。執事敬。與人忠。雖之夷狄不可棄也。

(子路第十三)

樊遲仁を問ふ。子曰く。居處恭に、事を執る敬に。人と忠ならば、夷狄に之くと雖も棄つべからざる也。

或時、樊遲と云ふお弟子が、仁の意義を質問せしに、孔子は「平常無事の時に、身を持すること正しく、仕事をする場合には、其の仕事を尊敬して爲し、又人と交はりては忠實であると云ふことであれば、ドンナ野蠻國へ行つても棄らるゝ様なことはな

いと云つて答へられたとの意。

事ある時にも、事なき時にも、もたねばならぬのは、敬の一念である。

子路問君子。子曰。修己以敬。曰。如斯而已乎。曰。修己以安人。曰。如斯而已乎。曰。修己以安百姓。修己以安百姓。堯舜其猶病諸。

(憲問第十四)

子路君子を問ふ。子曰く。己を修めて以て敬す。曰く、斯くの如きのみか。曰く、己を修めて以て人を安んず。曰く、斯くの如きのみか。曰く、己を修めて百姓を安んず。己を修めて以て百姓を安んずるは、堯舜も其れ猶ほ諸を病めり。

子路或時、君子に就て説明を求めしに、孔子は、「己の身を修めて、敬の心を失はぬ様にして居るのが君子である」と云はれた、子路は此の御答へに對して、不満足に思はれたので、「ソレ丈けですか」と反問された。ソコで孔子は、「己れを修むると共に、

人を安心させてやりたいと思ふのが、君子の心である」と、云はれた。子路は尙ほ不
満で、又「ソレ丈けですか」を繰り返された。孔子は止むなく、又々「己を修めて、
下人民全體に安心を與へたいと苦心するのが君子だ。己を修めて、百姓(下人民全體)
に、安心を與へると云ふことは、堯舜でさへも、難事としたことである」と云はれた
との意。

君子と云へばとて、己を修めて敬の心を失はじと心掛くる人に外ならない。

子曰事君敬其事而後其食。(衛靈公第十五)

子曰く、君に事ふる、其の事を敬して而して其の食を後にす。

凡て君に事ふるものゝ心得としては、其の割り當てられし仕事を立派につとむること
が第一であつて、給料のことは、第二とせねばならぬとの意。

今の世にも、仕事はロク／＼出來ぬクセに、給料のこのみ喧ましく云ふ人が多い。

コンナ心掛の人は、人から用ゐられなくなるにキマツて居る。

斯く、君に事ふるにも、政治をするにも、朋友と交はるにも、はた又、父母に仕ふる
場合にも、失うてならぬものは敬の心であると、孔子は念を入れて説かれてあるので
す。

一四 勇氣に就て

「論語」は勇氣に就て、どう教へてあるか。ソレを吟味しませう。

子曰、事君盡禮、人以爲諂也。(八佾第三)

子曰く、君に事へて禮を盡せば、人以て諂りと爲す。

孔子の時代、魯國では、家來は君主よりも威張り、丸で我が足利時代の如くであつた。然かるに孔子は、君に對して立派に禮を盡した。スルト人々が孔子を以て、上に諂ふものであると云つたとの意。

言外に、人が何んと云はうと、上に立つ人を尊敬する丈けの勇氣が、なければならぬとの意がある。

今日も、先輩を先輩とせぬ風あり、衆に媚びずして、先輩は先輩として尊ぶことを要

する。

子曰、由、誨女知之乎。知之爲知之。不知爲不知。是知也。(爲政第二)

子曰く、由、女に之を知るを誨へんか。之を知るを之れ知ると爲し、知らざるを知らずと爲す、是れ知るなり。

由(子路の事)よ、知つてゐることは、知つてゐると云ふと共に、知らぬことは、知らぬとハッキリ云はねばならぬのだ。其の勇氣がないと、人に笑はれたり、間違をしたりするものであるとの意。

先生たる人に、知らぬことを知らぬと云ふ勇氣のなき場合には、誤魔化して、後で笑はるゝことになる。又六つかしい、自分では分らぬ問題に直面した場合、人に相談する勇氣がないばかりに、飛んだ間違をする人もある。

安積良齋の「閑話」の中に

近世一代官あり、支配下の取扱を誤り、農民多数傲訴に及び、いかんともするこ
と能はず、切腹せんと思ひしが、我平日書籍を見たるに今の事に益なきは口惜しと
て、机上にある論語を開き見て「之れを知るを之れ知ると爲し、知らざるを之れ知
らずと爲す、之れ知る也」と云ふに至り、手を拍ちて歎賞し、多数の農民中より長
老二人を招き處置如何すべきを問ひて其の言の如くせしかば無事に治まりたりきと
ある。序手に附記して置く。

見義不爲。無勇也。(爲政第二)

義を見てせざるは、勇なきなり。

此の場合、之れは義として實行せねばならぬと思つても、勇氣なくば開は實行の出来
ることでないとの意。

例へば、美しき婦人が、悪漢にイジメられてる所へ、一人現はれ出でて、其の悪漢を

なぐりつける所を、芝居でも見れば、誰でも痛快を覺ゆるも、さて實際、山中など
にて、一婦人が数名の悪漢に今やはづかしめられんとするを見た場合に、飛び込むと
云ふことは、勇氣なくば、ナカ／＼出来ることではない。

昔、支那に葉公と云ふ人あり、此の人、大の龍すきにて、其の持物一切に、龍の紋を
付けて置く程であつた。眞の生きた龍之れを聞きてよろこび、ソレ程私を好きな人な
らば、一度私の眞の姿を見せてやらうとて、或日黒雲に乗りて、降りて来て、不意に
葉公のお室へ、窓からヌット首をつき込んだ。スルト葉公、一目見て驚き倒れ、氣絶
したと云ふことである。此の話は、列子の中にある一寓話であるが、善を實行するに
は勇氣が入ると云ふことが、此の寓話の中に、よく示されてあるではないか。

子曰。吾未見剛者。或對曰。申枨。子曰。枨也慾焉。得剛。(公治長第五)

子曰く、吾れ未だ剛者を見ず。或人對て曰く、申根と。子曰く、根也。愆焉。剛なるを得ん。

九四

孔子が或時、私はまだ剛者と認むべき人に會はずと嘆息せしに、或人對て、申根と云ふ人があるではないかと云つた。スルト孔子は根は愆があるから、剛者とは認められぬと云はれたとの意。

如何程、強い様でも、愆があると愆でつらるゝ。ソレで之れ位弱いものはないことになる。無欲でなくば強者にはなれぬ。

子曰。孟之反不伐。奔而殿。將入門。策其馬。曰。非敢後也。馬不進也。

(雍也第六)

子曰く、孟之反伐らず。奔て殿す、將に門に入らんとし、其の馬に策て曰く、敢て後れたるに非ず、馬進まざる也と。

魯の大夫孟之反と云ふ人は、齊と戦うて敗れし時、自身殿りをしたが、やつこのことで城まで引き上げ、將に城の門へ入らうとした時に、わざと大きな聲で「私の馬が足がのろいので、トゥ〜一番後になつた」と云つたと云ふ程に、功に伐らぬ人であつたとの意。

自分の功でないことまで、自分の功にしたがるものゝ多い中で、かゝるは珍らしい人と云はざるを得ぬ。而してかく云ひ得るには、ナカ〜の勇氣なくば出來ないことである。

子路曰。子行三軍。則誰與。子曰。暴虎馮河死而無悔者。吾不與也。必也臨事而懼也。好謀而成者也。(述而第七)

子路曰く、子三軍を行ふ、則ち誰と與にせん。子曰く、暴虎馮河死して悔なき者は、吾は與せざる也。必や事に臨みて懼れ、謀を好みて成さん者なり。

一四 勇氣に就て

九五

子路は勇者で、勇氣自慢の男であるから、或時何にかの話の序手に、孔子先生に向ひ「先生若し大軍の將となりて、敵と戦はんとする場合もあらば、多くの門弟中、誰を最も力と致しますか」と云つて、私でせうと云はんばかりであつた。スルト孔子は冷やかな態度で「サウぢやなあ、私は徒手で虎をうち、舟なくして河を渡らうとし、犬死しても構はぬ様な、無茶ものは、力としないよ。私は凡て事に當る際には、恐懼戒慎し且つ謀を好む様なものでなくば、力にはならんよ」と云つて、子路を戒められたとの意。

無鐵砲なのが、勇者なのでない。凡て事に當りて注意深く、此の場合は、どうすべきであるかと、落付いて考へる様でなくば、眞の勇者とは云へない。

子路曰。君子尙勇乎。子曰。君子義以爲上。君子有勇無義爲亂。小人有勇而無義爲盜。(陽貨第十七)

子路曰く、君子は勇を尙ぶか。子曰く、君子義以て上と爲す。君子勇あつて義なければ亂を爲す。小人勇あつて義なければ盜を爲す。

子路、或時、「有徳者は勇氣を尙ぶか」と云つて質問せしに、孔子は「イヤ勇より義が大切ぢや、地位ある人が、勇氣があつて、義理を知らぬ場合には、世を亂すに至り、地位なき人が、勇あつて、義理を知らぬ場合には、泥坊となるに至る」と答へられたとの意。

子路勇氣餘りありて、思慮足らざるの缺點ありしが故に、かく云はれたのである。

一五 過を改むる事

子曰。已乎。吾未見能見其過而内自訟者也。(公冶長第五)

已ぬるかな。吾れ未だ能く其の過を見て、内に自ら訟むる者を見ざる也。

とあるが、之れは孔夫子が、過をした場合に、自分で自分を深く責め、再びコンナ過ちをせぬ様にと、覺悟をキメる人の無いことを慨いての語であります。

無いと云つても、全く無かつたワケではない。孔夫子の身邊に、顔回の如きが居た。

易の繫辭の中に

不善有れば、未だ嘗て知らずんばあらず。之れを知らば未だ嘗て復た行はずんばあらず。

とあるのは、顔回のことを云つたもので、顔回は、過ちをすると、直ぐソレに氣が付

き、氣が付くと、直ぐ又ソレを改める人であつたのです。「論語」の中の

不遷怒。不貳過。(雍也第六)

怒を遷さず。過を貳びせず。

も、顔回のことを云つたもので、顔回は、一度び過ちをすると、能く自から責めて、

同じ過ちを二度せぬ人であつたのです。

又、蘧伯玉の如き人も居た。「論語」の中に

蘧伯玉使人於孔子。孔子與之坐而問焉。曰。夫子何爲對曰。夫子欲

寡其過而未能也。使者出。子曰。使乎。使乎。(憲問第十四)

蘧伯玉人を孔子に使はす。孔子之れに坐を與へて問ふ。曰く。夫子何をか爲せる。

對へて曰く。夫子其の過ちを寡せんと欲して未だ能はず。使者出づ。子曰く。使な

るかな。使なるかな。

とある通り、蘧伯玉は過ちをした場合には、能く自から責めて、過ちを寡くしようと専念した人でありました。

併し、過ちをした場合に、能く自から責むる人は滅多にないのであるから、「私はまだ其の過を見て、能く自から訟むる者を見ない」とまで、孔夫子の云はれたのを、過言であるとは思はれません。

過をした場合には、過をしたと氣のつき次第、ソレを改むべきであることは、元より云ふまでもありません。併しサウとは知りつゝも、ソレはナカク出来ぬことではありません。ソレで「論語」に

過則勿憚改。(學而第一)

過つては則ち改むるに憚ること勿れ。

とあり。「書經」には

過を改むるに、吝なるなかれ。

とありて、過を改むることを、大に奨勵してあります。

憚る勿れとは、遠慮せずにとの意。吝なるなかれとは、ケチン坊が出しをしみをする様に、グヅ／＼するなどの意。憚、吝、此の場合實に適切に用ひられてあると思はれます。

なほ、「論語」に

子曰。過而不改。是謂過矣。(衛靈公第十五)

過つて改めざる、是を過と謂ふ。

とあり。「左傳」に

一五 過を改むる事

人誰か過ちなからん。過て能く改むるときは、善焉より大なるは莫し。

とありて、か程まで古人が過を改むることをス、メラれてあるのに驚かされます。

然るに、世には過を改めざるのみか、中には其の過ちを文るものさへあるので、「論語」に

子夏曰。小人之過也必文。(子張第十九)

小人の過つや必らず文る。

とあり。「書經」に

過を耻て非を作すこと勿れ。

「孟子」に

古の君子(士に立つ人)は、過ては則ち改む。今の君子は、過ては則ち之に順ふ。

古の君子は其の過や日月の食の如し。民皆な之を見る。其の更むるに及ぶや、民皆な之れを仰ぐ。今の君子は豈に徒に之れに順ふのみならんや。又従つて之が辭を爲す。

とあります。

自分の過ちに理窟をつける、ソレが文るであり、「之が辭を爲す」であります。

私の友人に、能く轉宅するものあり。「君は能く轉宅するね」と云ふと、何時でもキツト腹を立て、「僕だとして變りたくはないが、アソコはカウ云ふ次第。コ、はカウ云ふ次第で」と、一ち一ち轉宅の理由を語られる。私は其の時に、何時も、「過や必らず文る」「之が辭を爲す」の古語を思ひ出します。

飲酒家に、禁酒をス、メると、多くは段々節酒しようといふ。サウした折りに、私は

何時も、「孟子」にある、

一〇四

今、人日に其の隣の雞を攘む者あり。或人之れに告げて曰く。是れ君子の道にあらず。曰く。請ふ之れを損じて月に一雞を攘み、以て來年を待ちて然して後に已めんと。如し其の義に非ざるを知らば。斯れ速に已めん。何ぞ來年を待たん。との語を思出します。之れも過ちを文る理窟の一であります。

二千五百年も前から、繰返し々々斯く教へられて來て居るのに、今尙ほ「過を改るに吝なる」人のさても多きことよ。孔夫子をして再び世にあらしめたら、之れを見て、何んと云はるゝでありますか。

一六 恐懼戒心

「死を守つて道を善くす」とか。「正を踏んで恐れず」とかと云ふ方面から見れば、君子程大膽なものはありません。併し他の一面、「過ちを少なくせんとする方面」とか。「及ばざるを恐るゝ方面」から見れば、君子位、小心翼翼たるものはありません。君子の小心翼翼たる方面に就てお話しませう。

さて先づ君子の小心翼翼、恐懼戒心に相當する句を、論語から拾うて、お話しませう。

樊遲問仁。子曰。居處恭。執事敬。與人忠。雖之夷狄不可棄也。

(子路第十三)

樊遲仁を問ふ。子曰く。居處恭に。事を執ては敬に。人と與にして忠ならば、夷狄に之くと雖ども棄つべからざる也。

何んにもせず、私宅に居る時でも、放肆に流れぬ様に。仕事をする時には、敬の心を以て之れに對し、忽にせぬ様に。又人と交る場合には、誠心を盡す様に。心掛けて居る人であれば、ドンナ野蠻國へ行つても、棄てらるゝ様なことはないとの意。

割不正不食。席不正不坐。雖疏食菜羹瓜祭。必齊如也。(郷黨第十)

割正しからざれば食はず。席正しからざれば坐せず。疏食菜羹瓜と雖も祭る。必ず齊如たり。

孔子先生は、魚にしても肉にしても、割目の正しくないものは、お上りになりませんでした。多勢と集合の場合など、自分の身分に相應した席へでないと、お坐りになりませんでした。又別に御馳走のない常の食事の場合にも、必ずツツ、シンで食前祭を

されましたとの意。

仲弓問仁。子曰。出門如見大賓。使民如承大祭。(顔淵第十二)

仲弓仁を問ふ。子曰く。門を出づれば大賓を見るが如く、民を使ふには、大祭を承くるが如くす。

一步門外に出づれば、さてドンナ人に會つても、大切なお客さんとして、其人を取扱ひたい。又上に立つて、下の人を使ふ場合には、大祭のお手傳ひをする時の様な氣持で致したいとの意。

一言にして云へば、人と交際するにも、人を使ふにも、内に敬の心を以て致したいとの意。

君使臣以禮。臣事君以忠。(八佾第三)

君臣を使ふに禮を以てし、臣君に事ふるに忠を心てす。

上が下を使ふ場合には、つい思はず不禮となり易い、されば禮を失はぬ様にと注意すべきである。下が上に事ふる場合には、上の人に對して忠實を第一とすべきであるとの意。

其行己也恭其事上也敬。(公冶長第五)

其の己を行ふや恭、其の上^{かみ}に事ふるや敬。

我身を處するには慎み深くあれ。目上^{めうへ}の人は尊敬せよとの意。

子之所慎。齊戰疾。(述而第七)

子の慎む所、齊、戰、疾。

孔子先生は、モノイミする場合と、戰爭の場合と、病氣の場合とには、常よりは一段

と慎しまれたとの意。

曾子有疾。召門弟子曰。啓予足。啓予手。詩云。戰々競々。如臨深淵。如履薄氷。今而後。吾知免夫。小子。(泰伯第八)

曾子疾あり。門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け、詩に云ふ。「戰々競々」として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」と。今より後、吾免がるゝを知るかな。小子。

曾子、病重く、臨終の間もないことを、自覺せし時、其の弟子達を枕邊に召び集めて、さて云はるゝには、「サ、私の足も手も、身體中見てくれ」と、かく云はれたのは、孝經に「身體髮膚之を父母に受く。敢て毀傷せざるは、孝の初めなり」とあるからであつて、先づ其の身體に故なくして傷一つ付けない爲めに、彼は詩經の句をかりて云へば、「戰々競々」として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」と云ふ程に恐懼戒

心して、やつと傷一つ付けぬのであつた。ソレで「いよ／＼臨終の今、始めて重荷を
おろした様な気がする。お前達よ」と云はれたのであります。

身體に故なくして傷一つ付けることすら、かく恐懼戒心されたと云ふことから、不養生な
生なこととして、病氣をせぬ様、不心得なこととして父母の名をはづかしめぬ様と、同様に
恐懼戒心されたことが想像されます。

以上の諸句を味ひ來たると、君子恐懼戒心の狀、君子の如何に慎み深かりしかど、能
く分ります。

○

序手に他の書からも、此の條に引用し來りてよろしい良句を擧げて、お目にかけるこ
とと致しませう。

良士は瞿々たり。(詩經)

退き省ることを知らざる者は、良士とは云へないとの意。

道は須臾も離るべからず。離るべきは道に非ざる也。是の故に君子は其の睹ざる所
を戒慎し、其の聞かざる所を恐懼す。(中庸)

道から一寸の間も離れてはならぬものである。少しく道から離れても、直ぐ其の悪
影響がある。ソレで君子は、其の思慮見聞の及ばぬ點までも、道から假初にも離れま
いと恐懼戒心されたとの意。

(所不睹、所不聞を、他人の睹ざる所、聞かざる所と、解する人もある)

善人と居ば、芝蘭の室に入るが如し。久うして其の香を聞かず。即ち之と化すれば
なり。不善人と居ば、鮑魚の肆に入るが如し。久うして其の臭を知らず。亦た之れ
と化すればなり。丹の藏むる所の者は赤く、漆の藏むる所の者は黒し。是を以て君
子は必らず其の與に處所の者を慎しむ。(孔子家語)

善人と往來して居ると、何時の間にか善人となる。丁度、香草を置いてある一室へ入
つた様なものだ。しばらくして、いゝ香を感じなくなる。之れは同化したのである。

不善人と往來して居ると、何時の間にか不善人となる。丁度、魚河岸などに行くと、何時の間にか身體が臭くなり、而かもソレを感じないが如くである。丹(朱)を入れて置くと、其の箱中の者が赤くなり、漆を入れて置くと、其の箱中の者が黒くなる。ソレに染るのである。ソレで心掛のいゝ人は、不善人との交際をさけるのであります。此等の諸句も、平常之れを愛誦して居ると、何時の間にか身體中が香しくなります。

一七 子供らしさを去れ

ホーロの言葉に

子供らしさを去れ

とあり。橋本左内の言葉に

稚心を去れ

とある。語は異なれども、意は則ち同じであります。

さて子供らしさとは

可愛がられたい。世話されたい。引立て、貰ひたい等々。自分の方から、人に盡すことは何に一つ考へないで、人からばつかりして貰ひたがることを云ふのであつて、ソレを去れとは、サウした依頼心を早くすて、人を世話する、人を引立てる等々。専ら人の爲めに盡す氣分の人

となれと云ふことである。

キリストは、始めから仕舞ひまで、人のことを憂へて、自分のことは憂へななんだ。孟子に、「君子は終身の憂ありて、一朝の患なし」とある。

然るに普通の人のありては、年が幾つになりても、子供らしさがすて切れぬから、自分の勉強の足りないことは云はずに、先生の教へ方が不親切なのでと云ひ、自分の努力の足りぬことは云はずに、助けてくれぬもんだからと云ひ。又自分の志の堅固ならざりし爲めとは云はずに、罪を境遇にきせたりする。

森村市左衛門さんは、無一文から一代の間に巨富となつた人ですが、此の人十五六歳或家の丁稚であつた時代に、夏の一日、重い荷物を脊負うて使ひに出ました。途中餘りの暑さに堪へかねて、或神社の木蔭で休息しました。其の折り社内では、神主さん

が祝詞をあげて居りました。ソレを聞くともなしに聽いて居て、「六根清淨、六根清淨、人は萬物の靈長、思ふこと成就せずと云ふことなし」との一語に、森村さんは、成程サウぢやと深く感じ入り、爾來此の一語を心の守本尊として奮闘して遂に目的を達するに至つたものであると云ひます。

佛人フアチナンド、デ、レセツプが、スエズ運河の開鑿工事に成功して、紅海と地中海が連絡し、歐羅巴より印度への交通が便利になつたのは、今より六十有餘年前のこととあります。

此のレセツプは少年の時に、一日其の友達に世界地圖を示し、「君コ、をカウ切れば、紅海と地中海の水が通じて、印度へ行くのに、大變便利になるね。僕は大きくなつたら、必らずソレをやつて見せる」と云つたことがあると云ひますが、後年彼は果してスエズ運河を拵へました。

○
米國一大學長の書いたもの、中に、「私は少年の時に、二人の友人と共に競馬を見物に行つたことがある。其時一人は僕は將來騎手になると云ひ、他は僕は將來競馬場の持主になると云つたが、後年二人とも果して其の言の如くになりました」とあるのを讀んだことがあります。

○
我國にもソレと類似の話がある。新井白石少年時代に、其の友大澤に向つて云ふ。

おれは學問を以て天下に名をあらはし。すくなくとも、槍、銃箱を持たすほどの身分にならなければ置かぬつもりだ。さうならぬうちは、再び貴公に面會すまい。

大澤云ふ

おれは一生のうちに、千兩の金を積んで見よう。サウならぬうちは、斷じて貴公に再會すまい。

斯く云ひ合つて別れたが、白石は後日大學者となり、大澤は千兩持となりました。

○
以上は古人の話であるが、現存せる人の中にも、サウした話の持主が少くない。さき頃三井物産の新嘉坡支店長を辭し、今は自由人となつて精神界に働いてる高橋敏太郎氏の如き其の一人である。

高橋氏は滋賀縣彦根の生れで、貧乏の爲めに小學校へ行くことすら出來ぬ境遇から出立した人である。氏の談る所によると

どうか東京へ出て苦學したいと思つて居たら、數年後ソレが實現し、其の次に洋行したいと願つて居るとソレが又實現し、次に實業界へ入りたいと願つて居たら、三井物産の社員たることが出來。三井物産の社員となつてからは、五十歳になつたら、自由人となつて精神界に盡したいと念じて居た所、五十歳までに新嘉坡支店長たることが出來て、五十歳退職も實現した。

と云ふ。

斯く志あれば道ありですのに、自分の志の確乎たらざりしを罪せず、境遇のせゐにして仕舞ふのは慨はしい。

○

「論語」に

子曰。不患人之不己知。患不知人也。(學而第一)

子曰く。人の己を知らざるを患へず。人を知らざるを患ふ。

大概な人は、人が自分を知ってくれないと云つて、不平を言つたり、自分には知己がないと云つて、さむしがつたりするが、ソレよりは先づ自分が今までドンナに人を見そこなつて来て居るかに就て考へよ。さらば自分を知ってくれないとの不平は義理にも云へないとの意。

とあるのは、ツマリ「人が自分を知ってくれない」と云ふが如き、子供らしさをすてよと云ふことである。又

子曰。不患人之不己知。患其无能也。(憲問第十四)

子曰く。人の己を知らざるを患へず。其の能くすることなきを患ふ。

孔子先生。或時一人が自分を知ってくれないことは、意とするに足らないが、自分に足らぬ所あり、能くせざる所あることの方は、之れを氣にして、足らざるを足し、能くせざるを能くする様、心掛けねばならぬ」と云はれましたとの意。

斯くなり得て、茲に始めて、子供らしさをすて、大人となり得たと云ふものであります。

一八 君子を目標とせよ

と云ふことに就て語らう。「論語」の中に、「君子の如くなれ、小人の如くなるな」と云ふことが、何回も何回も繰り返し〜説かれてある。之からサウした句を引いて、お話ししよう。

子曰。君子食無求飽。居無求安。敏於事而慎於言。就有道而正焉。可謂好學也。已。(學而第一)

子曰く、君子は食を求むるなく、居安きを求むるなく、事に敏にして言を慎し、有道に就て正す、學を好むと謂ふべきのみ。

修養に熱心な君子とも云はるゝ様な人は、衣食住のことを考へないで、先づ善事を行ふのに敏ならんことと、言葉を慎しむことと、及び有徳の人の感化を受けることとに

就て考へる。コンナ人でなくば、學を好む人とは云へないとの意。

人間はソレは善事だ、せねばならぬと氣がついても、例の不精が出て、兎角、後でもよからうとなりやすいから、コ、にわざ〜「事に敏にして」と云はれたのである。

又「論語」に學とある場合、此の學の字は、人の人たる道を學ぶことを意味して居るものと、承知して居て下さい。

子曰。君子周而不比。小人比而不周。(爲政第二)

子曰く、君子は周して比せず、小人は比して周せず。

徳の高い君子と云はるゝ様な人は、何時も公平で偏頗でない。感情で動かさず、何時も道理で冷かに判断して動く丈の修養が出来てゐるからである。修養に心掛けない普通の人は兎角、感情に動かされて、理智を失ひ勝ちであるから、何時も偏頗で公平は望まれないとの意。

一三二
全く其の通りであるから、小人を見て反省し、君子を手本として、何時も公平であり得る様修養したいものである。

君子無終食之間違仁。造次必於是。顛沛必於是。 (里仁第四)

君子は終食の間も仁に違ふなく、造次必ず是に於てし、顛沛必ず是に於てす。道に志すと云ふからには、御飯を食べる間でも、かりそめの間でも、つまづく程の間でも、心から仁徳を思ふことから離れない様でなくては駄目だとの意。成程サウです。一寸でも、人を憎んだり、羨望したりする様な氣が出る様では、まだ修養が出来るとは云へない。

子曰。君子之於天下也。無適、無莫、義之與比。 (里仁第四)

子曰く、君子の天下に於けるや、適もなければ、莫もなし、義と之れ與に比ふ。

君子には固定した意味では、敵も味方もない。どんな人でも、正しいことを云つたりしたりする間は味方であつて、間違つたことを、云つたり、したり、し始めれば敵である。人を見ずして、義か不義かを見るとの意。私どもは、兎角、人に黨したがる傾がある。此の一節味ふべきである。

子曰。君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。 (里仁第四)

子曰く、君子は徳を懐ひ、小人は土を懐ふ。君子は刑を懐ひ、小人は恵を懐ふ。君子と云はるゝ様な人は、徳のこのみ懐ひ、小人と云はるゝ様な人は、安樂にくらせるこのみ考へてる。君子は過つて刑にふるゝこのない様にと、注意し、小人は何にか甘いことはないかと、例へば誰か何にかくれさうなものちやとか、何にか利權にありつきたいとのみ考へるとの意。全く其の通りです。我れにも小人の心の動くことあり、反省すべきである。

子曰。君子^ハ喻^ル於^ニ義^ニ。小人^ハ喻^ル於^ニ利^ニ。 (里仁第四)

子曰く、君子は義に喻り、小人は利に喻る。

「得を見ては義を思ひ」で、君子には義を思ふクセがついてるから、怪我にも罪を犯すことなきも、小人は「何にか甘いことはないか」と、何時も利益のことばかり考へるクセがある。それだから、罪に陥り易いのであるとの意。

お互に義を思ふクセを、心につけたいものである。今に日本の政治家と云ふ政治家が皆な義を思ふクセのある人になる日の來らんことを熱望して止まない次第である。

子曰。君子^ハ欲^ス訥^ニ於^ニ言^ニ而^{シテ}敏^ニ於^ニ行^ニ。 (里仁第四)

子曰く、君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す。

兎角人間は、言ふ程には行へぬものである。それで君子は言葉を慎しむことを心掛け

たものであるとの意。

言葉多きものは品少なし、ホントである。

子謂^テ子夏^ニ曰^ク。女^ハ爲^レ君子^ノ儒^ト。無^レ爲^ニ小人^ノ儒^ト。 (雍也第六)

子夏に謂て曰く、女君子の儒となれ、小人の儒たる無れ。

折角、修養の話を聞いても、我がために聞かずして、「あの話はあの人に聞かせたかつた」なぞと、人のために聞く人がある。之れを小人の儒と云ふ。我がためにき、我がために學ばねば君子の儒とは云へない。

凡ての見聞を、我がためにせば、人の進境、計り知るべからざるものがあらう。

宰我問曰。仁者^ハ雖^モ告^テ之^レ曰^ク。井^ニ有^レ仁^焉。其^レ從^ニ之^也。子曰。何^ヲ爲^ス其^レ然^也。君子^ハ可^レ逝^也。不^レ可^レ陷^也。可^レ欺^也。不^レ可^レ罔^也。 (雍也第六)

宰我問うて曰く、仁者は之に告げて井に仁ありと曰ふと雖も、其れ之に従はんや。子の曰く、何爲ぞ其れ然らん。君子は逝しむべく、陥るべからざる也。欺くべく、罔すべからざる也。

一二六

世の中には、善人はどうも人に欺かれさうで、あぶなかくして、見て居れぬと云ふ人がある。宰我也才子であつたから、同じ様な心配からコンナ質問を發したのであらう。「先生、仁者に、今井へ人がはまつたと告げるものがあつたら、人を疑はぬ仁者は、ア、さうかと、井へ駆付け付けて、飛び込むでせうか」と、宰我が質問せしに、孔子は「井へ人がはまつたと云へば、井の傍までは駆けて行くだらうが、飛び込むまい。欺かれはしようが罔されはしまい」と云はれたとの意。何ぜサウなのであらうか。欲がないからである。イクラ才があつても、欲のある人は人に陥れられたり、罔されたりする。人に警戒しなくても、無欲なものは、たいした痛手を受けぬ。人よりは我が欲を警戒せよ。

子曰。君子坦蕩々。小人長戚々。(述而第七)

子曰く、君子は坦蕩々たり、小人は長に戚々たり。

徳ある人の心は、いつも平かに、廣々して居るが、不徳な人は、いつも心配げである。との意。

「善には善の報あり、悪には悪の報あり」と云ふことは、良からぬ事をすれば、何時も心がビクビクして落付かぬ一事で、充分證明されてるではないか。

司馬牛問。君子。子曰。君子不憂、不懼。(顔淵第十二)

司馬牛君子を問ふ。子曰く、君子は憂へず、懼れず。

徳の高い、正しい人には、憂へると云ふことも、懼れると云ふこともないとの意。前の句と、同じ意義の句である。

子曰。君子成_レ人之美。不成_レ人之惡。小人反_レ是。 (顏淵第十二)

子曰く、君子は人の美を成し、人の惡を成さず、小人は是れに反す。

徳の高い君子は、人の善を爲すを見れば、开をホメたり、獎勵したり、助けたりするも、人の惡は、見て見ぬふりする。併し普通の人にはソレが出来ない。其の反對に行

く場合が多いとの意。我國の儒者の中では、木下順庵先生の如き、生涯一度も人の惡を云はざりしと云ふ。

子曰。君子和而不同。小人同而不和。 (子路第十三)

子曰く、君子は和して同せず、小人は同して和せず。

正しい人は、正を守ることを第一として居るから、正しからざる人と事を共にすることなきも、何人に對しても和氣を失ふが如きことなし。小人は之れに反し、利害を同

じくする場合には、何人にとても組むも、心中には相和すると云ふことがないとの意。

お互の心の中に、小人の心もあれば、君子の心もあるので、よく分る。全く其の通りである。

子曰。君子求_レ諸己。小人求_レ諸人。 (衛靈公第十五)

子曰く、君子は諸れを己れに求む。小人は諸を人に求む。

人との間に争ひのある様な場合、徳のある人は、之れは私にも罪があると、争ひの原因を自分に求めますが、不徳な人は人ばかり責めて、自分を責めることを知らないとの意。

お互に、日夜人ばかり責めて居りはせぬか。

孔子曰。君子有三畏。畏天命。畏大人。畏聖人之言。(季氏第十六)

孔子曰。君子に三畏あり。天命を畏れ。大人を畏れ。聖人の言を畏る。

徳ある人は、天命を畏れ、大人物を畏れ、聖人の言に斯くありと云はるゝと畏るゝものだとの意。

今の世には、無畏の人多し。さればこそ憚る所なく有らゆる悪事がなせるのである。

子曰。不知命無以爲君子也。(堯曰第二十)

子曰く、命を知らざれば、以て君子たること無し。

天命を知らぬものは、君子とは云へないとの意。

之れが「論語」最終の一句である。「論語」が學の字で始まり、命の字で終れる、注目すべきである。

子曰。君子謀道不謀食。耕也餒在其中矣。學也祿在其中矣。君子憂道不憂貧。(衛靈公第十五)

子曰。君子は道を謀て食を謀らず。耕や餒其の中に在り。學や祿其の中に在り。君子は道を憂へて貧を憂へず。

何ぞ君子は、道のことを心配して生活のことは心配せぬかと云ふに、百姓が耕作に骨折つてさへ、大水が出たり、暴風が吹いたりして其の勤勞を無駄にすることがある。然かるに人の道を學ぶ方は、ホントに人格者になれさへすれば、萬に一も間違なく、ソレ／＼の地位に採用されて、生活に困るが如きことはないからであるとの意。

此の頃の人は、生活第一と云ふも、孔子は道德第一と云ふ。先づ食ふことが第一と云ふものを使ふものなし、食ふこと第一では食へぬ。道德第一のものは、人に信用され、自然食へることになる。孔子の説の方が正しいこと、以て知るべきである。

孔子の教は、言はゞ自力教であるが、併し自力で凡てをやらうとしたものでないことは、最後に天命と云ふことの出て来て居るので知れる。人事を盡した後は、天命を俟つの外ない。

なほ「論語」に

子曰。君子義以爲質。禮以行之。孫以出之。信以成之。君子哉。

(衛靈公第十五)

君子は義を以て質と爲し。禮以て之を行ひ。孫以て之を出し。信以て之を成す。君子なるかな。

とある。此の一句は前にも一寸説明したが、今回は一つ詳しく説明したいと存じます。

さて「君子は義を以て質と爲すとは、一寸でも曲つたことは本質的に違ひでなくば、

君子とは云へぬとの意である。即ち根が誠實であることが、君子の資格の第一なのである。

例へば彼の松平信綱の如きは、誠實な人の確かに一人でありました。

信綱、疾んで將に卒せんとせし折り、養母「お前はこれまで一度も念佛を唱へたことはないが、もう間もなく最期だから、サア一聲でも念佛を申して、冥福を祈るべし」と申せしに、信綱「イ、エ、お母さん。私には御奉公より外にも何にもありません。御奉公、御奉公が、私の念佛です」と云つて、御奉公、御奉公と、低聲に唱へつゝ、瞑目したとのことである。

かくまでに誠實な人は、サウあるものではない。併し誰にもカウありたいとの願ひはある。ソレがせめてもの幸ひであるから、「カウありたい」「カウありたい」と思ひ續けるがよろしい。其の思ひ續けると云ふことが、ソコへ至る階段であります。併し根が正直、誠實であれば、ソレでよいと云ふものでなく、君子には第二の資格と

して「禮以て之を行ふ」の心掛けがなければならぬ。禮は自他共に其の心持をよくする。例へば顔知りの間柄でありながら、ロク／＼挨拶もせず、すれ違ふと、自他共に不愉快であるが、叮嚀に挨拶すると、する者も、される者も愉快である。且つ禮儀の正しいことは、災難除けにもある。

伊藤仁齋先生の家へ入らうとした泥坊が、節穴から、深夜先生夜食し、奥様の給仕せる様子、兩者共に如何にも禮儀の正しいのに感じ、入れなくなつて了つたのみか、遂には先生の門人となつて、眞人間になつたと云ふ話がある。

君子の第三の資格は、「孫以て之を出し」「信以て之を成す」である。「孫以て之を出し」とは、言葉に氣をつけて、非禮の言を口から出すなどの意である。「信以て之を成す」とは、飽まで言責を重んずることを意味する。實際「口は禍の門」と云ふ位であるから、言葉に氣をつけねばならぬ。

人を悪口する事。多辯なる事。法螺を吹く事。

何れも慎しまねばならぬが、なほ

早口でものを言ふ事。言葉の調子の高すぎる事。低くすぎる事。

なども注意せねばならぬ。

古人の教の中には

お客様の前で、子供を叱るのは勿論、犬馬も叱つてはならぬ。

とある。カウした教が皆「孫以て之を出し」の中に含まれてるのである。

「孝經」の中に、「口に擇言なく」とある。口から出る言葉の中から、嘘とホントとを選擇する必要なく、皆な眞實なるを、「口に擇言なく」と云ふのである。此の「口に擇言なく」は、「信以て之を成す」に相應して居ます。

一九 聖人に常師なし

孔子先生には、きまつた先生と云ふものがなかつた。然らばドウして學んだのであらうか。ソレは「論語」に

子曰。見賢思齊焉。見不賢而内自省也。(里仁第四)

子曰く。賢を見ては、賢からんを思ひ。不賢を見ては、内に自から省る。

賢人を見ては、私もあゝありたいものと發奮し、良くない人を見た場合には、私の内心にも、アンナ不良分子がありはせぬかと反省せよとの意。

子曰。三人行必有我師焉。擇其善者而從之。其不善者而改之。

(述而第七)

子曰く。三人行く必ず我師あり。其の善き者を選んで之れに従ひ其の不善なる者は之を改む。

茲に三人あり。其の中の一人は自分で、他は善き者と、不善者とであるとせば、善き者は手本として、其の眞似をし。不善者の方は「コンナことをしてはイカン」と反省する意味の手本とせよとの意。

とあるので分る通り、則ち天下至る所、何人をも師とされたのであります。全くカウした心掛の人々には「社會は大學校」なりであります。

其の上に孔子先生は、天を師とされました。

子曰。予欲無言。子貢曰。子如不言。則小子何述焉。子曰。天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。(陽貨第十七)

子曰く。予言ふことなからんを欲す。子貢曰く、子如し言はずんば則ち小子何をか

述べん。子曰く、天何をか言はんや。四時行はれ、百物生ず。天何をか言はんや。孔子先生、此の頃弟子達の様子、たゞ言をよろこぶのみで、實行に遠ざかる風あるを見て慨き、一日「私はモウ言を以て教ふることは止めましょう」と云はれました。スルトお弟子の子貢、此の言をきいて驚き「先生がお言葉でお教へ下さらぬこととならば、私共はドウして先生の道を受け傳へて行くことが出来ませうや」と云はれたので先生は「天は一言も云はれざるも、春夏秋冬行はれ、萬物生長して居るではないか。其の通り口で云はなくても私の一舉一動がお前達を教へ導き得る筈だ。否、口で云はずに行で示した方がいゝやうだ」と。さとれました。

子曰。加我數年。五十以學。易可以無大過。(述而第七)

子曰く。我に數年を加し、五十以て易を學ばしめば、以て大過なかるべし。

此の句の五十は、間違つてコ、へ入つたもので、たゞ尙ほ私に數年の命を假し與へて下さつて、易を學ぶことが出来たら、更に進退存亡の理を明らめ得て、大過なきに至り得るであらうとの意です。とあるので分ります。

「易」は、天を師として道を説くので、例へば

明地中に入るは明夷、君子以て衆に莅み。晦を用ひて明なり。とある。折角のタイ松も、地中の穴へ入れて仕舞うては、明がないも同然となる。丁度其の様に、餘りに明知を人の穴さがしなぞに用ふると無知の人と同様になる。ソナ穴さがしなぞはせぬ方が利口なのである。則ち「晦を用ひて明なり」である。澤上に水有るは節。君子以て節度を制し德行を議す。澤に水が有り過ぎて、外へあふれ出て居るのを見れば、節度の萬事に必要なるを思ふべきである。

霜を履んで堅氷至る。

霜を見る頃ともならば、間もなく堅氷の冬來るべきを思ひ、其の用意をすべきである。人間は何ぜ來るべき者の遂に必らず來ることを、きびの兆を見て察せぬのであるか。

澤木を滅す大過。

水がなければ木は生長せぬが、水が有り過ぎると木が枯れる。人間も恵まれ過ぎると、却つて役に立たぬ人間となる。

と云ふ風の説き方をする書である。

孔子先生、此の「易」を葦編三たび絶つ程讀まれたと云ふから、無論大に天を師とするの理を學ばれたことでありませう。

我國の二宮尊徳先生も、之れとキマつた師匠をもたざりしも、誰からでも學び、其の上にて天を師とされし人である。二宮先生の天を師とされしことは、先生の歌に

音もなく香もなく常に天地は書かざる經をくりかへしつゝ、

とあるので分ります。先生は天地の經文に大道大法は明示されてあると確信し、常に注意深く天地の觀察を怠らざりし人であります。

何人にも此の孔子先生や二宮先生の心掛は望ましいが、殊に中年以後の人々にはカウした心掛があつて欲しいものです。

二〇 聖人の行狀

中江藤樹先生は、論語の中、特に郷黨の一篇を重んじ玉ひ

郷黨の一篇、夫子徳光の影迹を畫き出して以て後學聖心を求め得る所以の筈蹄を開示す。蓋し明德本と無方、無體、無聲、無臭、是を以て高明を極めて中庸に導くの聖心、之を方策に布くこと能はず、故に唯だ影迹を描畫して以て聖心を其中に寓す、學者宜しく至善を期して其の迹を襲はず、聖心を得て以て師範と爲すべし。と云はれてある。此の一篇から聖人の行狀を學ぶべきであります。

君在踧踏如也與々如也。(郷黨第十)

君在せば、踧踏如たり。與々如たり。

君前にある場合には、恭敬を極むる中にも(踧踏如たり)、君を愛するの心が充分に見

えて居ねばならぬ(與々如たり)。古語に「敬餘りありて愛足らざれば則ち疎なり。

愛餘りありて敬足らざれば則ち慢なり」とあります。イクラ恐れ入つて居ても、イヤイヤ恐れ入つて居るのでは反つて失禮となる。イクラ恐れ入つて居ても心中に君前にあることをよろこんで居るものでなくば、ホントの忠臣とは云へない。之れは子の父に對する場合、後輩の先輩に對する場合に於ても、云へることであります。

孔子於郷黨恂々如也似不能言者。(郷黨第十)

孔子郷黨に於ては恂々如たり。言ふ能はざるものに似たり。

孔子が、たま／＼郷里に歸り、其の父老の間にある時には、恐れ慎みて(恂々如)、一言も發することの出来ぬ様な、様子であつたとの意。

聊か成功したのを鼻にかけて、郷里の父老に對してすら、威張り散らすものと、雲泥の差があるではないか。

郷人飲酒杖者出斯出矣。郷人儼朝服而立於阼階。(郷黨第十)

郷人の飲酒には杖者出れば、斯に出づ。郷人の儼には、朝服して阼階に立つ。

故郷の人々と、會食する様な場合には、杖者(六十歳以上の老人)が退席した後でなくば、退席せず。又故郷の人々が、鬼やらひ(福は内鬼は外)をする折りには、何んだ馬鹿らしいことをすると笑はれずに、其の古い習慣を尊ばれて、わざわざ禮服をつけて、東の階段の所まで出られたとの意。

古い風俗習慣と云へば、一から十までケナシたがる、今の生意氣な青年に、特に此の一ヶ條を讀ませたい。古い風俗習慣は、明白に非理なるものでない限り、凡て孔子の如くに之れを尊重したい。

伊藤仁齋先生が、近隣の人々が寄つて井がへを始めると、自分も出て手傳はれ、「先生はよろしいよ」と云はれても、「イヤ私も此の水を飲んでるからなあ」と云つて、無理

に手傳はれたサウなが、此の時の仁齋先生の心持が、孔子の心持と合致して居る。

不時不食……不多食……雖蔬食菜羹瓜祭。(郷黨第十)

時ならざるを食はず。……多食せず……蔬食菜羹瓜と雖も祭る。

孔子は、季節季節のものでなくば、口にせられなんだ。初物とか、季節はづれのもは食されなんだ。初物などを好んで食することは、經濟上よくないばかりでなく、衛生にもよくないことです。……孔子は多食されぬ人でもあつた。大抵な人は多食して居る。長壽者に限り少食である。……どんな粗食の場合でも、箸を執つた場合に、先づ其の食物の一部を神に供へ、神や先祖に感謝してから食事をされた。所謂食前祭をされたのである。

我國では、水戸の烈公が、農人形を拵へ、此の人形を何時も、御膳の一隅に置き、食事の度毎に、先づ農人形を祭られたのは、有名な話である。

私わたくしなぞも、子供こどもの時に、箸はしをいたゞいてから食たべぬと、母ははに叱しかられた。其その御蔭おかげで今いまだに箸はしをいたゞいてから食たべぬと、氣持きもちが悪い。良よい習慣しふくわんは子供こどもの時ときからつけねばならぬ。ソこに親おやたるもの、最大責任さいだいせきにんがある。

席不正不坐。(郷黨第十)

席せき正ただしからざれば、坐ませず。

一寸坐ちよつとざふとんが曲まがつて居ゐても、一寸椅子ちよつとすが曲まがつて居ゐても、氣きにすると云いふ風ふうであつたとの意い。

但馬聖人たじませいじんと云いはれた、池田草庵先生いけださうあんせんせいは、机つくえの上うへの硯すずりの置所おきどころ、筆ふでの置所おきどころ、妻楊枝つまやうじの置所おきどころは勿論もちろん、二階にかいへの階段かいだんの、上のほの時ときの具合ぐあひ、降おりる時ときの具合ぐあひまで一定ていして居ゐたと云いふ。

此この頃ころは、行儀ぎやうぎのよい人ひとが少すくなくなつた。ソこレで此この一節せつ尙は更さら尊たく見みえる。

迅雷風烈必變。(郷黨第十)

迅雷風烈じんらいふうれつ必かならず變へんず。

鳴雷らいめい甚はなはだしく、暴風雨はうふううの折をりなど、孔子こうしは必かならず容かたちを改あらため、衣冠いぐわんを正ただして坐まし玉たまうたとの意い。

孔子こうしは、天てんを敬けいせられし人ひとであるから、天地異變てんちいへんの場合はあひには、自然しぜんに、無意識むいしきに、斯かく衣冠いぐわんを正ただされたのである。此この頃ころは、人ひとの心中しんちゆうからカウした氣持きもちが全まったく失うしなはれて來た様やうである。今日尙こんにちほカウした人ひとがあると。うれしいが……。

郷人飲酒杖者出斯出矣。郷人儼朝服而立於作階。(郷黨第十)

郷人きやうじんの飲酒いんしゆには、杖者ぢやうしやい出いづれば、斯こに出いづ。郷人きやうじんの儼だには、朝服ちゆうふくして作階そかいに立たつ。

夫子故郷ふしこきやうに歸かへりて、郷里きやうりの人々ひとと、宴會えんくわいし玉たまふが如ごとき場合はあひには、六十歳さいじゅうじゅう以上の老人らうじん(杖者ぢやうしや)の席せきを立たたるゝまでは、敢あへて席せきを立たれなんだ。之これ老人らうじんを尊たふとんでゝありま

す。

年の暮に、郷人が集まつて、疫病神を追拂ふ式(儼)をやり始むると、夫子は朝服をつけわざ／＼階段の所まで出て、其の古禮に對して敬意を表されました。

厩焚子退朝曰傷人乎不問馬。(郷黨第十)

厩焚たり。子朝より退きて曰く。人を傷けたりやと。馬を問はず。

夫子の御留守に厩が焚けました。お歸りになつた時に、厩の焚けたことを申上ぐると、夫子は、「人間に怪我はなかつたか」と問はれた丈で、馬はどうかとは、一言も云はれなんだ。普通の人でしたら、コンナ場合、うっかり「馬はどうした」と云つて、「人間に怪我はなかつたか」とは、口にせざる所であります。

不用意の一言位、よく其の人の人柄を言ひ現はすものはありません。

朋友死無所歸曰於我殯。(郷黨第十)

朋友死して、歸する所なければ、曰く、我に於て殯せよ。

孔子は、遠方から來て居る、友人や門弟が病死し、近親者の近くに居ない場合には、我家で納棺し、近親者の來るまで、我家に安置されたとの意。

我國の細井平州先生は、論語の愛讀者で、論語にあることを、一ち一ち實行しようと努められし人であつて、此の一ヶ條も實行を心掛け、平州先生一代の間に、隨分澤山の門弟や友人の爲めに、葬式をし、墓石を立て、やりました。

見齊衰者雖狎必變見冕者與瞽者雖褻必以貌凶服者式之式負版者有盛饌必變色而作。(郷黨第十)

齊衰者を見れば、狎ると雖も必ず變ず。冕者と瞽者とを見れば、褻と雖も、必らず貌を以てす。凶服者は之を式し、負版者を式す。盛饌あれば必ず色を變じて作つ。

喪服の人を見れば、其の人狎々しい間柄であつても、常の容を變ぜられました。衣冠

の人と、片輪者とに會つた場合には、开は心安い人であつても、必ず敬禮されまし
た。

車で外出した場合、途中で喪服の人に會へば他人の喪にあるを悲しみ玉うて、車前
の横木によりかゝりて敬意を表されました。又途中で國の戸籍を負へる者に會へば、
同じく車前の横木によりかゝつて敬意を表されました。
人に招待されて、立派な御馳走が出ると、主人の厚意に對して、必ず立ちて禮を致
されました。

子與人歌而善必使反之而後和之。(述而第七)

子人と歌ひて善ければ、必ず之を反さしめて、而る後に之を和す。

孔子は、人と集りて詩を歌はるゝ場合、あゝいと思ふ詩があると、「もう一度」と云
つて、二度歌はせ、御自分も、再び歌はれたと云ふ意。

歌や詩に限らず、善い事を聞けば、之れを確かめ、又筆記でもしておく様にした
のである。

○

孔子聖人は、斯くの如き行狀の人であつた。聖人の行狀の、手にとる様に見えてる事
は、何によりも、尊いと云ふ意味で、近江聖人は郷黨篇を第一に尊信されたのである。
聖人の行狀は、確かに私共の手本である。

一一一 聖人は徳を尊んで心を尊ばず

今回は「聖人は徳を尊んで心を尊ばず」と云ふことにつき、例の如く、「論語」の句を引用してお話したい。

子曰。學而時習之。不亦説乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎。 (學而第一)

子曰く、學びて時に之を習ふ、亦た説ばしからずや。朋遠方より來る有り、亦た樂しからずや。人知らずして慍らず、亦た君子ならずや。

人の人たる道を學びて、寸時も忘れずに、开が實行に努力するは、うれしいことである。心を同じくする未見の友の、遠方からわざわざ訪ねて來てくれることも、うれしいことである。又他人がドンナに知つてくれなくても、少しも腹を立てずに居られる

と云ふことは、君子でなくば、出來ぬことであるとの意。

聖人は徳を尊んで心を尊ばぬ證據には、コ、に人の人たる道を學ぶとあつて、心のよしとする所を爲せ、ソレが道だとは、云つてないではないか。

曾子曰。吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。 (學而第一)

曾子曰く、吾れ日に三たび吾身を省る。人の爲めに謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。習はざるを傳ふるか。

人の爲めに盡す場合、自分のことの様に、忠實にあり得たか。友人に對し、充分信實を盡したであらうか。又習ひもしないこと、云はゞ私見に過ぎないことを、云つたりはせなかつたかと、曾子は、毎日三度づつ反省されたとの意。

何れ古人は、習はざるを傳ふることを、きらつたのであらうか。後進に對して、先輩

間の公論を傳へるのはよろしいが、私見を傳へて、若しも後進を過ることあつては、ならぬからである。

自分の私見よりも、先輩間の公論、世間衆知の議論の方を、我が行爲の標準とせよとは、古聖人の教であるから、曾子は「習はざるを傳ふること」を恐れられたのである。

子曰。道之以政。齊之以刑。民免而無恥。道之以德。齊之以禮。有恥且格。(爲政第二)

子曰く。之を道くに政を以てし。之を齊するに刑を以てすれば、民免れて恥無し。之を道くに徳を以てし、之を齊するに禮を以てすれば、恥有つて且つ格る。法令で命令したり、禁止したりして、刑を犯したものは罰すると云ふ丈の政治では、人民が畢竟法律にふれさせねば、よいのだと考へるに至る。併し若し、人民を

導くに徳教を以てし、尙ほもれなく徳にス、ましむるために、世の風俗習慣を正しくして、ソレで又制して行くことにすれば、人民が過をした場合、自から恥づるに至るから、自然に人民の行ひが正しくなつて來るとの意。

徳とは天下の道德のこと、禮とは世の風俗習慣を云ふのであつて、二者を以て人民を教へ導くべしと云つて、各自己が心を標準とせよとは云つてない。物の長さはモノサシで度れ、目分量ではオカヌと云ふと、同じである。

子曰。述而不作。信而好古。竊比於我老彭。(述而第七)

子曰く、述べて作らず。信じて古を好む。竊かに我が老彭に比す。

商の賢大夫老彭は、古聖賢の言説せられし所に據り従ひ、刑を標準として凡てを爲したが、私も其の通りだと、或時孔子が云はれたとの意。

述べて作らぬのは、「聖人は徳を尊んで、心を尊ばぬ」からのことである。

二一 聖人は徳を尊んで心を尊ばず

子曰。志於道。據於德。依於仁。游於藝。(述面第七)

子曰く。道に志し。徳に據り。仁に依り。藝に遊ぶ。

人間は先づ人の人たる道に志し、道に志すからには、徳を第一の據り所とせねばならぬ。徳によるからには、仁を第一の依り所とせねばならぬ。尙ほ其の上に禮樂射御書數の諸藝にも通達することを心掛けねば、ならぬとの意。

今日の人々は、仁義道德を第一の據り所ともせず、禮樂其他の諸藝にも通達しようと思ふから、床しい人が少なくないのである。

徳に據れ、仁に依れと、かく力説してあつて心によれと云つてないのは、之れ又一聖人は徳を尊んで、心を尊ばぬ精神の現はれである。

子曰。我非生而知之者。好古敏以求之者也。(述面第七)

我れ生れながらにして之を知る者にあらず。古を好み敏以て之を求めし者なり。

私だとして、生れたまゝ人の道を知つて居たと云ふのではない。古聖賢の言行を好み、知らんと努めて、之れを知り得たものであるとの意。

古聖の言行を知らんと努めて、己が行爲の標準と、孔子はせられたのであつた。孔子は自身サウせられた上にて、門弟子にもサウせよと希望されたのであつた。

子曰。篤信好學。守死善道。危邦不入。亂邦不居。天下有道則見。無道則隱。(泰伯第八)

子曰く。篤く信じて學を好み、死を守て道を善くす。危邦には入らず。亂邦には居らず。天下道有れば則ち見はれ。道無ければ則ち隠る。

道によらねばならぬと堅く信じて、其の道を尙も學び、道の爲めには、場合によりては、死をもじせな。將に亂れんとする國へは足を踏み入れず、亂れたる國には居るな、國に道ある時には、出でて仕へ、國に道なき時には、出でて仕へな、隠れて居れとの

意。

人の人たる道を學べ、道の爲めには死をもじせざれと云ふ、此の一段の趣旨も「聖人は徳を尊んで、心を尊ばず」の精神に外ならぬ。

子張問善人之道。子曰。不踐迹。亦不入於室。(先進第十一)

子張善人の道を問ふ。子曰く、迹を踐まざれば亦た室に入らず。

子張と云ふお弟子が、或時「善き人になる道」を尋ねしに、孔子は「古聖賢の足跡をふみ行へ」と、答へられたとの意。

孔子はどこまでも、永い間に幾多の聖賢が出て定められてある道、古聖賢の足跡を踏んで行くことを、主張されてある。

子曰。由也。女聞六言六蔽矣乎。對曰。未也。居吾語女。好仁不好學其蔽也愚。好知不好學其蔽也蕩。好信不好學其蔽也賊。好直不好學其蔽也絞。好勇不好學其蔽也狂。(陽貨第十七)

其蔽也絞。好勇不好學其蔽也狂。(陽貨第十七)

子曰く。由也女六言六蔽を聞けりや。對て曰く、未し。居れ吾女に語らん。仁を好みて學を好まざれば其の蔽也愚。知を好んで學を好まざれば其の蔽也蕩。信を好みて學を好まざれば其の蔽也賊。直を好みて學を好まざれば、其の蔽也絞。勇を好みて學を好まざれば、其の蔽也亂。剛を好みて學を好まざれば、其の蔽也狂。

孔子、或時、門人の子路に向ひ、「お前に六言の六蔽と云ふことに就き、お話をしたかね」と云はれた。子路「まだ承はりませんが」と答ふると、それでは坐れ、話をしよう」と云つて、左の如く語られた。

人を愛するのはよろしいが、たゞ愛心のみありて、道を學ばぬものは、其の愛、婦人の仁となり易い。ソコが弊害ぢや。知識を好むのはよろしいが、道知らざるもの、知識はとりとめのなきものとなり易い。ソコが弊害ぢや。信義を重んずるのはよろし

二一 聖人は徳を尊んで心を尊ばず

いが、道^{みち}を知らざるものゝ、信義^{しんぎ}を重んずことは兎角^{とかく}、俠客^{けいかく}の所行^{しよぎやう}の如くなり易い。ソコが弊害^{へいがい}ぢや。正直^{しやうぢき}であることはよろしいが、道^{みち}を知らざるものゝ正直^{しやうぢき}は、人の非^ひをせめて、毫^{ごう}も假借^{かしゃく}せざることに成り易い、之^これを絞^かと云ふ。ソコが弊害^{へいがい}ぢや。勇氣^{ゆうき}のあるのはよろしいが、道^{みち}を知らざるものゝ勇氣^{ゆうき}は、亂暴^{らんぼう}と成り易い。ソコが弊害^{へいがい}ぢや。剛強^{かうきやう}なるはよろしいが、道^{みち}を知らざるものゝ剛強^{かうきやう}は、氣違^{きちがひ}沙汰^{さた}となること多し、ソコが弊害^{へいがい}ぢや。との意^い。

斯^かく孔子^{こうし}は、繰^くり返^{かへ}し〜人^{ひと}の人たる道^{みち}を學^{まな}べと説^とかれてある。

聖人^{せいじん}が徳^{とく}を尊^{たふ}んで、心^{こころ}を尊^{たふ}ばざるの趣旨^{しゆし}、隨分^{ずいぶん}、念入^{ねんい}りに説^とかれてあるではないか。

一一一 聖人は甚しきを爲さず

子曰^し中庸^{ちゆうよう}之爲^レ徳也^ト。其^レ至^レ矣^ナ乎^ナ。民鮮^{キョト}久矣^ト。(雍也第六)

子^しの曰^{いは}く、中庸^{ちゆうよう}の徳^{とく}たるや、其^レれ至^レれるかな。民^{たみ}鮮^{すくな}きこと久^{ひさ}し。

中^{ちゆう}とは、過^{くわ}、不及^{ふきふ}なく、左傾^{さけい}も、右傾^{うけい}もせざること。庸^{よう}とは、萬古^{ばんこ}不易^{ふい}と云^いふ事^{こと}。孔^{こう}

子^しは此^この中庸^{ちゆうよう}と云^いふことを、至極^{しごく}の徳^{とく}として尊信^{そんしん}して居^をらるので、其^レの頃^{ころ}、段々^{だんぜん}、

中庸^{ちゆうよう}の道^{みち}に叶^{かな}ふ人^{ひと}の少^{すく}なく成^なり行^ゆくを見て、嘆^{たん}ぜられた語^{こと}である。

私^{わたくし}共^{とも}は又^{また}、今日^{こんにち}は孔子^{こうし}の時代^{じだい}に比^ひし、中庸^{ちゆうよう}を行^{おこな}ふ人^{ひと}の、更^{さら}にヨリ少^{すく}なくなつたこと

を、嘆息^{たんそく}せざるを得^えぬ。

子釣^{しつり}而不^レ網^{シテ}。弋^{シテ}不^レ射^{シテ}宿^ナ。(述而第七)

子^し釣^{つり}して網^{あみ}せず。戈^{よく}して宿^{しゆく}を射^いず。

一一二 聖人は甚しきを爲さず

孔子の若かりし時には、老親に差上げたい爲めと、祭の爲めには、釣に行くことはあつたが、網をうつことは、かつて一度もしなかつた。戈（はじき弓）で、鳥をとることはあつたが、宿鳥をとる様なことは、かつて一度もしなかつたとの意。中庸の道を行ふとは、つまりかく、甚しきを爲さぬのを云ふのである。

子温而厲。威而不猛。恭而安。（述而第七）

子温にして厲。威あつて猛からず、恭にして安し。

孔子と云ふ、先生は、温順に見えて、底に嚴肅な所あり。威光はあるが猛々しい所なく。恭々しくして居て、而かもドコかくつろいだ所のある人であつたとの意。

之れは、門弟達が孔子先生に接した感じを寫した語である。孔子が中庸の徳を得た結果は、斯く其の容貌の上に、現はれて居るのであつた。

子曰。恭而无禮則勞。愼而无禮則蕙。勇而无禮則亂。直而无禮則絞。

子曰く。恭にして禮なければ則ち勞す。愼みて禮なければ則ち蕙る。勇にして禮なければ、則ち亂る。直にして禮なければ、則ち絞す。

恭しいのはいゝが、ソレも度を越せば、固くなつていけない。愼しむのは、結構なことであるが、ソレも度を越せば、ビク／＼することになつていけない。勇氣のあるのは宜しいが、ソレも度を越せば、亂暴となる恐れがあつていけない。正直であることにしても、度を越せば、猥りに人を責めて、少しも假借しなくなるからいけない。白河樂翁公は、天性正直な人であつた。従つて其の青年時代には、人の微過をも容る能はざるの缺點があつたが、公は之れに氣が付くや否や、畫工を召して、太公望釣魚の繪をかゝせ、开を居室に掛けて、此の缺點を去るべく修養されたものであると云ふ、かくして樂翁公は中庸の人となられた。

子曰好勇疾貧亂也人而不仁疾之已甚亂也。(泰伯第八)

子曰く。勇を好みて貧を疾むは亂なり。人にして不仁なる之を疾む甚しきは亂なり。

勇を好むものは果斷である。其の果斷な人にして、失意の境遇に落ち入らんか、必ずや不平を起して亂暴を爲すに至る。又茲に不徳な人あり、周圍の人々が其人を餘りに憎めば、遂に自暴自棄となるに至るとの意。

中庸の道を歩む爲めには、之れも注意の一であらねばならぬ。

或曰以德報怨何如子曰何以報德以直報怨以德報德。(憲問第十四)

或曰く。徳を以て怨に報いば如何。子曰く、何を以て徳に報いん。直を以て怨に報い。徳を以て徳に報ゆ。

コ、では徳は恩とか恵みとかを意味する。或人、老子の「徳を以て怨に報ゆ」との語

を引き、怨みのある人にも恩を施すと云ふことに就き、どうでしようかと、孔子に質問した。スルト孔子は「それでは何を以て恩を受けし人に報ゆるのですか。怨みある人に對しても公平であり、恩を受けし人には恩を返すソレでよいぢやないか」と云はれたとの意。

老子は、怨みあるものにも、恩を施せと云ひ、孔子は、怨みあるものにも公平であれと云ひ、恩を施せとまでは云はない。孔子の説の方が中庸を得て居る。

以上の諸句を味ひ來れば、孔子が如何にも中庸の道に精進して、甚しきを爲さぬ人でありしかが、ハツキリするではないか。

二三 度を越さぬ様に

孔子の道徳は、中庸と云ふことを中心として居ることは、既に述べたが（前條）聖人は甚しきを爲さず」の中に、なほ其の補遺として、左の諸句を掲げ、ソレを説明しておきませう。

子曰。關雎樂而不淫。哀而不傷。（八佾第三）

子曰く。關雎は樂んで淫せず。哀んで傷らず。

詩經の初めに、「關々たる（和ぎ鳴く）雎鳩（みさご）は河の洲にあり云々」の詩がある。此の詩は周の文王の后妃の徳をたへしものであつて、詩の趣旨は、「樂しんでも有頂天とならず。悲しいことがあつても、身を損ねる程には至らない」と云ふにある。孔子は、常々中和の徳を説かるゝから、其の趣旨に叶へる此の詩のことも、折りある

毎に、お話しされしものと見えます。

正しい人程、馬鹿に悦こんだり、無闇と哀しんだりはせぬものである。自から制してサウなるのでなく、自然にサウなるのである。而して性情の正を養ふ爲めには、かゝる詩を折り／＼愛誦するがよいのです。

季文子三思而後行。子聞之曰。再斯可矣。（公治長第五）

季文子三たび思つて而る後に行ふ。子之を聞きて曰く、再びせば斯れ可なり。

魯の大夫の季文子と云ふ人は考へ過ぎて決斷力の足らぬ人であつた。ソレでかく、「一度びカウと決斷したことを、今一度、念の爲めに考へて見るのはよろしいが、ソレを又考へると迷つていけない」と云はれたのであります。今の世にも、一方に、もつと考へてせよと云はねばならぬ人と、サウ考へ過ぎてはと云はねばならぬ人と、二通りの人物があります。

子曰。孰謂微生高直。或乞醯焉。乞諸其隣而與之。 (公治長第五)

子曰く。孰か微生高を直と謂ふや。或ひと醯を乞ふ。諸を其の隣に乞うて之れを與ふ。

當時、魯の國に於て、微生高は評判の直人でありました。併し孔子先生は、彼を直人とは見なかつたのです。何んで直人と見なかつたかと云ふに、「或人が酢をくれ」と云つて來た時、自分の所になかつた、ソツト隣家から貰つて來て、自分の所にあつた様な顔をして與へた。此の小事の中に、彼の名を釣り、美を掠める精神が現はれてるからであります。人の根性を見るには、かく幾微なる點に於て見ねばならぬのであります。

子曰。巧言令色足恭。左丘明恥之。丘亦恥之。匿怨而友其人。左丘明恥之。丘亦恥之。 (公治長第五)

子曰く。巧言令色足恭なるは、左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ。怨を匿して其の人を友とするは、左丘明之を恥づ。丘も亦之を恥づ。

言葉はブツキラ棒でよろしい。無愛嬌でよろしい。禮儀はザツトでよろしいと云ふワケではないが、併し餘りに言葉を飾り、餘りに人の機嫌をとり、又餘りに恭しくするのは、云はゞ心に求むる所ありて、詐りをするのであるから、古の左丘明はソナことを恥ぢてしなかつた。私もソレは恥づべきことと思ふ。又左丘明は、心中に於ては其人を怨んでをりながらソレを匿して、表面其人と友達交際をするのも、詐りをするのであるから、开を恥づかしいこととした。私も开は恥づかしいことと思ふと、或時、孔子が云はれましたとの意。かく孔子は、外を飾つて、内に誠なき行爲を卑しとせられたのであります。

子不語怪力亂神。 (述而第七)

子。怪、力、亂、神を語らず。

聖人は常を語りて怪を語らず。徳を語りて力を語らず。治を語りて亂を語らず。人を語りて、神を語らず。

子曰可與共學。未可與共適道。可與適道。未可與立。可與立。未可與權。(子罕第九)

子曰く。與に共に學ぶべし。未だ與に道に適くべからず。與に道に適くべし。未だ與に立つべからず。與に立つべし。未だ與に權るべからず。

「何々先生が見えて、某所で修養の會がある。君行かないか」と、誘つて見玉へ。早速有難うと云つて、同行を請ふものが案外に少ないものである。一度や二度は同行しても、與に熱心に道を研究しようとするものは、更に少ないものである。與に熱心に道を研究しても國の爲めに、家を忘れて、與に朝に立ち得るに至るものは、又少なく

なる。與に共に朝には立ち得ても、若し夫れ變に處し得るものに至つては、極めて稀れだと云はざるを得ぬ。ソコに至ることは六づかしい。併しながら道を學ぶからには變に臨みて權を制し得る所まで、修行せなくてはなりません。

二四 人生の快樂

「人生の快樂」に就て、孔子の考へはどうでしたか。「論語」によりて、ソレを尋ねて見ませう。

子曰。學而時習之。不亦説乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎。(學而第一)

子曰く。學で時に之を習ふ。亦た説ばしからずや。朋あり遠方より來る。亦樂しからずや。人知らずして慍らず。亦君子ならずや。

人の人たる道を學びて、寸時も忘れずに開が實行に努むることは、悦(説)ばしいことではないか。自分の密に道を行へるを知りて、遠方から心を同じくする人の、訪れて來てくれることあらば、楽しいことではないか。人間は電車の中で、一寸席を譲つて

も、譲られた人が禮を云つてくれぬと腹が立つ程に、一寸したことをしても、知られることを欲するものである。然かるに、人にあり、其の人一生かくれて善事を爲し、誰にも知られなくても、ソレを少しも氣にせぬとせば、其の人こそ君子と云うてよろしい人ではないかとの意。

孔子は以上の三樂を、人生最大の快樂として數へ、名譽や富貴やは、數へてないのである。後の儒者は、論語の此の句を、君子の三樂と評して居る。

○

後に紀洲頼宣の附家老となつた安藤直次は、成瀬隼人正などと共に一萬石に封ぜらるべきの所、間違つて八千石に封ぜられた。然かるに直次は、十年間、ソレに就き一言も不平を云はず、顔にさへ出さなんだ。フトしたことから此の事が知れ、家康の方で驚いて、更めて一萬石に封ぜられ、且つ二千石づつの不足十年間分をも給與されたことであつた。人知らずして慍らずとは、斯かるを云ふのである。成程之れは君子でな

くば出来ぬことである。

子曰。賢回也。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。賢回也。(雍也第六)

子曰く。賢なるかな回や。一簞の食。一瓢の飲。陋巷に在り。人は其の憂に堪へず。回や其の樂を改めず。賢なるかな回や。

食物と云へば、小さな竹で拵へた食器にあるだけ。飲みものはと云へば、小さな一つの瓢にあるだけ。而して其の住居は、裏長屋だ。之れ程貧乏したら、大概なものは、もう道徳も、へちまも、云つては居れぬと亂れ出す所であらうに、顔回は平氣で、道を楽しんで居る。貧賤、窮乏によりて、少しも心を動かさぬ。顔回はエライと、曾て孔子が云はれたとの意。道を樂しむことを、人間第一の樂しみとして居ればこそ、かゝる語が出るのである。

子曰。飯疏食飲水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。(述而第七)

子曰く。疏食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて之れを枕とす。樂み亦た其の中に在り。どんなに貧乏しても、貧乏の故を以て、人間の樂しみはなくならぬ。貧乏とは別に、人生の樂しみがあるとの意。之れは前節と同意義の語である。

子曰。知者樂水。仁者樂山。知者動。仁者靜。知者樂。仁者壽。(雍也第六)

子曰く。知者は水を樂しみ。仁者は山を樂しむ。知者は動き、仁者は靜かなり。知者は樂しみ。仁者は壽し。

知者は例へば水の如し。何物にも凝滞しない。ソコで水を樂しむとか、動くとか、樂しむとかの語が、知者について出て來るのである。仁者は例へば山の如し、無爲にして草木を育て、居る。ソコで山を樂しむとか、靜かとか、壽しとかと云ふ類の語が、

仁者と云へば思ひ出さるゝのであるとの意。實際、樂しむとか、靜かとか云ふ風の氣持で日々を過して行くと云ふことは、知あり、仁ある人でなくば出来ないことである。

子之燕居申々如天々如。(述而第七)

子の燕居申々如たり。天々如たり。

無事閑暇の折りの孔子先生の御様子、弟子が形容した語である。申々はノビノビ。天々は和悦。孔子無事の折りには、何如にもウレシさうで、又ノビノビして居られたとの意。

心に邪なき人でなくば、例へ一時でも、眞にニコニコ、ノビノビした氣分では居られないものではない。

子曰君子坦蕩々小人長戚々。(述而第七)

子曰く。君子は坦蕩々たり。小人は長へに戚々たり。

道に志す、君子の心は、何時も平に、廣々して居るけれども、小人の心は、何時も心配や不愉快なことで一杯であるとの意。全く其の通りである。

関子侍側閤々如也。子路行々如也。冉有子貢侃々如也。子樂若由也。不得其死然。(先進第十一)

関子側に侍す閤々如たり。子路行々如たり。冉有子貢侃々如たり。子樂しむ。由の若きは其の死然を得ざらん。

門弟にかこまれて居る場合、孔子は、関子騫の、外和にして内剛なる有様。子路の剛強な姿。子貢の和樂の貌を見て、ソレソレ有望な青年であるので、开が師たることをうれしく思はれた。併したゞ子路に就てのみは其の剛強過ぎることから、恐らく天壽

を全うすることは出来まいと心配されたとの意。

天下の英才を集めて其の師たることは、確かに大きな楽しみであるに相違ない。

子曰。君子易事而難說也。說之不_レ以_レ道。不_レ說也。及其使人也。器之。小人難事而易說。說之雖不以_レ道。說也。及其使人也。求備焉。

(子路第十三)

子曰く。君子は事へ易くして説ばしめ難きなり。之を説ばしむるに道を以てせざれば説ばざるなり。其の人を使ふに及ぶや之を器にす。小人は事へ難くして、説ばしめ易し。之を説ばしむるに道を以てせざるも説ぶ也。其の人を使ふに及ぶや、備らんを求む。

君子を悦ばすことは、道にはづれたことをしては悦ばぬから、悦ばし難い。併し人を使ふ場合には、一藝一能あらば、よいとする風であるから、事へ易い。之れに反し徳のない小人は、道でないことでも、少しく金でも贈つたり、御馳走でも食べさせたら、悦ぶから、よろこばすことは、仕易いが、人を使ふ様な場合には、一人に對してアレもコレもと要求するから、事へ難いとの意。
道に志す君子から云ふと、道を行ふこと以外に人生の楽しみはないのである。

徳のある人でないと、心に眞の平和はあり得ぬし。又徳からでないと、眞の智慧も出ない。之れ「徳は才の主なり」とか「誠は愛を生じ、愛は知を生ず」とかの語ある所以である。

コツチに野心、邪心、名譽心あつての仕事は、餘程考へてやつても、ソレが人に見えて感心されぬ。之れに反して、親切でしたことは、左程考へてしなくても、人からは何時までも感心さるゝ。則ち後から見ると、親切でしたことは、最上の智慧でしたこ

とも同様に見える。愛からでない、ホントの知は生じない。

一八〇

なほ、カウ云ふ覺悟で居ることも、人生を愉快にする上に役に立ちます。

子謂衛公子荆善居室始有曰苟合矣少有曰苟完矣富有曰苟美矣。(子路第十三)

子、衛の公子荆を謂ふ。善く室に居れり。始め有るに曰く。苟か合まれり。少く有るに曰く。苟か完たしと。富に有るに曰く。苟か美なりと。

衛の大夫たりし公子荆は、足るを知るの人であつて、能く家を治められました。ソレで孔子「始めて家を持ちし時、家財器具至つて乏しかりしも、チヨット集つたと云つてよろこばれ、其の後少しく家財道具がある様になると大分完備したと云つて、よろこばれ。又しばらくして十分にある様になると、やあ〜美しくなつたと云つてよろ

こばれ。何時も満足して居られた」と云つて、彼を讚美し、當時の勢力家達に諷せられました。

一五 喧嘩の種

先日大阪で「教訓こゝろ得歌」と云ふ本を見付けて買ひましたが、其の本の序文に予教訓書を作らんと欲し、其旨をある師に語りければ、親子兄弟嫁姑喧嘩の種。無用の事と申さる。人を教ゆるの書にして喧嘩の種とはこゝろ得がたく。又其のよしを尋ねけるに。師の云はく。汝知らずや孟子は古しへの賢人なり。其の賢人の仰ける君臣の道すら反て君臣不和合の種となれり。「君臣を見る事、土芥のごとくする時は、臣君を見る事寇讎の如くす。」是を君たる方の御こゝろ得に取玉はゞ難もあるまじけれども。左はなくて家來の方に取。我旦那常々のあしらひ土芥のごとし。さらば我等も此以後は旦那を見る事寇敵の如くすべし。古へは召ざる所の臣あり用あらば歩行はだしにても來るべきに。又しては呼くさる疾あり。朝に至る事能はず。孟子の例に任せて御めし毎に作病と出かけ、我君をして堯舜の君たらしめ

んと欲し。仰せ事あるごとに君の非をさぐりかけ、言數重り終につゝき放さる。「賢人の教さへ自他の取違ひにて教訓書が反て身の災ひとなれり。又ある家の嫁姑談義の座より歸り、彌中あしく成たといふ咄あり。いかにと問へば、嫁といふものはいか様にしても姑を御馳走せねばならぬものと片手打にきびしく戒めらる。本より悪強き姑なれば、彌逆立嫁の仕方御説法の通りにあらずと、説法の詞をあげ。兎齒をかんでかみかける。後には嫁もたへがたくして、終に離縁せり、是御説法が反て離縁の種となりたるなり。故に親孝行の書は親子の前へ出しがたし。出せばたちまち親子喧嘩。是見よ孝行といふものはかくこそ有べけれど、書を以て公事の種とす。列女傳は夫婦の前に出しがたし。出せば忽ち女夫喧嘩。女房といふものはかくこそあるらめと。是より頻に女房をうとんず。是皆教方の片手うち自他の取ちがひにしてかくはなりゆくなり。云々

とあり。如何にも左様と感心したことでありました。

されば福澤先生も云へる如く、「女大學は男子讀むべからず」であります。

此の書の本文、こゝろ得歌。父の心得の中に

いんぎんに子をあしらへば冥加あり。先祖代々守りたまへば。

子實と常にはいへどかんしやくの、おこつたときは、言語どうだん。

老て子に従ふ事とがてんせば、子にうとまるゝことは有まじ。

とあり。之は父の誦すべき歌で、勿論子の誦すべき歌ではありません。

子の心得歌の中に

わけもなふ打るゝとても親の事。杖のしたにてことほりをいへ。

念比に親に事ふる其人は。自然と天のしゆごを蒙る。

とあり。之れは父讀むべからずであります。

母の心得歌の中に

それはといふは子供の時ぞかし。成人しては旦那同前。

とあり、之れは子讀むべからずであります。

母に對する子の心得歌の中に

いつまでも親の目からは子供なり。子どもごゝろになるが孝行。

とあり、之れは母、讀むべからずであります。

舅の心得歌の中に

不便さや自身の親をふりすてゝ、他人の我をたのむ花嫁。

とあり、之れは嫁、讀むべからずであります。

嫁の心得歌の中に

とくをきて機嫌うかゞひ用をきゝ、何かな角がな御ちそふをせよ。

とあり。之れは舅、讀むべからずであります。

姑の心得歌の中に

何事も嫁のこゝろに任すべし。次第々々に移る世なれば。

とあり。之れも嫁、讀むべからずであります。

姑に對する嫁の心得歌の中に

姑の御召ときかばかちはだし、われから見てもうつくしいもの。

とあり。之れは姑、讀むべからずであります。

兄の心得歌の中に

弟に何がな角がな分てやれ、やればやる程末ははんじやう。

とあり。之れは弟、讀むべからずであります。

弟の心得歌の中に

あら笑止、兄弟わけ目争ふは、おやのかたみをさくやうな物。

とあり、之れは兄、讀むべからずであります。

夫の心得歌の中に

ふり任せ内を預る女房は、氣づかひもなき手代なりけり。

とあり、之れは妻、讀むべからずであります。

妻の心得歌の中に

みちんでも心そむけば忽ちに、八まん地ごくにおつる成けり。

とあり、之れは夫、讀むべからずであります。

君の御心得歌の中に

こたつから道ゆく寒さ知るならば、人の上にも立ぬべきなり。

とあり、之れは臣、讀むべからずであります。

臣の心得歌の中に

世の人がへつらひ也といはゞいへ、君のごきげんとるが奉公。

とあり、之れは君、讀むべからずであります。

凡て教訓書に對する場合、立場立場で、讀むべき所が違ふことを忘れぬ様にし、讀む

べからざる所は讀まぬ様に心掛けたいものであります。

「論語」にある

子曰。巧言令色鮮矣仁。(學而第一)

子曰く。巧言令色鮮かな仁。

とても、これは口先ばかりお上手で、腹に誠なきものへの教訓の言葉であつて、無口な不愛想なものが讀んではならぬ句である。

サウした人には別に

言思忠。

言は忠を思ひ

の教訓があります。

言葉数の足らぬのは、親切心がないからである場合が少なくない。無口は何時でもよいとは云へぬ。之れ「言は忠を思ひ」の教訓ある所以。

又、

子曰。質勝文則野。文勝質則史。文質彬彬。然後君子。(雍也第六)

子曰く。質文に勝てば則ち野。文質に勝てば則ち史。文質彬彬々。然して後に君子。下地がドンナに誠實でも、外飾りが足らねば野卑に見える。外の飾りが過ぎて、内、誠の足らないものは、輕薄に見える。内に誠ありて、外の飾り(則ち、口上も、服装も、等々)も立派であつて、ソコではじめて眞の君子と見えるとの意。

一二六 枝葉と根幹

先日或漢籍専門の學校の學生十數名と會談したが、其の折り學生諸君は、いとも眞劍に

私等の様に、漢籍ばかり學んで居ると、氣をつけないと、時勢に後れる様な氣がして仕様がありませんが、どうでせう。

と質問された。私は其の時、兼好法師の「徒然草」にある

或者、子を法師になして、「學問して、因果の理をも知り、說經などして、世渡るたつきとせよ」と云ひければ、教の儘に說經師にならむ爲に、先づ馬に乗り習ひけり。「輿、車持たぬ身の、導師に請ぜられむ時に、先づ馬など迎へおこせたらむに、桃尻（尻の馬背に落付かぬこと）にて落ちなむは、心憂かるべしと思ひけり。次に「佛事の後、酒などすゝむることあらむに、法師の無下（あまり）に能なきは、檀那、

すさましく（興なく）思ふべし」とて早歌（其の當時流行せし、早口にうとふ歌）といふことを習ひけり。二つのわざ、やうく境に入りければ、愈よく爲たく覺えてたしなみける程に、說經習ふべき暇無くて、年寄りにけり……

されば一生のうち、むね（主要）とあらまほしからむ事の中に、いづれか勝るとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨て、一事を勵むべし。一日のうち一時のうちにも、數多の來たらむ中に、少しも益の勝らむ事を營みて、其外をばうち棄て、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。

との一節を思ひ出したので、先づ此の話をして、さて其の後で

されば諸君も、今は他の事は心配しないで一意専心漢籍を學ばるゝが、よいでせう。たゞ學問として漢籍を學ぶ丈けでなく、四書、五經を通して古聖賢の心意氣にふれ、ソレを我ものとすることに、一生懸命であつて欲しい。

諸君にして若し古聖賢の心を吾が心とさるゝに至らば、諸君は其の點一つで、社會から必要視さるゝであらうし、又其の修業の力で、有らゆる問題を見る眼も備はるに至りませう。

新聞や雑誌から得た様な雑智は、何んぼ豊富にあつても、ソレは諸君の救はるゝ力にもならぬし、又諸君を社會的に價値つける何んの力にもならぬであらう。

英の文豪カライルに「樽をかぶつて二十五歳に至れ」との語あるも、此の意であります。英米一流の説教家と云はれしスボルジョンに、或人説教の秘訣を問ひしに、「たゞキリストに就てのみ語れ。たゞ福音に就てのみ語れ。私はたゞソコのみを目ざし、他のことは一切語らぬことにして居る」と談られたと云ふのも、同じ意味だと思ひます。

と語つたことでありました。

家に歸つてから「論語」を開いて見た所、

樊遲請學稼。子曰。吾不如老農。請學爲圃。曰。吾不如老圃。樊遲出。子曰。小人哉。樊須也。上好禮則民莫敢不敬。上好義則民莫敢不服。上好信則民莫敢不用情。夫如是則四方之民襁負其子而至矣。焉用稼。 (子路第十三)

樊遲。稼を學ばんと請ふ。子曰く。吾は老農に如かず。圃を爲すを學ばんと請ふ。子曰く。吾は老圃に如かず。圃を爲すを學ばんと請ふ。子曰く。吾は老圃に如かず。樊遲出づ。子曰く。小人なる哉。樊須や。上禮を好めば則ち民敢て敬せざるなく。上義を好めば則ち民敢て服せざるなく。上信を好めば則ち民敢て情を用ひざるなし。夫れ是の如くなれば則ち四方の民其子を襁負して至らん。焉ぞ稼を用ひん。

稼 (五穀を栽培すること) △圃 (蔬菜を栽培すること)

との一節が先づ眼につきました。之れによると。孔子先生のお弟子の中にも「道を學

ぶと云ふ丈けでは心細く、將來人の上に立つて政治をする場合、農業のことでも、何んでも知つて置く方がよいかの如くに考へる者」があつたと見えます。

次は

子夏曰。雖小道。必有可觀者焉。致遠恐泥。是以君子不爲也。

(子張第十九)

子夏曰く。小道と雖も、必ず觀るべき者あり。遠きを致さば泥まんことを恐る。是を以て君子は爲さざるなり。

小道(一技一藝のこと)に深入りすると、ソレに時間をとられて、つい大切な大道を學ぶ時間を取られて仕舞ふ。

との一節が目につきました。

私はアノ時、「論語」の右の句に就ても、語るべきであつたと思つたことでした。

又青年諸君の中には、學生時代から就職に就て心配し、勉強や修養の時間をさいて、就職運動までして居るものがあるが、サウした人達も、根幹より枝葉に力を入れて居るものと云へませう。

「論語」に

子曰。君子謀道不謀食。耕也。餒在其中矣。學也。祿在其中矣。君子憂道不憂貧。(衛靈公第十五)

子曰く。君子は道を謀りて食を謀らず。耕や。餓其の中に在り。學や。祿其の中に在り。君子は道を憂へて、貧を憂へず。

君子は道を學ぶことには心を勞するも、衣食のことには心を勞しない。一番確かな農業をしてさへ凶年には餓ゑねばならぬのに、道を學ぶと云ふことはソレよりも確かで、道を學べば、絶對に餓ゆる心配がないからである。

子張學于祿子曰多聞闕疑慎言其餘則寡尤多見闕殆慎行其餘則寡悔言寡尤行寡悔祿在其中矣。(爲政第二)

子張祿を干めんことを學ぶ。子曰く。多く聞きて疑はしきを闕ぎ。慎しみて其餘を言へば即ち尤め寡し。多く見て殆きを闕ぎ。慎しみて其餘を行へば。則ち悔い寡なし。言尤め寡く。行悔い寡ければ。祿其の中に在り。

見聞を成る丈け廣くし、其の中、確かにコレはと思ふことでないと口にせず。行はぬことにして居ると。後悔することも少なく。人から尤めらるゝことも少ない。サウした人であれば、どんなことがあつても、困りつこはない。

とある。私は此等の句をよく味うて、どこが枝葉で、どこが根幹であるかを、よく味うて欲しいと存じます。

私共は、又よく、枝葉のことに金を費うて、根幹に金を費ふことを惜しんだりする。

其の點も「論語」の左の句を味うて、反省したいと存じます。

子曰。禹吾無間然矣。非飲食而致孝乎鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮室而盡力乎溝洫。禹吾無間然矣。(泰伯第八)

子曰く。禹は吾れ間然することなし。飲食を菲くして孝を鬼神に致し。衣服を悪くして美を黻冕に致し。宮室を卑しくして力を溝洫に盡す。禹は吾れ間然することなし。自分の飲食物は極めて粗末なもので満足して、先祖祭や神祭の費用は、をしまなんだ。私服には金をかけぬが、公服、祭服、冠などは、つとめて立派にした。又宮殿には金をかけずに、田へ水を引くに必要な溝洫へは力を注いだ。禹は斯くの如く非の打ち所のない人であつた。

二宮先生の教の中に、「自奉の度」と云ふことがある。大抵な人は「自奉の度」を越え易い。氣をつけなくてはなりません。

○ 「孟子」に

人鶏犬の放るゝ有れば、之れを求むるを知る。放心ありて求むるを知らずとあり。又

指人に若かざれば則ち之を悪むを知る。心人に若かず則ち悪むことを知らずとある。

夕方になつて、自分の家の鶏が一羽見えなくてすら、大騒ぎをするくせに、自分の本心が何所かへ行つて、御留守になつて居ても、案外平氣である。本末顛倒も甚しい。指が一本、片輪であつても、耻かしがるくせに、自分の心の美しくないことを、ソレ程耻かしがらない。之れ又本末顛倒であります。

今もサウした人が多いのであります。例へば

「貴君、靴のヒモがとけてます」と云つてやると、「どうも有難たう」と悦ぶも、「貴

君、お口がポカンと開いてますぜ」と注意すると「何にを云つて居るんだ。大きにお世話だ」と怒る。

人と争ふ場合、大抵な人は、相手のことばかり考へて自分のことを考へないが、之れ又本末顛倒である。先づ自分に何にか手落ちはないかと反省すべきである。

お客の盲人が夜になつてから歸らうとすると、其の家の主人は、盲人に提灯をもつて行きなさいとス、メた。「盲人に提灯は入りませんよ」と盲人が笑ふと、主人は「提灯をもたずに暗夜歩いて居ると眼開きにつき當られますよ」と云うた。ソコで盲人は理に服し、「ソレでは」と、提灯をかりて出かけた。所が歸宅の途中で、人につき當られた。盲人は怒つて「ドめくらめ、此の提灯が見えぬか」とどなると、つき當つた人は笑つて「オイ、其の提灯の火はきえてるぞ」と云つた。

この笑話があるが、私共は多くの場合、腹の立つた折りには、此の盲人に類したこと

をして居るのであります。

○
序手に、一言しておきたいことは、

子曰。攻乎異端。斯害也已。(爲政第二)

子曰く。異論を攻むるは斯れ害のみの。

の句に就てある。

今自分のやつてゐることを、充分呑み込めるまでやれ。ソレがまだ呑み込めぬのに、アツチ、コツチと力を分つのは、矢張り枝葉と根幹とを取りちがへると同様、害あつて益なきことだとの意。

自分の今やつて居る以外の事を、異論と云つたまで、ソレ等を、さげすんでの言ではありません。

二二七 現代人心の傾向と東洋道徳

今回は「論語」の句を引き來りて、現代人心の傾向を評して見よう。

此の頃は人の悪を許くことが大流行であるが「論語」には、人の悪を許くと云ふことに就て、かく云つてある。

子貢曰。君子亦有惡乎。子曰。有惡。惡稱人之惡者。惡居下流而訕上者。惡勇而無禮者。惡果敢而窒者。曰。賜也亦有惡乎。惡微以爲知者。惡不孫以爲勇者。惡訐以爲直者。(陽貨第十七)

子貢曰く、君子も亦た惡むあるか。子曰く。惡む有り。人の惡を稱するものを惡む。下流に居て上を訕る者を惡む。勇にして禮なき者を惡む。果敢にして窒く者を惡む。曰く賜也亦た惡む有るか。微へて以て知と爲す者を惡む。不孫にして以て勇

と爲す者を悪む。評て以て直と爲す者を悪む。

子貢或時孔子先生に「有徳の君子にも人を悪むと云ふことがあるか」とお尋ねせしに、孔子は「あるともく」。悪口を好むものと、下に居て上を誦る者と、亂暴者と、事理に通ぜずしてたゞ果斷なる者とを悪む」と答へられた。スルト子貢は「私も、人の心の奥を伺ひ察して、コンナことまで知つてると、知者ぶるもの、不謙遜であることを、勇敢であると誤解して居るもの。及び人の陰私を評いて正直だと思つて居るものを悪む」と云つたとの意。

此の句の中、最後の二節「評て直と爲すものを悪む」は、特に現代人への頂門の一針である。第一に、人の悪を評くを好む様になれば、評く人の人柄が悪くなる。第二に評かるゝものゝ爲めにもならない。人は他人から自分の悪を評かれたからとて、恐れ入つたと云つて改めるものではない。反つて片意地になつて餘計に悪くなる。又人の悪を評くことが流行すれば、此の社會に如何にも不良者が多くある様に見える、ソレが

どれ位、社會風教の上に害になるか知れぬ。此の三つの理由から古人は、評て以て直と爲すものを悪まれたのである。

葉公語孔子曰。吾黨有直躬者。其父攘羊而子證之。孔子曰。吾黨之直者異於是。父爲子隱。子爲父隱。直在其中矣。(子路第十三)

葉公孔子に語て曰く、吾黨に躬を直くする者有り。其の父羊を攘みて子之を證す。

孔子曰く。吾黨の直き者は是に異なり。父は子の爲めに隠くし、子は父の爲めに隠す。直きこと其の中に在り。

葉公と云ふ人が、或時、孔子先生に「私の方に、私の父が羊を盗みましたと、訴へ出た程の、正直者がある」と申せしに、孔子は直ちに「私の方ではソんなのを正直者とは申さない。父は子の爲めにかくし、子は又父の爲めにかくす、此のかばうてやる心持、ソコに眞の正直があるのぢや」と答へられたとの意。

孔子及び孔子の徒は、斯く、評て直と爲す者を惡むばかりでなく、更に進んで、惡を爲せし者をかばうてやれとまで主張してある。何ぜか。

現代人ならば、「ソナナことをして居た日には、惡に對する制裁が全くなくなりて、たださへ惡人の多い今日、愈々惡人が多くなつて、仕方なくならう」と心配する所であらうが、古人は斯く、親しきものゝことは、惡をもかばへと云つてある。何ぜか。

○

太陽と、風の神とが、力比へをしたと云ふ昔、噺がある。旅人の外套を風の神はイクラ力を出しても、吹き飛ばすことが出来なんだが、太陽がジリ／＼とてりつけると、旅人は「あゝ暑い」と云つて、わけなく外套をぬいだ。との昔、噺がある。

此の話の教へて居る様に、攻撃は人をいよく固くして仕舞ふのみで、親切のみが、同情のみが、人を温め、人の心の氷をとく唯一の力である。惡に制裁を加へることよりも、人に親切することが大事である。

子曰。其身正不令而行。其身不正雖令不從。(子路第十三)

子曰く。其身正しければ令ぜずして行はれ。其身正しからざれば令すと雖も從はず。自分の身持、心持が正しければ、喧ましく云はなくとも、人が我が云ふ通りになつてくれる。若し自分の身持が悪ければ、何んと云つても、人が我が云ふことを聞いてくれぬとの意。

季康子患盜。問於孔子。孔子對曰。苟子之不欲。雖賞之不竊。

(顔淵第十二)

季康子盜を患へて、孔子に問ふ。孔子對へて曰く、苟も子の不欲ならば、之を賞すと雖も竊まず。

魯の大夫の季康子が、「此の頃、泥坊が多くて困るが、何にか之を少なくする道はない

ものか」と、孔子に尋ねしに、孔子は「サウですな。貴下が不欲にならば、盗みをするれば、ホウビをやると云つても、盗みをするものがない様にならう」と答へられたとの意。

季康子問政於孔子曰。如殺無道以就有道何如。孔子對曰。子爲政焉用殺。子欲善民善矣。君子之德風。小人之德草。草加之風必偃。

(顔淵第十二)

季康子、政を孔子に問うて曰く。如し無道を殺し、以て有道に就かば、如何。孔子對へて曰く、子政を爲すに、焉ぞ殺を用ゐん。子善を欲せば民善し。君子の徳は風。小人の徳は草、草之れに風を加ふれば必ず偃す。

「若し無道の者を殺して、有道者の妨害となるものを除くことにせば、どうでせう」との問ひに對し、「人を殺すには及ばぬ。貴君がたゞ善事を行はんと思ひ立たるればよ

ろしい。ソレ丈で人民がよくなる。風が吹いて來ると、草のなびきふす如く、君子の徳には小人のなびくものであるとの意。

斯く人の惡を許くことを否定するのみか、進んでは、人の惡をかばつてやれとまで云ひ、更に進んでは、吾が身を正しくすることのみを力説してあるのである。

人のことは氣にせずに、自分を正しくせよ。コ、が第一歩である。

私は「論語」の此の教の現代人に味はれんことを熱望して止まざるものである。

二八 心實ならざるべからず又虚ならざるべからず

虚と實とは正反對である。併しカウ云ふ意味では、心實ならざるべからずであり。又カウ云ふ意味では、心虚ならざるべからずである云へる。今回は、之れに就てお話をしてみたいと存じます。

心實ならざるべからず

に就てお話をいたしませう。

菜根譚に

心實ならざるべからず。實なれば則ち物欲入らず

とあるが、此の句の意は、聖賢の教が入つて心がソレで一杯になつて居ると、欲で眼がくらんだり、つまらぬことに誘惑されたり、乃至は馬鹿な量見を出したりはせぬと

の意でありませう。

君子固窮小人窮斯濫矣。(衛靈公第十五)

君子固より窮す。小人窮すれば斯に濫す。

の一句を覚え。此の句が心に入つて居ると、其人が窮境に陥り「エ、カウ苦しくては堪らぬ。脊に腹はかへられぬ」との不量見の起りかけし時、役に立つではありませんか。

心虚ならざるべからず

大鹽中齋先生の洗心洞劄記に

聖人は一太虚のみ。常人は則ち虚を失ふ

とある。人と相對して語る場合、憎念があつたり。相手を馬鹿にする念があつたり、又外のことを考へたりするのは、則ち虚を失うて居るのであつて、かゝる場合の結果は必らず悪い。太鼓の鳴るのは、胴の中が虚なからである。鏡に物の能く寫るのは、

何にも寫つて居ぬからである。既に寫つて居るものゝある所へ、第二のもの來たらば、能くは寫らない。物の道理がソレと同じで、虚を失うてはならぬ場合が少なくありません。其の場合に就て「論語」の句を借り來りて、お話をいたしませう。

子絶四。毋意。毋必。毋固。毋我。(子罕第九)

子四を絶つ。意母く。必母く。固母く。我母し。

意なくとは成敗利鈍に意なきこと。必なくとは必らずカウと、キメてかゝらぬこと。固なくとは、固執せぬこと。我なしとは、己を捨て、人に従ふ雅量あること。

一生懸命になつてやつたことに就ても、神若し許し玉はゞ、佛若し許し玉はゞ、天若し許し玉はゞの、心中一點虚なる所あるを要する。若し此の虚を失はゞ、一生懸命にやつて、而かも結果のよろしからざりし場合に失望せなければなりません。

又己が己が我が強よく、一端カウと言ひ出したことは、どんなことがあつても、改

めぬと云ふ風であれば其人に進歩はあり得ぬ。心中常に己を捨て、人に従ふの虚あらば、其人は絶えず進歩することが出來ます。

子曰。吾有知乎哉。無知也。有鄙夫問於我。空々如也。我叩其兩端而竭焉。(子罕第九)

子曰く。吾れ知るあらんや。知る無き也。鄙夫あり我れに問ふ。空々如たり。我れ其の兩端を叩きて竭す焉。

孔子先生は、ソレはドンナに身分の卑い人であつても、若し其人が誠心を以て質問したいと思つて來たものであれば(空々如たり)其人の云ふことの本末(兩端)を、能くきいてやつて、ソレから其人の爲めに、言ふべきを言ひ、竭すべきを竭してやりました。ソレで先生は何んでも知つて御座る。何にを問うても教へて下さるとの評判が立つに至つた。併し實を云へば、孔子先生とて、何んでも知つてると云ふワケではな

い。其の心を虚しくして、人の言ふことをきいてあげると云ふ虚が、然からしめたのであります。

常人にありては、カウした場合に、虚を失ふこと多く、サウした人の話をきくことをウルサがつたり。半分きいて分つたくと云つたりします。コンナことではなりません。氣を付けねばならぬことであります。

子問公叔文子於公明賈曰。信乎。夫子不言。不笑。不取乎。公明賈對曰。以告者過也。夫子時然後言。人不厭其言。樂然後笑。人不厭其笑。義然後取。人不厭其取。子曰。其然。豈其然乎。(憲問第十四)

子、公叔文子を、公明賈に問うて曰く。信なるか。夫子、言はず、笑はず、取らずとは。公明賈對へて曰く。以て告ぐる者の過なり。夫子時ありて然かる後に言ふ。人其の言を厭はず、楽しんで然る後に笑ふ。人其の笑ふを厭はず、義ありて然る後

に取る。人其の取るを厭はず。子曰く。夫れ然り豈其然からんや。集會に臨む場合、存在を認められようとの私心があつてはならぬ。私心があると入らぬことを喋べる。ソレでウルサがるるのである。虚心にして臨み、言ふべきを言ふ

丈けであれば誰にも多言の人とは云はれぬ。人の意を向へるツモリで笑ふたり、冷笑したりするから、其の笑が厭はるるのである。虚心にして笑ふべき時に丈け笑ふのであれば、誰にでも、アレは能く笑ふ奴だとは云はれぬ。人から物を貰ふ場合にしても、取つていゝ時に丈け取るのであれば、誰にも欲しがるとは云はれぬ。カウした意味の虚心も尊い哉と云はざるを得ぬ次第であります。

或曰。以德報怨。何如。子曰。何以報德。以直報怨。以德報德。(憲問第十四)

或ひと曰く。徳を以て怨に報いば如何ん。子曰く。何を以て徳に報いん。直を以て

心實ならざるべからず又虚ならざるべからず

怨に報い。徳を以て徳に報ゆ。

或人は老子の信者である。ソコで老子の言「怨に報ゆるに徳を以てす」を持ち出して孔子に問ふ。孔子はソレに對し「怨みある人にも公平な心で接することが出来ればソレでよろしい（直を以てす）。徳を以てする程でなくてもよろしい」と云はれたのである。此の怨みある人にも、公平な心を以て接すると云ふことは、怨みを忘れねば（少なくとも忘れようと心掛けねば）出来ることではありません。

以上申し上げし如き場合に、心の虚であることは尊い。カウした意味の修養も亦大切であると云はねばなりません。

二一九 先づ其の私心を去れ

子絶四。毋意。毋必。毋固。毋我。（子罕第九）

子四を絶つ。意なく。必なく。固なく。我なし。

意なくとは、成敗利鈍を意とせざるを云ふ。必なくとは、必らずカウとキメてかゝらぬを云ふ。固なくとは、固執せざるを云ふ。我なくとは、己をすて、人に従ふを云ふ。孔子先生には此の四つがなかつたのであります。

子曰。君子之於天下也。無適也。無莫也。義之與比。（里仁第四）

子曰く。君子の天下に於けるや。適も無ければ。莫も無し。義と之れ與に比ふ。苟くも道を修めて居る君子にありては、天下何人に對しても、或は敵視したり、或は

又あれは味方だと考へたりはしない。誰の云ふことであつても、ソレが道に叶うて居る場合には、其の言に従ふを躊躇しないとの意。

子曰。回也其庶乎。屢空。賜不受命而貨殖焉。億則屢中。(先進第十一)

子曰く。回やソレ庶からんか。屢空し。賜や命を受けずして貨殖す。憶れば則ち屢中る。

顔回は先づ道に近しと云ふべきである。ドンナに貧乏しても、天命に安んじ、道を樂しむ心が微動だもしない。子貢(賜)の方は、まだ天命に安んずる所まで行つて居らぬから、貨財を貯へ。利殖の道を講じたりする。従つて其の明敏の故を以て臆測が屢道理に中るも、理一つ云ふ境地には達して居らぬ。子貢の顔回に劣ること確かでありませぬ。

以上の三句は、要するに「無私の人となれ。さらば道を見ることを得ん」と云ふにあ

りとは、中江藤樹先生の説であります。

○

茲に私の舊文、「先づ其の私心を去れ」を附記しておきませう。

二宮尊徳先生の高弟にして、「報徳記」の著者たる富田高慶先生の言に

先生之を行へば、則ち良法たり。他人之を行へば、則ち良法の實なきは何ぞや。道の行はるゝと、行はれざるとは、法にあらざして人に在る故なり。人に在る者如何。

曰く。法の本心に在り。心の善不善發して法の興廢之れに係る。先生の心、安民に純にして、一毫の私心あるなし。教を受くる者其の私心を去る能はず。徒に法を外に學びて、之を内に求めず。故に法同しくして心異なり。心異にして其法を行はんと欲す。猶ほ耕さずして蒔くが如し。勞すと雖も復たなんぞ益せん。

とある。今の二宮先生に學ばんとする者も、先づ此の點に就き、沈思黙考すべきであります。

二宮先生の心が、安民に純にして、一毫も私心なかりしことに就ては、

「留岡幸助報徳論集」に

服部家で仕法をやられて、五年は随分長い。所がいろ／＼其間に故障が起つて来て、二宮翁も痼癢を起し、人が給金も取らずに、本當にやつてやらうと云ふのに、人を譏言するものもあれば、非難するものもあり。主人自からも、時には喜ばないと云ふことであつては、仕法も何も出来るものでない。いつそ栢山に歸らうかと云ふので、小さい川の邊まで出て行つて、此の川の橋の上に立つて居られた。所が橋の下で網を打つて漁をして居る者がある。……さうすると親方見たやうな者が一人居つて、それを手傳ふ者が四五人居つた。見て居ると魚がとれた。其の一番初めにとつた魚を手下の者に皆分けてやつて仕舞つた。それを見て、ア、これは實に面白いことをやる。感心なことである。漁夫と云つても馬鹿にならぬといつて、だいぶ

二宮翁が感じて栢山に歸ることを止めて、又服部家に引返したといふ言ひ傳へがあります。これは本當かどうか知りませぬが、思ひ合せば、二宮翁が千兩の負債を拂つて、三百兩残した。其三百兩の内百兩を貰はれたが、それを自分が取らずに、下女下男を集め、此の百兩をやつて、自分は飄然無一物で栢山村に歸つたと云ふ話がある。

とあり。又

其時大久保公は二宮翁を御召出になつて、此度宇津家の知行所再興に付ては甚だ御苦勞であるがよろしく頼む。其資本として數千兩を汝に與へるからこれを以て荒廢せる櫻町を再興して呉れよと依頼された。ところが翁は此の大金を辭退されて云はるゝに、私は人の名目や他人の資本で事をやるのではない。所謂自奮自闘で、荒地を興すに荒地の力を以てし、負債を償ふに負債の力を以てするのである。故に折角の御下付金も拜領して行く事は出来ないとして斷乎としてこれを斷つた。而して直に

二二〇
栢山村に歸り、約二十年もかゝつて苦勞を重ねた末やつと恢復した家やら諸道具をも悉皆賣り拂ひ、これを資本金として野州へ赴かれた。
とあるので分る。

○
富田高慶先生が、先づ二宮先生から此の心を學ばれたことに就ては、大槻吉直氏著「富田高慶翁傳」に
身を無位無祿の地に置き、仕法施行中(相馬藩)は、荒蕪地若干を借受け之を開墾して僅かに其の産粟を食み、常に籠衣を服し、籠食に甘んじ、苟も餘資あれば之を興復方法の資本に加へ、未だ嘗て餘財を蓄へず。
とあり。又廢藩の際、城下の士族には、ソレト熟地の田圃を與へし際にも翁は獨り其配當を辭し、更に荒野開拓の目的を以て居を行方郡蛇澤村に卜せりとあるので分る。

富田先生は、身自から二宮先生の心を學びて然かる後に其の仕法を學び、丹を相馬藩で實行して成功しての上で、云はれたのが、前述の言である。今の二宮先生を學ぶ者も、此の至言に傾聽すべきであります。

○
なほ一言申加へたきことは、私共は人に頼まれて何にかを爲す場合、兎角、水臭い仕振りを爲し勝ちであるが、二宮先生は前述の如くでした。此の點に就ても、私共は二宮先生に學びて
他人の仕事であつても、苟しくも手を下す以上は、自分の仕事として、眞劍であるべき
であります。

三〇 古人齋戒して君に告ぐる所以

陳成子弑簡公。孔子沐浴而朝。告於哀公曰。陳恒弑其君。請討之。公曰。告夫三子者。孔子曰。以從大夫之後。不敢不告也。君曰。告三子者。之三子告不可。孔子曰。以吾從大夫之後。不敢不告也。(憲問第十四)

陳成子簡公を弑す。孔子沐浴して朝し。哀公に告げて曰く。陳恒其の君を弑す。請ふ之を討たん。公曰く。夫の三子者に告げよ。孔子曰く。吾れ大夫の後に從ふを以て敢て告げずんばあらず。君曰く。夫の三子者に告げよ。三子に之きて告ぐ。可かず。孔子曰く。吾れ大夫の後に從ふを以て、敢て告げずんばあらざるなり。

魯の哀公の十四年に、齊の大夫陳成子(名は恒)が、其の君簡公を弑しました。其の時孔子先生、致仕されて居たが、之れを聞くや否や齋戒沐浴して朝に上り。哀公に向

ひ、「隣國齊の陳恒が其の君を弑されました。どうか直ちに之を征伐して下さい」と言上されました。所が哀公は當時三家のものに實權を握られて無力でしたので、三家を召して協議をせず、反つて孔子に向ひ、「先づ三家へ行つて相談して來い」と云はれました。孔子は退出して後、今は致仕して居るが、大夫の後に從ふ者であるので、かかる大事をきゝて其の儘にしておくワケに行かない。ソレで行て言上したのであるが、君は三家に行て告げよと云はれました。さて、君臣の禮、顛倒したるものかなと云つて嘆息されました。

さて嘆息しながら行つて三家の者に告げると相手にならない、ソレも其の筈。三家の者は陳恒同様、其の君を無するものでありますから。孔子はソコで、又、「今は致仕して居ても、私も大夫の後に從ふものであるからには、かゝる大事を、黙して止むことは出来な」と云はれました。

此の時、孔子の言は無駄となりし様であります。三家の者をして心

私に恐れしめたに相違ありません。

○ 「近思録」に、「論語」の此の句を評して

夫鐘怒而擊之則武。悲而擊之則哀。誠意之感而入也。告於人亦如是。古人所以齋戒而告君也。

夫れ鐘は怒りて之を撃つ時は則ち武く。悲しんで之を撃つ時は則ち哀し。誠意の感じて入ればなり。人に告ぐる亦是の如し。古人齋戒して君に告ぐる所以也とある。

私共も、講演する場合とか、人に忠告する場合などには、前以てコレ丈けの用意をしてかゝりたいものであります。

三二 進んで止まざる心

偉い人になればなる程「進んで止まざる心」が強い。孔子も無論「進んで止まざる心」の持主の一人であつた。今回は「進んで止まざる心」に就て語らう。

子夏曰。賢。賢易色。事父母能竭其力。事君能致其身。與朋友交言而有信。雖曰未學。吾必謂之學矣。（學而第一）

子夏曰く。賢を賢として色を易へ。父母に事へて能く其の力を竭し。君に事へて能く其の身を致し。朋友と交りて。言つて信あらば。未だ學びずと曰ふと雖も。吾は必らず學びたりと謂はん。

賢人を見た場合、アノ人の如く成りたいと感奮の情、色に見える程でありたい。父母

に對しては、飽くまで其の力をつくし。君に對しては、どこまでも、吾が身を吾身と考へたくない。又朋友に對しては、信を失はぬ様でありたい。以上が立派に行へる人であれば、先生からや、書物から、人の道を學ばなくても、もう既に學んだ人であると云へるとの意。

元田東野先生は、「賢を賢として色を易へ」を、「賢を賢として、色に易へ」と讀み、其の進講録の中に

諸葛孔明は醜婦を擇びて妻とせり。其の志、専ら王佐にあるを以て、好色を以て其の心を移さざるなり。本朝の正行は辨内侍を賜はりしを、歌を獻じて辭し奉りたるは、其の心、興復の大義に在りて、婦人に及ぶに暇あらざるなり。近世の上杉治憲は、本妻の外、媵妾なく、閨門の内より、一藩の政事に及び、皆誠の一心より、涵養し成して、民を愛するの心、主となりて、婦女を愛するの心に易へたるなりと云つてある。

「父母に事へて能く其の力を竭し。君に事へて能く其の身を致し」に就ては、左の如き逸話がある。

一旦媾和となつて、徳川家康大阪城の圍みを解き、軍を率ゐて東に歸る途中近江の草津で雨に會ひ。一日草津に滯陣したことがある。其の日家康は、林道春をして「論語」を講義せしめたが、道春は父母に事へて云々の一節を講じたサウである。講終りて後、家康はたつた一言、今の所では、能の一字が眼目だと云はれたサウである。

「賢を賢として色を易へる」程であれば、進んで止むことの出来ない次第である。「父母に事へて能く其の力を竭し、君に事へて能く其の身を致し。」も、能くと云へば、進んで止むことの出来ない次第である。之れ位でよからうでは、能く盡したとは云へないのである。

子曰。吾未見好德如好色者也。(衛靈公第十五)

二二八

子曰く。吾れ未だ徳を好むこと、色を好むが如き者を見ず。

私は未だ、人間の根本慾の一つである、男女の慾の如く強く、徳を好むものを見ることがない。との意。

孔子が斯く嘆息されたのは、孔子自身徳を好むことは、色を好むよりも強よかつたからである。ソレ程徳を好む人には、修養に限界がない。

子曰。見賢思齊焉。見不賢而内自省也。(里仁第四)

子曰く。賢を見ては齊からんを思ひ。不賢を見ては内に自から省る。

自分より偉い人を見ては、ソノ様にならんと勵み。愚者や不良な人を見ては、アレではいかぬと、开を自己反省の機會とせよとの意。

かくあらば、賢不賢ともに我師たるべく、かゝる人には、進境計るべからざるものがある。

子貢問曰。孔文子何以謂之文也。子曰。敏而好學不恥下問。是以謂之文也。(公冶長第五)

子貢問うて曰く。孔文子何を以て之を文と謂ふや。子曰く。敏にして學を好み。下問を恥ぢず。是を以て之れを文と謂ふ。

衛の大夫孔圉は、死して孔文子と諡された。子貢は諡して文と云はるゝは、容易なことでないのに、何ぜ文と諡されたかと怪しみ、孔子に問はれたのである。ソコで孔子は、「彼は學を好む人であつた、下問を恥ぢぬ人であつた。文と諡さるゝに何んの不思議もない」と云はれたとの意。

孔子は舜を評する時に「舜問ふことを好み」と第一に云はれた程に、問ふことを好む

と云ふことを尊ばれた人であつた。問ふことを好むもの、進境には限界がない。

二三〇

子曰。十室之邑必有忠信如丘者矣。不如丘之好學也。（公治長第五）

子曰く。十室の邑。必ず忠臣丘が如き者あらん。丘の學を好むに如かざるなり。十戸位の小部落にも、必ず忠信な人のあるものだが、私程に學ぶと云ふ氣のあるものはないとの意。

之れは、素質のいゝものは天下至る所にあるも、道を學ぶの精神が、眠れる状態にあるを嘆ぜられての語である。

哀公問。弟子孰爲好學。孔子對曰。有顔回者好學。不遷怒。不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。未聞好學者也。（雍也第六）

哀公問ふ。弟子孰れか學を好むと爲す。孔子對へて曰く。顔回なる者あり。學を好

み怒を遷さず、過をふたゝびせず。不幸短命にして死す。今や即ち亡し。未だ學を好む者を聞かざる也。

顔回ばかりは、人の人たる道を學ぶことを好み、如何に腹の立つことがあつても、人へ怒をうつす様なことをせず。又同じ過ちを二度とせぬ様に、修養に懸命の人であつた。此の人なくなつて後は、もう學を好むと云つてよい人はない。との意。顔回に就ては、尙ほ、左の如き句がある。

子謂顔淵曰。惜乎吾見其進也。未見其止也。（子罕第九）

子顔淵を謂て曰く。惜かな吾れ其の進むを見る。未だ其の止まるを見ざる也。

顔回は、進み過ぎると孔子にアブナがられた程に、進んで止まざる心の持主であつたとの意。

今一つ顔回に就ての句を引かう。

三一 進んで止まざる心

二三一

曾子曰。以能問於不能。以多問於寡。有若無實。若虛。犯而不校。昔者吾友嘗從事於斯矣。(泰伯第八)

曾子曰く。能を以て不能に問ひ。多を以て寡に問ひ。有れども無きが如く。實ども虚が若く。犯せども校せず。昔者吾が友嘗て事に斯に従へり。昔「自分より、不能なもの、寡聞なものにも、折りある毎に質問し、有つても無い様に實つて居ても、空虚な様に考へ、人に無禮を加へられても、争はず」と云ふ風の友人(顔回の事)があつたが、と曾子が云はれたとの意。顔回が如何に「進んで止まざる心」の持主であつたかは、右の三句の上に充分現はれて居るではないか。

冉求曰。非不説子之道。力不足也。子曰。力不足者。中道而廢。今女畫。(雍也第六)

冉求曰く。子の道を説ばざるに非ず。力足らざるなり。子曰く、力足らざる者は中道にして廢す。今女畫れり。

「先生の道を説ばないのではないが、私の力では开を守り行ふことが六つかしい」と。お弟子の冉求が云へるに對し、孔子先生は、「力が足らぬと云ふのは、やつてやつてやりぬいて而かもやり切れずに、倒れたのを云ふのであつて、お前のは、自分で自分ではやれぬと、畫つて居るのである」と云はれたとの意。斃れて後止むの精神ある孔子としては、右の如くに冉求を叱せられたのは、當然のことである。

子曰。知之者不如好之者。好之者不如樂之者。(雍也第六)

子曰く。之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を樂しむ者に如かず。

道を知る丈けでは駄目だ。道を好むに至らねばならぬ。更に進んで道を樂しむに至らねばならぬとの意。

之れ道に精進するものでなくば、云へない語である。

子曰。甚矣。吾衰也久矣。吾不復夢見周公。(述而第七)

子曰く。甚し。吾が衰へたるや久し。吾れ復た夢に周公を見ず。

孔子は晩年に、「私も若かい時分には、毎晩夢にさへ周公を見た程であつたが、近頃はトント見なくなつた。ア、衰へたものだなあ」と嘆息されたとの意。

此の語の奥に、晩年になつても、尙ほ周公の事業を行ふ機會だにあらばと、ねらつて居る意氣精神が見えて居る。

子曰。加我數年。五十以學易。可以無大過矣。(雍也第六)

子曰く。我に數年を加へて「五十」以て易を學ば、以て大過なかるべし。

孔子晩年に、「尙ほ數年生きることが出來て、易を學ぶことを得ば、いゝがなあ」と云はれたとの意。五十の二字は、コ、へ間違つて入つたものであらう。

孔子は晩年になつても、講學心を失うては居なかつた。

曾子曰。士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己。任不亦重乎。死而

後已不亦遠乎。(泰伯第八)

曾子曰く。士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁を以て己が任と爲す亦た重からずや。死して後已む。亦た遠からずや。

「道に志す者は、心廣く、意志強固であらねばならぬ。任重くして道が遠いからなあ。仁德を行ふを己が任と爲すのだから、重いワケだ。死して後已む精神で進まねばならぬのであるから、遠いワケだ。」と曾子が云はれたとの意。

「死して後已む」と云ふのが、孔門に横溢せる精神であつた。

三二一 青年よ、先輩と個人的に接觸せよ

「論語」に

親仁。(學而第一)

仁に親づき。

つとめて仁徳ある人と親しくせよとの意。
とあり。又

就有道而正焉。(學而第一)

有道に就て正す。

有道有徳の人に近づいて、教を受けよとの意。

三二 青年よ先輩と個人的に接觸せよ

とある。

私は曾て京都大學の教授たりし故藤井博士から「人を動かすものは人なり」とのお話を承はつたことがあります。

佛教修養の條件中にも、道友に親近することは肝要だとあります。ドラモンドと云ふ博士は、一個人のために態々遠地に旅行し、土曜日曜はその行く所に於て必ず人に接して懇談されたと云ひます。

かく古今凡ての教育家、宗家の意見は一致して居るのに、今の學校教育には教壇よりの講義のみありて、接心と云ふことがありません。教師に、生徒、一人一人に接近せんとの心なきのみか、生徒も聽講丈にて足れりと爲し、有徳の士に親近することより受くる教化の如何に大なるかに就ては、全く知らずに居ます。

それで私は、一方に於ては、一個人のために慮る先輩の輩出を希望すると共に、他面、今の若かき人達に對して、有徳、有識に親近し體を以て體にぶつつかれ、然から

ざれば、活きた力は得られぬと云ふことを絶叫するのが今日の急務の一であると存じます。

人を動かすものは人なり。「私は某先輩から之れくの尊いものを得た」との體驗なき人で、一廉の人物になつたものは、未だ曾てありません。個人接觸、個人接觸、青年よ、先輩と個人的に接觸せよ。

三三三 孔子は政治家でもあつた

孔子は普通の宗教家や道德家と違つて、道德の先生であると同時に又政治家でもありました。最後まで弟子を教ふる丈けでは満足せず、我を用ゐるものあらばと、機會だにあらば政治に實際手をつけて見たいとの念を絶ちませんでした。それで「論語」の中にも、孔子の政治に關する意見が、度々見えてをります。孔子は徳治論者でありました。开は

子曰爲政以德譬如北辰居其所而衆星共之也。(爲政第二)

子曰く。政を爲すに徳を以てせば、譬へば北辰の其所に居て衆星の之れに共(向)ふが如し。徳を以て人民を治れば、丁度北極星が動かずに居て、天の諸々の星が之れに向つて

居る様に、動かず勞せずして、其の治を完うすることが出来るとの意とあるので分る。又

季康子問政於孔子。孔子對曰。政者正也。子帥而以正。孰敢不正。

(顔淵第十二)

季康子、政を孔子に問ふ、孔子對て曰く、政は正なり、子帥ゆるに正しきを以てせば孰か敢て正しからざらむ。

政は正なりであつて、政を爲す人が正しかつたら、皆が正しくなるとの意とあるので分ります。此の議論からすると、「政治家は先づ第一に、我身を修めねばならぬ」との論が自然に出て来る。ソレで孔子に

子曰苟正其身矣。於從政乎何有。不能正其身。如正人何。

(子路第十三)

子曰く、苟くも其身を正くせば、政に従ふに於て何か有らん。其の身を正くする能

はざれば、人を正くすることを如何せん。自分を正しくすることさへ出来れば、政は造作なく出来る。併し己れを正すことの出来ぬものには、政治は断じて出来ぬとの意。

との言があります。次に政治家への大切な教訓は

子夏爲莒父宰問政。子曰。無欲速。無見小利。欲速則不達。見小利則大事不成。(子路第十三)

子夏、莒父の宰と爲り、政を問ふ、子曰く速かならんことを欲する無れ。小利を見ること無れ。速かならんを欲せば則ち達せず。小利を見れば則ち大事成らず。政を爲すものは、早く功を見せようとしたり、小利に目をつけてはならぬ。ソナ

ことではホントのことは出来ぬとの意と、

子路問政。子曰。先之勞之。請益無倦。(子路第十三)

子路、政を問ふ、子曰く之に(民)先ち、之(民)に勞す。益を請ふ、倦むこと無れ。

民事を先にし、民を慰勞せよ、ソレガ政治だと云はれ、尙ほ一言を請ふと、倦まぬ様にせよと云はれたとの意。

とでありませう。昔も今の如く、政治家の中には、速かなるを欲したり、倦んだりするものが多かつたから、此の言があるのでありませう。人才登用に就て云へる、左の一言も、政治家への、よき教訓であります。

子曰。舉直錯諸枉。能使枉者直。

子曰く、直きを擧げて諸の枉るを錯く、能く枉れる者を直からしむ。

正しき人、正直な人を擧用すれば、自然に枉れるものも、直くなるとの意。

三四 孔子の貧富觀

司馬牛憂曰。人皆有兄弟。我獨亡。商聞之。死生有命。富貴在天。君子敬而無失。與人恭而有禮。四海之内皆兄弟也。君子何患乎無兄弟也。(顔淵第十二)

司馬牛憂へて曰く、人皆な兄弟有り、我れ獨り亡しと。商之を聞く死生命有り。富貴天に在りと。君子敬して失なく。人と恭しくして禮あれば、四海の内皆な兄弟なり。君子何ぞ兄弟なきを患へんや。

司馬牛には、兄弟三人あつたのであるが、其の一人、司馬桓魋なるもの、亂を企て、他の兄弟二人と共に刑せられたので、牛は獨りぼつちとなつて仕舞つた。ソレで或時「誰にも兄弟があるのに、私にはない」と云つて、悲しまれたのである。ソレを子

夏(商)が聞いて、「死生、富貴、ともに天命だよ。ソレは人力の如何ともすべからざる所である。併し何時も敬の心を失ふことなく、人と交はる場合、慎しみて禮をつくすと云ふ風であれば、何所に行つても、凡ての人が我が兄弟となつてくれる。道に志す君子には淋しいと云ふことがない筈ぢや。君も肉身の兄弟のない事位、氣にするに及ばぬではないか」と云つて、牛を慰められたとの意。
茲に先づ孔門の徒の貧富觀が見えて居る。富貴は死生の如く、天命にあるものと考へて、道を行ふことを、人間第一の必要事と爲し、富を求むることを第一とはせられな
んだのである。

子曰。飯蔬食飲水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴。於我如浮雲。(述而第七)

子曰く。蔬食を飯ひ、水を飲み。肱を曲げて之れを枕とす。樂み亦た其の中に在り、

不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。

人間の眞の樂しみは、飲食の間にあるものでないから、どんなに貧乏しても、もう樂みのない生涯であるとは云へない。道にはづれたことをして、富貴の身の上となるが如きは、私から見ると、雲に乗つてる様な話で。危険至極であるとの意。
孔子は斯く、人間の眞樂は貧富を超越せるものであることを示し、且つ不義の富貴を極力排斥されてある。

子曰。富而可求也。雖執鞭之士。吾亦爲之。如不可求。從吾所好。(述而第七)

子曰く。富にして求むべくんば。執鞭の士と雖も。吾れ亦た之を爲さん。如し求むべからずんば。吾が好む所に從はん。

若し富と云ふものが、求めようと思へば、求めらるゝものであらば、私だとして求めた

い。其のために御者になれと云へば御者にでも、何れにでもなる。併し富は求めようと云つて求めらるゝものでないから、私はソナナことに氣をつかはずに、道を樂しむことに専念しようとの意。

茲にも富よりも道を大事とする氣持が十分に現はれて居る。

子曰。放於利而行多怨。(里仁第四)

子曰く。利によりて行へば、怨み多し。

利慾を先にしての行動には、どうしても人から怨まることが多いとの意。

どんなに考へて、上手にやつても、利慾があつての行動は、結局人から怨まることが第一。慾を無くすることが第一。

子罕言利與命與仁。(子罕第九)

子罕に利を言ふ。命と與にし、仁と與にす。

孔子先生は「罕にしか利のことを云はれなんだ。其の罕に云はるゝ時にすら富貴天にありなぞと、天命と云ふことと結び付けて云はれた。又仁則ち人に施與することと結び付けて云はれた」との意である。

二宮尊徳先生が「貯金をする時には、慈善の爲めにも積金をせよ。サウしないと、片積となつてイケない」と云はれてゐるのは、孔子先生の「利を云ふ時に仁と與にされた」の一致して居る。

二宮先生の高弟富田高慶先生の言に

心利を計るにあれば、蓄害並び至り、衰亡焉に繼ぐ焉。心仁義に在れば、則ち萬福並び至る。

とある。

子曰。君子喻於義。小人喻於利。(里仁第四)

子曰く、君子は義に喻り、小人は利に喻る。

道に志して居る君子は、何事に直面しても先づ第一に、義か不義かを考へる。ソレが習慣になつて居るから、事の是非善悪の判断が早い。然かるに小人（道に志さぬ人）は、何事に直面しても、先づ利か不利かと考へる。ソレが習慣となつて居るから、事の利、不利を判断することが早い。之れは、第一に義か不義かを判断せよ。利か不利かの判断は第二にすべきであるとの教である。

子曰く、禹吾無間然矣。非飲食而致孝乎鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮室而盡力乎溝洫。禹吾無間然矣。（泰伯第八）

子曰く。禹は吾れ間然すること無し。飲食を非して孝を鬼神に致し。衣服を惡して美を黻冕に致し。宮室を卑くして力を溝洫に盡す。禹は吾れ間然すること無し。

禹は非の打ち所のない人であつた。自分の飲食は節約し、天地や先祖の鬼神を祭らるる場合には、費用ををしまなんだ。自分の衣服はドンナに古くなつても我慢し、祭服は極力立派にされた。自分の居室はドンナになつても構はずに、民の農事に大關係ある溝洫には、出来る丈け力を盡された。との意。

私財を増したり、己が衣食住に贅澤する様なものは駄目だ。ソレよりも大事な事は、

天地の神々や、先祖を祭ること、天下萬民のために盡すことである。自分の生活に金のかゝる人は、どんなに力があり、収入があつても、人を助けることの仕事の出来ないものである。昔から國のため、社會の爲めに盡した人々は、何れも自分の生活に金のかゝらぬ人であつた。

孔子は弟子達にコ、を教へんと欲して、禹の事を云はれたのである。

子曰く、富與貴是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤是人之

所惡也。不以其道得之。不去也。（里仁第四）

子曰く、富と貴とは是れ人の欲する所也、其の道を以てせざれば之れを得れども處らざるなり。貧と賤とは是れ人の惡む所なり。其の道を以てせざれば之れを得れども去らざる也。

何人も富貴は其の欲する所なれど、道ならぬことをして、ソレを得ようとしてはならぬ。貧賤は何人も惡む所なれど、早く貧賤の逆境より脱出したくて、道ならぬことをする様であつてはならぬとの意。

茲にも道、第一の思想が、明瞭に示されてある。

子貢曰く、貧而無諂、富而無驕、何如。子曰く、可也。未若貧而樂、富而好禮者也。（學而第一）

子貢曰く、貧にして諂ふ無く、富みて驕ることなきは何如んと。子曰く、可也。貧

にして樂み、富みて禮を好む者には若かざる也。

子貢が「貧乏しても諂ふ心なく、富みても驕らぬ者であれば、どうです。立派ぢやありませんか」と云ひしに對し、孔子は「ソレもよいが、もう一つ上がある。貧乏しても道を楽しみ、富み榮えても、一切禮にはづれたことはせぬ。之れが更によい」と云はれたとの意。

逆境も順境も、貧賤も富貴も、そんなことはどうでもよい。境遇がどんなに變轉しても、道を守ることが大事だ。境遇の變轉は、云はゞ試験に過ぎない。どんなになつても道を忘れぬ人であれば及第である。

見得思義。（子張第十九）

得るを見ては義を思ひ。

儲け話をもちかけられし場合には、ましてしばし、甘い話だが、してよい事か、悪いこ

とかと、一考すべしとの意。

世に斯かる場合、一考せぬ人多し。之れ斯の語ある所以。

周有大賚善人是富。(堯曰第二十)

周に大賚有り、善人は是れ富む。

周の武王が天下を統一せし折り、善人に大に賞與する所があつたので、周では善人が皆な富者となつたとの意。

萬人を幸福にすることは、差別撤廢からも來ねば、マルクス主義からも來ぬ。富貴の人が凡て善人であると云ふ時代が來れば、其の時に始めて來るのである。

要するに孔子の思想は、道第一、道徳第一であつて、貧富の如きは、道の脚下に見るべきものであると、云ふにありと、考へらるゝ。

序手に、經濟のことを考ふる時の御參考までに一二の附記をしておきませう。

古人の言に

仁者は施すことを樂しみ。儉者は與ふことを重んず。

とあり。財を惜しみては善を爲し難し。善を爲すを樂しむ仁者が、施すことを樂しむのは、元より云ふまでもなき所である。又儉約のホントの目的は、與ふることによりて達せらるゝのであるから、儉者が與ふることを重んずる。之れも理の當然である。

古人の言に

借の一字は、家を破るの基なり。此の一字かたく禁ずべし。

とあり。古來借金して榮えし者なし。恐るべきは借金である。

同程度に馬鹿らしきは、人に金を貸すことである。「開口新書」に

或人借財して期日届いて還さず。債主屢責れども返さず、債主自から往て、其の

方は借りる時は飢渴旦夕に逼る故一命を救ひ呉よと歎き、我が情に由て危難を免れ、今其恩を忘るゝは何なる故ぞと取詰れば、我に三つの計あれ共、未だ思ひに叶はずといふ。債主頻りに其譯を尋れば、我毎日他出する故路に誰か金を遺さんことを願ふは一ツ。又其の方に出し置く原券の紛失を願ふは一ツ。又其の方の死するを願ふ是にて三つの計といふ。……

とある。仁者が施すことを樂しみ、儉者が與ふるを重んずるのは、一つは貸すことを欲せぬからである。

○

或工場町で

同じ物賣が、此の家は月給イクラだからと、其の家の主人の月給に應じて、物の價を上下する。

と聞いたことがある。

旅行する場合に、収入の多い人は、一等若くは二等に乗る。サウ云ふ人々は、三等に乗る人に比し、三倍若しくは二倍の費用を要する。

旅館に泊るにしても、一夜を三圓で済ます人と、五圓、十圓を要する人との違ひがある。其他何んでもかでも、収入に比例して、同じものに金を費ふ度が違うて居る様である。

ソレで月給の多い人程、無用のことに餘計に金を費つて居ると云へる。ソコで無用の費をはぶく工夫をして、一には其の剩餘金で人の爲めに盡し、二には無理して収入を増さなくても生計に困らぬ様に、いたすべきであります。

カウした計算に、モット注意して欲しいと私は常に思うて居る一人ですが、世人の多くは如何にもカウした計算に無關心な様であります。

生活の算術は、モット發達させなくてはならない。

三五 朋 友 論

こんどは、孔子の朋友論に就て談りませう。

曾子曰。君子以文會友。以友輔仁。(顔淵第十二)

曾子曰く。君子は文を以て友を會し。友を以て仁を輔く。

朋友を求むる所以は、相會して、古人の徳教を研究して、仁徳を磨かんが爲めであるとの意。

飲食の友や、遊樂の友や、其他俗事の友、一切は眞の朋友ではない。道の友が眞の朋友である。

朋友切々偲々。兄弟怡々。(子路第十三)

朋友には切々偲々。兄弟には怡々。

朋友は道の爲めのものだから、友人の間において、相みがく爲めには、イクラ激しく論じ合うてもよろしい。併し兄弟は、友人とは違ふ。必らずしも、相みがくには及ばぬ。兄弟の間において、仲よくするのが第一であるとの意。

無友不如己者。(學而第一)

己に如かざるものを友とすること無れ。

朋友は、相みがくためのものであるから、己れよりズメケた人を選ぶがよろしいとの意。不眞面目な人、ダラシのない人を友として居ては、修養は出来ない。たゞに修養の出来ざるのみか、墮落すること請合である。

子曰。晏平仲善與人交。久而敬之。(公治長第五)

子曰く、晏平仲善く人と交り、久しくして之を敬す。

晏平仲と云ふ人は、非常に交際の上手な人であつた。其の秘訣は、イクラ親しくなつても、敬の心を失はぬ所にあつたとの意。
友と交はるの道は、晏平中に學ぶべきである。

匿怨而友其人。左丘明恥之。丘亦恥之。（公治長第五）

怨を匿くして其人を友とするは、左丘明之を恥づ。丘も亦た之を恥づ。

外へは親しくして、心中では敵視して居るなんて、こんなよくないことはないと言つて古の左丘明は、しかるを恥ぢたが、私もソレは恥づべきことだと、孔子が云はれたことがあるとの意。

子游曰。事君數斯辱矣。朋友數斯疏矣。（里仁第四）

子游曰く。君に事へて數すれば、斯に辱めらる。朋友に數すれば、斯に疏せらる。臣としては、君を諫めねばならぬが、ひつこくするといけない。友人に對しても忠告

せねばならぬが、餘りシバシバ忠告するとキラハる。ソコを注意して、うまく折を見て、諫めよとの意。

友人であるからには、時に忠告もせねばならぬが、ソレを仕過ぎてもならぬ。ソコに工夫が入るのである。

孔子曰。益者三友。損者三友。友直。友諒。友多聞。益矣。友便辟。友善柔。友便佞。損矣。（季氏第十六）

孔子曰く。益者三友。損者三友。直きを友とし。諒を友とし。多聞を友とするは益なり。便辟を友とし。善柔を友とし。便佞を友とするは損なり。

正直ものを友とすること。信義のある人を友とすること。物識りを友とすること。とは益だが。外を飾り過ぎる人を友とすること。柔順過ぎる人を友とすること。オベツカを友とすることとは、損になる。益友に近づけ。損友を近づけなとの意。

茲に擧げたる益者三友、損者三友の中、益者三友の方が、眞の友人である。

二六二

顔淵季路侍。子曰。盍各々言爾志。子路曰。願車馬衣輕裘。與朋友共。蔽之而無憾。顏淵曰。願無伐善。無施勞。子路曰。願聞子之志。子曰。老者安之。朋友信之。少者懷之。(公治長第五)

顔淵、季路侍す。子曰く。盍ぞ各々爾が志を言はざる。子路曰く。願くば車馬衣輕裘朋友と共に之れを蔽りて憾みなけん。顔淵曰く。願くば、善に伐る事無く。勞を施すこと無けん。子路曰く、願くば子の志を聞かんと。子曰く、老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懷けん。

顔淵、季路(子路)などの侍坐せる折り、孔子は彼等に向ひ、「どうだ一つ、銘々の志に就て話をせぬか」と云はれた。スルト子路先づ口を開き、「私は車馬でも、衣服でも、何んでも惜しげなく、友人に貸與し、どんなに汚損しても構はないつもりで

す」と答へられた。次に顔淵は「自分の長ずる所を誇ることなく、難儀なことは、自分分として、他人にさせまいと思ふ」と答へられた。其の後で、子路が又口を開き、「今度は先生の番だ。先生の志を聞きたいものだ」と、孔子をうながした。ソコで孔子は、「私 はな、老人には安心され、友達には信ぜられ、若い者からはなつかれる様になりたいたいと思つて居る」と云はれたとの意。

與朋友交言而有信。(學而第一)

朋友と交り言ひて信あらば。

朋友と交はる場合には、信義が第一であるとの意。前節にも、此の節にも、信の字あり。友と交はるには信が第一。

三六 負けるが勝

勝ちたい、勝ちたいと思ふのが、なべての人間の常情である。併し勝ちてはならぬ場合の、少なくともいことを、忘れてはならぬ。

例へば、親の云ふことが無理である様な場合、子としては、理を以て親をへこますが如きは慎しまねばならぬことであります。

「論語」に

子曰。事父母幾諫。見志不從。又敬不違。勞而不怨。 (里仁第四)

子曰く。父母に事へては、幾く諫む。志の從はざるを見ては、又敬して違はず。勞して怨みず。

子たるものが、父母を諫むる場合には、幾諫と云つて、そろ／＼、やんばりと諫め

ねばならぬ。而して縦ひ、父母が我が言を聞かれなくても、腹を立て、「コンナ分らぬ父母は、もう尊敬出来ぬ」とか。或は又「モウこんな父母の爲めに働くのはイヤになつた」などと、云つて、父母の言に違ふたり。父母を怨んだりしてはならぬとの意。

自分は、どこまでも腹を立てずに居て、父母の心の和ぐをまちて、何度でも諫むべきであります。

世間には、初めから、「お父さん何んと云ふことです」「お母さん何んと云ふことです」などと、叱つてかゝり、父母が其の言をきかぬと、直ぐ、「モウこんな親は駄目だ」と、ステてかゝる子が多い。カウした人達は、此の句を三唱して深く反省すべきであります。

これは「易」に「母の蠱を幹す。貞しくすべからず」(母の心得違ひを諫むる様な場合、きつく云つてはならぬとの意)とあるのと、同巧異曲の語です。

夫婦の間にしても同じことで、夫が悪く、妻が善い場合にしても、妻が餘りに強く出過ぎてはいけない。最近にも、或家の妻君が夫が外に愛人を拵へたのを怒りて、家を飛び出し、餘りに騒ぎ廻はつたので、遂に夫は失職し、娘は發狂するに至つたと云ふ悲劇がありました。

○
他人に對する場合にしても、人の非をトガメ過ぎるのはいけない。「易」に「苦節は貞しくすべからず」(いゝ事でも度を過ぎすとよろしくない)とあります。例へば思慮するはよき事なれど、之れも度を過ぎすと、徒らに心を勞することとなりて、いけない。
人と議論して勝ちし場合にしても、氣をつけて、言ひ過ぎぬ様にしないと、「窮鼠猫をかむ」の災なしとは云ふべからずです。
つい先日にもコンナことがありました。自動車に泥をかけられた男が、餘りに口汚なく

運轉手を罵つたので、却つてなぐられて仕舞ひました。
古い話では、織田信長はナカノの英雄でしたが、淺井長政の鬪體を酒の肴としたり。武田勝頼の鬪體を酒杯としたり。或は又、森蘭丸に命じて、光秀の頭を鐵扇で叩かす様な、甚しいことをする人でしたので、其の終りを全うすることが出来ませんでした。

○
又來たての嫁さんが、あんまり家のことに深入すると、正しくてもいけない様に、入つて間もない社員が、會社のことに就て、彼れ是れ言ひ過ぎるのもよくない。社會の舊弊打破にしても、急いだり、やり過ぎてはいけない。「易」では此の事を、「恒を凌する、貞しけれども凶」と云つて戒めてあります。
二宮尊徳翁が野州の櫻町で、初めに失敗したのは、其の更生を急ぎ、自己の理想實現に性急であつたからでした。併し成田に逃げて不動さんの斷食堂にこもつて居る間

に、櫻町の人の心が一轉して、斷食後は思ふことがスラ／＼と實行出来るに至りました。若しも二宮先生が負けて退くことを知らず、退一步と云ふことを知らぬ人でしたら、後の成功は得られなかつたでせう。

別に贈賄して得たのでなくても、力量以上の地位を得ると云ふことは、よろしくない。ソコを「易」では「翰音、天に登る、貞しけれども凶」と教へてあります。

翰音とは鶏聲のこと、鶏は何んば羽ばたきしても高くは飛べない。従つて其の聲は天に達することは出来ない。若し達しない者が達したらソレは必らず不幸の因となるに相違ありません。

○
自分に何んの罪もないのに、周囲の人々に誤解されて困る場合がある。サウした場合に、何んば辯解して歩いてても、效のないことがある。其の時には「黙つて時の來るを

まつのが最上の策である」と云へます。

岡山孤兒院の創立者石井十次氏は、一時随分誤解されて、攻撃された人でしたが、彼は一度も辯解をしませんでした。ソレは徒に「今、辯解しても無駄であるが、其中に分る時が来る」との確信があつたからです。趙國の廉頗將軍は、縦しドンナに功勞あるにもせよ、下賤な生れの蘭相如が、自分の上に立つに至りしを怒り、蘭相如をやつつけてやらうと、機會をねらつてをりました。蘭相如はソレを知りて、何時も逃げる工夫ばかりしました。従者は其の態度を卑怯であると考へ、或時諫めをなせしに、蘭相如の曰く

私 は廉將軍を恐れるワケではないが、思うても見よ。今暴秦の趙國に兵を加へざる所以のものは、吾等兩人のあるからではないか。然かるに吾等兩人若し戦うて、一人は傷つき、一人は倒れなば、趙國はどうなるであらうか。私の廉將軍をさけて居るのは、身を思はで、國を思ふからである。

と。しばらくして後に、廉頗は之れを耳にして赤面し、遂に罪を蘭相如に請ふに至つたと云ふ。

負けてのく人を弱しと思ふなよ。知恵の力の強き故なり。

大楠公の旗じるしに、「非理法權天」とあり。之れは非は理に勝かず。理は法に勝たず。

法は權に勝たず。權は天に勝たずと云ふ意であるの事です。

非は理に勝たずとは。例へば人の物をあづかり置きて、其の主ぬしに返さず、是は前々よ

り我が持ち物なりなどと、非を通さんとする場合。其の物の主ぬしに、あづかり證文しょうもんを出

されては、最早一言半句も出ないであります。

理は法に勝たずとは、例へば子に如何ほど理がありても、子は親に勝てぬと云ふ天下

の大法を如何ともすることが出来ません。

法は權に勝たずとは、理も大法も、一時權力者に勝てぬことがあるを云ふのです。

權は天に勝たずとは、如何ほどの權力家にも、如何ともすべからざるものが澤山たくさんにあ

るを云ふのです。

此の旗じるしからも、我にドンナ理がありても、世には理で勝てぬ者のあることを、よくよく思ふべきであります。

三七 實踐躬行にも工夫あり

一生懸命に修養講話をした後で、屢々聴衆の一人から、「御説は御尤ですが、どうも實行が六つかしくて」と挨拶さるゝことがあるが、私にとりては之れ程不愉快なことはありません。

修養のことばかりではありません。何事にしても、ホントに分らぬと、實行が六つかしいが分ると何んでもありません。されば實行は六つかしいのでなく、ホントに能く分るまで研究して居らぬのが悪いのであります。

私は農村をも巡講してますが、農村の青年で「農業は骨が折れて、ツマラヌ仕事である」と云ふ青年は、悉く農業を研究して居らぬ青年であります。たま〜「農業は面白いです」と云ふ青年あらば、ソレは必ず、農業を十分に研究して居る青年であります。

ソレと同じ道理ですから、「論語」に

子夏曰。博學而篤志。切問近思。仁在其中矣。(子張第十九)

子曰く。博く學びて篤く志し。切に問うて近く思ふ。仁其の中に在り。

とありて、實行は六つかしいとは云つてありません。

さて「博く學びて、篤く志し」とは、修養の話は度々聞くがよろしい。成る丈け多くの人のお話を聞くがよろしい。而して其の中に成る程と思ひ當ることあらば、开をしつかりと握り占めて、必らず我ものにしようとせよとの意であります。

「切に問ふ」とは、能く分らぬことは、充分に分るまで、ひつこくきけとのことでもあります。

世間には、疑はしきことがあつても、問はぬものがある。これが一番悪い。折角問うても、ツマラヌ事に遠慮して、押して質問せず、半分で引つ込むものがある。これ

は其の次である。

お客にお茶を出す場合、茶碗のフチが一寸缺けて居ても氣にするクセに、自分の頭へ半分りを詰め込んで平然たるは何事ぞ。

分らぬことは、どこまでも質問し、しつこいと言はれても、とつくり分るまでは質問を止めぬ。これが最上の人である。

縦ひ、物覚え悪く、どんなに不器用であつても、若し其人に此の良習慣（しつこく質問……）あらば、其人はキツト偉い人になります。

かく考へて來ると、「切に問ふ」ことをおス、メ下さつてある、聖人の教へに思はず頭が下がります。

「近く思ふ」とは、身に當てはめて考へよと云ふことであります。

櫻の花ならば、遠くから眺める方がよいかも知れない。併し修養上の事は、近く身に當てはめて考へなくてはイケない。これが則ち「近く思ふ」であります。

例へば青年が旅行に出かけ、汽車が京都の驛にとまつて降車した場合。續いて降りた他の青年が老母をつれて居て、將に降りようとする老母を「あぶなう御ざいますよ」と云つて、手をとつて上げたのを、見たとします。此の場合、青年がたゞ「あの青年は感心だ。今時コンナ青年は珍らしい」と思つた丈で、行つて仕舞ふたら、何んにもならぬ。けれども此の青年「僕、お母さんと旅行したことがあつたかしらん」と考へて、二三年前に、お母さんと某所へ旅行したことを思出し、「其の時、どうしたかしらん」と考へて「自分は、お母さん、早くく、ぐづぐづしてると汽車が出て了ひますよ」と叱る様に云つた丈であつたことを思ひ出し、自分の此の所爲と、あの青年の只今の所爲とを比較して、思はず赤面したとせば、如何でせう。あの青年の所爲を一見したことが、身にしみて大に爲めになるではありませんか。

これが則ち「近く思ふ」であります。

見た場合、聞いた場合、讀んだ場合、何れであつても、成程と思ひしことは、これを

身にあてはめて、「近く思ふ」ことにいたしたい。

聖人の「近く思ふ」の教、成程、親切な教ではありませんか。

「仁其の中に在り」とは、以上の如く、「博く學びて篤く志し。切に問うて近く思うて居る」と、何時とは無しに、善い事が自然に出来る様になつて居るとの意である。

仁は善の總稱ですから、凡ての善い事と解してよろしい。

○

以上の方法の外に、道德の實行を容易ならしむる、方法工夫が二つある。

其の一は、是非とも實行したいと思ふことを、書いて、机の前にでも貼つけておき、毎朝開を讀みて、開を心にしみ込ますことである。

美澤進先生は、明治十一年に慶應義塾を卒業し、明治十五年から新に設立されし横濱商法學校（後に横濱商業學校と改稱）の校長となり、爾來四十二年間、同校の校長を

した人であるが、此の先生は、自分の撰定せし校訓

正直。 勉勵。 正確。 緻密。 整頓。 精察。 機敏。 謹慎。 耐忍。 注意。

を、毎朝生徒一同に讀みきかせ、四十二年間一日も怠らなかつたと云ふ。工場では工場訓。家庭では庭訓を掲げて、工場主なり、主人なりが、開を此の美澤先生の様に、熱心に繼續的に讀みきかせて居ると、開が必らず實行さるゝことゝなつて參ります。

○

今一つの方法は

同志相集りて（三人でも五人でも十人でもよろしい）、道の話をして、語り合ふことである。

昔、薩摩に、伊集院俊矩と云ふ人がありましたが、此の人は餘程の人物であつたと見え、カウ云ふ逸話があります。

親を殺した罪人があつて、役人が捕へて来て、白状ささうとするが、ナカ／＼白状しない。其の役人の中に、伊集院氏の友人も居たので、彼は一日、其の役人に向つて、

三六 實踐躬行にも工夫あり

「私に一時間程、其の罪人を貸してくれませんか」と云ひました。役人は手こずつて
る所であるので、ソレではと罪人を伊集院氏に托しました。スルト伊集院氏は其の罪
人に向ひ「お前も眞晝間、コンナ所へ呼び出されて、正面から、聞かれたのでは、何
んぼ何んでも、ハイ殺しましたとは云へまい。尤もぢや、尤もぢや」と云ひながら、
ホタリと、兩眼から涙を落しました。

罪人は之れを見て、忽ち「恐れ入りました」と、平伏したと云ふ。

此の道話一つで、略ぼ彼の爲人は分りますが、彼の言に

義と言ひ、勇と云ふは、朋輩中寄り集つて、互に勇の義のと申す事を詮穿致さねば
出ぬものぢや。

とある。

以上の如くすれば、誰でも修養が出来る。誰でも道德實行の人になれます。

三八 心の梶とり

数年前の夏、私、越後に旅行しました折り、國上山の五合庵や、出雲崎など、良寛
さまに縁のある所を見て参りましたが、其の良寛さまの言葉の中に

患難に逢うた時には、患難に逢ふがよろしく死ぬ時には死ぬがよろしく候

とある。實際サウです。

患難に逢はぬ間は、患難などに逢ひたくないと思つて居るもよろしいが、既に患難に
逢うた場合には、何んで此の様な患難に逢ふのかと、愷くのは見つともない。ソレで
逢うたのだから仕方ないと、アキラメて、今度はさて此の患難を如何にして乗り越す
べきかと考ふべきであります。死の場合にしても同じこと、平常生命を愛護するのは
よろしいが、さていよく死なねばならぬ場合には、狼狽するのは見つともない。此
の上は、「せめては見事に死なう」と思ふべきであります。

「論語」の中にある)

守死善道。(泰伯第八)

死を守りて道を善くす。

死すべき時には、死をも辭せないと言ふ覺悟なくば、道を善くすることが出来ない。

志士仁人無求生以害仁。有殺身以成仁。(衛靈公第十五)

志士仁人は生を求めて以て仁を害することなく、身を殺して以て仁を成すことあり。

見危致命。(子張第十九)

危きを見て命を致し。

道の爲め、義の爲めには、危険が身に迫つても逃げない。

などの句も、コ、を云つたものであります。死なねばならぬ場合に、助からうとする、道にはづれる。男がすたる。避けられぬものはサケようとすなどの教であります。サウした場合、「心の梶とり」が出来ないと、恥をかくのです。

「中庸」にも

君子は其の位に素して、其の外を願はず。富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ふ。君子入るとして自得せざるなし。

とある。何所におかれても、其の場々で一番いゝ様にして行けとの教へであります。富貴の身の上となつた場合には、尙も儉約して生活し、餘力を以て世の爲め人の爲めに盡す。ソレが即ち富貴人の爲すべき所を爲すのであつて、富貴に素したのであります。イクラ貧乏しても、背に腹はかへられぬと云ふ類のサモしい量見を出さず、晏如として居る。ソレが則ち貧賤に素して居るのであります。自分の力でドウするこ

とも出来ないことは、早速アキラメ、さて此の場合どうするのが、最善の道であるかと、考へる様に、心に向ける、コレが則ち「心の梶とり」であります。

例へば、明日お天気でしたら、洗濯をしようと、汚れものを澤山縁の隅へ出して置いて寝ね、起きて見たら雨が降つて居た。カウした場合、雨を怨んでも仕方がない、ソコで早速心の梶とりをして、洗濯は止めて、ソレでは押入の掃除をしようと云ふことにすれば、雨は少しも邪魔になりません。

甲が近頃道で會うても、自分に挨拶せぬ場合腹を立て、見ても何んにもならぬ。ソレよりは他人の心は支配出来ぬものとアキラメて、心の梶とりをして、コチラから聲をかけることゝするがよろしい。さすれば甲も段々挨拶する様になつて参ります。

又或先輩に知られようとする場合、其の先輩が自分を知つてくれないと云つて見た所で仕様がなない。其の場合、自分の心の梶とりをして、自分の方から先づ誠を其の先輩へ運ぶべきであります。さすれば遂には其の先輩に知らるゝに至ること請合です。赤穂の義士の一人、堀部彌兵衛に、カウした逸話があります。

堀部彌兵衛が始めて淺野侯に仕へる時の話などは随分ふるつて居る。彼奴が淺野侯に惚れ込んで、どうしてもあの人に仕へなければならんと決心して、八方に手を廻はした末、其當時の江戸詰めの家老の何んとか云ふ奴に面談する事となつた。其時に家老が、一體お前は何に出来るかと聞いたたら、ハイ手前は別に是れと云ふ藝もありませんが、書道だけは一通り心得て居まして、諸侯の御祐筆などにヒケは取りません。恐れながら御藩中の書き手と云ふ人にも劣るまいと思ひます。と述べ立てた。家老はその言葉を信用して、君侯へ言上した。愈々召抱へらるゝ事となつて、其の以後四五日過ぎて淺野侯に何にか御書き物の御用があつたので、其の家

老に今度抱へた奴が書道の名人と云ふなら、之れを書かせろ、と命ぜられた。家老は早速彌兵衛を召出して、淺野侯の御命令を仰せつけると、彼奴は頭を搔いた。そして臆面もなく云ふには、スリやアとんでもない御事で、拙者は字など云ふ事は、一體どんなものか、右に曲げるか左に曲げるものか存ぜん位で、御大切の御書物など、中々以て出来る譯ぢやありません、と酒やア酒やアと云ひ切つた。其時の家老の驚きと云つたらありやアしない。そりや大變だぞ、貴公は何も出来ないが書丈は名人だと云ふから、其の事をお上に言上して、それでお召抱へになつたのに、今更字は書けないなぞといはれては、貴公ばかりか、推薦した此の拙者までが、君侯を欺罔したと云ふ、罪は通される事が出来んぞ、何とも閉口至極ぢやと、家老が非常にシヨゲ返つた。けれど當の彌兵衛は儼然として、イヤ誠に御氣の毒の次第で御座る。

併し拙者は、此の君侯以外に御奉公する人はない、と、決心して、色々苦心したが、

中々容易ぢやなかつた。其の時に貴殿から何が出来るかと訊かれたので、何にも出来ないと答へたら、斷られて了ふに決まつて居る。書道の名人と申したのは、只だ召し抱へて貰ひ度い許りの方便で御座つた。是非此の君侯に、御奉公したいと思つた、其の願ひが叶つて、一日でも御家來になられた以上、最早毛頭思ひ残す事は御座らんから如何様とも御法通りに御處置が願ひたい。一體拙者は、何にと云ふ藝能は御座らんが、一旦御奉公した以上は、いつ何時、即刻其座に於て、一命を召さるゝとも、決して未練がましき心は起しません。……之れ丈けが拙者の藝能で御座る。……

家老は煙に巻かれた體で、閉口しとつた。が、隠す事も出来ないから其の儘君侯に言上に及ぶと、淺野侯は此れをきかれて、

左様か字は書けないのか、併し其の言ひ分が氣に入つた、かまはず抱へとけと、仰つしやつたと云ふことである。

此の彌兵衛の如き誠を以て向へば、先輩は遂に其人の知己となること請合であります。

カウした次第ですから、心の梶とり位、大切なものはありません。

三九 時。處。位に就て

古來「時。處。位」の教へあり。しかし今の青年の多くは、ソナナことは考へない風がある。よりてその意味について、少しくお話しして見たいと存じます。先づ時のことからお話しませう。

さて何を考へ、何をするにも時といふものを計算の中に入れねばならぬのは、元よりいふまでもありません。たとへば人を使ふ場合にも「論語」に

使民以時。(學而第一)

民を使ふに時を以てす。

とある通り、時といふ事について考へなければなりません。即ち農民を使ふには農閑期を擇び下男下女を使ふには、深夜や早朝は成るべく避けるといふ風であらねばなり

ません。主人が奉公人を使に出すのに、雪の日に躊躇したといふのは、人情サウあるべきです。

雪の日や、あれも人の子樽拾ひ

「論語」にまた「ドンナえらい人が、ドンナ仕事をするにしても、ソレトノ年月がかかる」といふことを教へてあります。

これは分り切つたことのやうであつて、その實、案外に「時を待つ」といふことを、知らぬものが多い「孟子」にある宋人のやうに、苗の成長を待ちかねて、早くのびよと、引張つて歩き、その根をいためて、つひに苗を枯らすやうな馬鹿者が少くないのであります。

私はある家である禪僧が「時、桃栗三年、柿八年」と書いた額を見たことがある。「時を待つ」を知ることが大切であります。

ライピングストーンが、アフリカの奥地へ入り込んで、その消息の絶えた時、スタン

レーが捜しに行きました。數ヶ月がかりでやつと見付け出した時、ス氏は先づ第一に、リ氏に家書を渡しました。かゝる折の家書は、いはゆる「家書萬金に値す」であります。しかるにリ氏は家書をポケットにほり込んだまゝ、切りに世間の新聞をきゝたがるので、ス氏は氣をきかせて「私にお構ひなく、先づ御手紙をお読み下さい」といふと、リ氏は「イ、エ、私は待つことを知つて居ります」と答へたと傳へられて居ります。この待つといふこと位、大切なものはありません。さればこそ「易」に「動靜その時を失はず」時に従ふの義、大なるかな」とあり。西洋の諺にも「鐵は熱い中に打て」とあるのです。

「論語」に

子曰。里仁爲美。擇不處仁。焉得知。 (里仁第四)

子曰く、里は仁を美と爲す。擇んで仁に處らずんば、焉ぞ知を得ん。
 とある通り、人は住居を定むる場合、公園とか、活動寫眞館とかの隣を選んではならぬのであります。孟母三遷のお話は、この例話として一番名高いものでありませう。
 就職の場合に、會社の性質を考慮して、性質の悪い會社へ入らぬやうにする事も、この教への中に含まれて居ります。長崎の商業學校を卒業した一青年が、就職難から心ならずも一時半年程、同市のある性質の悪い會社へ入社した事が祟つて、その後如何に苦心しても、ドウしても性質のいゝ會社へは入れぬとのことであります。古來「良禽は木を擇んで棲む」との語ある。ゆゑあるかな。
 位。何を考へ、何をなす場合にも今一つ是非計算の中へ入れねばならぬものがある。それは自分の身分、地位、即ち位についてであります。
 「論語」はソレに就き

子曰。不在其位。不謀其政。(憲問第十四)

子曰く。其の位にあらざれば。其の政を謀らず。

曾子曰。君子思不出其位。(憲問第十四)

曾子曰く。君子は思ふこと。其の位を出でず。と教へてあります。

青年が初めて、會社とか、新聞社とか、役所とかへ就職した場合、兎角、上長の所爲を是非したがるもので、かゝる場合、自分の目前の職務につき勉強の足らぬが普通である。若し早くこれはイカぬと氣がついて、努めて上長の所爲は是非せぬこととし、目前の職務に勉強することに改むるものあらば、その青年は他のソレに氣の付かぬ青年よりは、萬事首尾よく行くに相違ありません。
 右の教へをまた、カウいふ風に應用することも出来ます。たとへば父子口論の場合なぞ、激して來ると、子たる者が、相手は父だといふことを、忘るゝに至るが常であ

る。若し相手は父だ、私は子供だといふことを思ひ出さば、イクラ激しかけても親に對して無禮をせず済みます。上長と口論の場合なぞにも、相手は上長だといふことを忘れぬやうでありたいものです。

○ 古來「時、處、位」の教へあるは、およそ右の如き理由あるからです。私は青年諸君にこの「時、處、位」の教へを味はれんことを希望します。青年の考へが兎角抽象的となり勝ちで、具體的とならぬのはこの「時、處、位」の教へを知らぬからであります。

四〇 周囲を見廻はす餘裕

昔、孔子のお弟子の曾子は、日に三度び吾身を省みたといふが、これは實に尊いことである。吉田松陰先生などは「論語」の中では、この句が一番おすきで、その松下村塾では、松陰先生ほとんど毎日のやうに、この句について語られたといひます。これとは一見矛盾して居るやうであるが、己を忘れるといふことも、また大切なことの一つであります。

希臘の神話に「河の神様の子であるナシサスは、自分の姿を見ねば、何年経つても死なぬと、天の大神から約束されて居たのであるが、ある日河水にうつして、自分の姿を見たばつかしに、その特權を失うて仕舞うた」とあるが、今日もこのナシサス同様、自分の姿ばかり見て居るために、二六時中自分のことが忘れられぬために、自己の一生を暗黒たらしめて居るものが少くありません。カウいふ人々は、若し何にか心配事

があつたり、病氣でもしたりすると、ソレばかりを苦にして、世には、同じ不幸な人や、同じ病人のあることすら考へることが出来ず、自分ばかりコンナ不幸に會ひ、コンナ病氣をするかのやうに考へて悲しみます。

○

これ程ではないにしても、「心だに誠ならば、何をしたとて、いゝではないか」などといつて、「人がドウ見るか。ドウ考へるか」について、少しも考慮しないものも感心出来ない。これは一を知りて、二を知らざるものといはざるを得ません。たとへば、夜間一人で西瓜畑の中へ入つて居るのを、番人が見付けたら、キツと西瓜盗人と思ふに違ひないし、通行人が見付けても、怪しいなあと思ふに相違ありません。外から見ると人は、外形だけ見て判断します。されば心に誠のある事も大切であるが、他人に間違つた判断をされぬやう注意する事も肝要であります。若い男女がたつた二人で、暗い所を歩くなどといふことも、自分等は清い交際のつも

りでも、外から見ると人は、サウは見えてくれませんか、慎しまねばならぬことです。

「論語」に

不學無以立。(季子第十六)

禮を學ばざれば以て立つ無し。

といつて、禮を知らざる者は世に立つことが出来ぬと説いてあるのは、コ、をいつたものでありませう。

人に疑はれたとて、悪く思はれたとて、構ふものかといつて、勝手な振舞をして居ると、その人腹には邪氣がないにしても、世間から變人扱ひをされて、眞面目には相手にしてくれる人がなくなる。それでは世に立つことが出来なくなるではありませんか。

ソレと同様で、他人と會談の場合などにおいて、たゞ正直なことをいへばいゝといふ

ものでなく、相手を見て、そのいはんと欲する所に、多少の加減をして行かねばならぬ。殊に目上の人に對して、會談の場合には、この點の注意が大切であります。ソレで「論語」に

孔子曰侍於君子有三愆言未及之而言謂之躁言及之而不言謂之隱未見顔色而言謂之瞽。(季子第十六)

孔子曰く、君子に侍するに、三愆あり。言之に及ばずして言ふ、之を躁と謂ふ。言に及んで言はざる、之を隠くすと謂ふ。未だ顔色を見ずして言ふ、之を瞽と謂ふ。後輩が先輩に對する場合、先輩がまだ口を開かぬ先きに、後輩が先づ口を開く、かゝるをアワテものといふ。先輩から何んとかいはれても、だまつて居るのはよくない、これをカクすといふ。先輩の顔色を見ずに、何時までもドクドクしやべつて居るのは盲目者同然であるとの意。

と示されてあります。

かういふことをいふと、青年諸君の中には、「ソツナことを考へて何時もビク／＼して居ては、人間が小さくなるばかりでせう」と、非難する者がありませう。成程サウ考へなざるのも、一應はもつともであるが、必ずしもサウではありません。實は主觀的にしか考へることの出來ぬのは、人物の小さい證據であつて、大人物には、主觀的に考へると同時に、客觀的に考へることも出來。時と所を考へて加減することの出來る。即ち周圍を見廻す餘裕のあるものです。

更に進んで、時としては積極的に己を虚しくして人に對することが出來るやうになると、なほ結構であります。

易に「中虚の孚あれば、愚の魚にても、感動せしめ得べく、則ち吉にして、如何なる大川をも涉り、如何なる困難をも排除し得べし」とあるは、こゝをいつたものであり

ませう。

鏡が能く物を寫すのは、中虚だからです。何か物の寫つて居る所へ、他の物を寫すと、重なり寫つてソコに混亂が生じます。丁度ソレと同じことで、腹に一物ある人が他人の言を聴く場合には、兎角心中に混亂が生じて、判断を誤ることが多いものです。

四一 善事を行ふに敏なれ

「論語」に

敏於事 (學而第一)

事に敏にして

との句があるが、これは「善事を行ふに敏なれ」せねばならぬと氣の付いたことは、早速にせよとの意で、大抵の人は不精で、せねばならぬと、氣が付いてもナカクせぬ。ソレで敏なれといはれたものであります。孔夫子は大變に不精が、おきらひであつたと見え、「論語」の各所に敏の字が用ひられてあります。

○ 私(わたし)が雨(あめ)の日曜日(にちようび)の午後(ごご)、ある家(うち)へ遊び(あそび)に行つて、主人(しゆじん)とお話し(はな)してゐると、その家(うち)

三〇〇
の息子が歸つて来て、縁側から上り、下駄を雨ざらしにしておくので、主人は「その下駄、玄關に入れておけよ」と聲をかけました。息子は黙つて下駄をつまみ、玄關まで持つて来て、立つたまゝカチンと下駄を落としました。私はこれを見て、「この息子殿大分出来が悪いわい」と思ひました。これ程不精では、善い事の出来つこはありません。

○
道路にガラスの破片や、古釘などの落ちてゐるのを見つけた場合、誰でも「子供が怪我しても、自轉車がバンクしてもいかぬ、拾うて始末しておきたい」と思ふのであるが、直ぐその後から、「面倒臭い」とか、「誰か始末するだらう」とかといふやうな、いひわけが出て来て、そのまゝ行き過ぎて仕舞ふが常である。これもツマリ不精の致す所ですなあ。何ぞ善事を行ふに敏ならざる。

友人が病氣だとき、その見舞に行く時、鶏卵の紙箱入を持って行く、かかる場合にも、例の不精が出て店先に紙箱につめて見本に出してあるのを、「これでいゝぞ」と、ソレを買つて行くのがある。病氣見舞に持つて行くのだから氣をつけてつめてくれよと、いつて、わざ／＼つめさしても、左程時間のかゝるものでもないのに、人間は大概、これ程に不精なのであります。さてもらつた方で、卵をわつて見ると、黄味の流れて居るのが多い。ソコでもらつた方で氣を悪くします。少しの不精から折角の親切が臺なしであります。氣の付いたことは、早速せねばならぬばかりでなく、行届いた仕方をしなくてはなりません。

○
しかし古今の孝子傳とか、奇特な行ひをした人の傳記とかを讀んで見るに、彼等はそろひもそろうて不精知らずであります。「せねばならぬと氣の付いたこと」は早速にす

るし、また「しかけた事を、途中でイヤになつたり」はしてをりませぬ。

○ 「鳩翁道話」に、周防の貞女お石のことが、のつてをりますが、その中の一節に御法談のある隣村へは、およそ道一里あまり、しかるにお石は、姑にしばらく留守をたのみ、「やがてお迎ひにまわります」と、帯やうのものにて、小兒を負ひたる如く舅を負ひ、女の身にてかひくしく通ひます。やがて寺につくと、舅を下して、誰かに頼みおき、これより引返して、家に歸り、姑を背に負ひ、また寺に行く。さて法話をはれば、舅を負うて家に歸り、また寺へ姑を迎へに行く。すべて一座の法話を聴聞するに、舅姑を負うて、一里餘の道を、往來都合六たびにおよぶ。しかも一日の事ではござりませぬ。法座日限の間、雨の日も、風の日も、一日も怠ることなき孝順の行狀云々とあります。

○ 嘗て滋賀縣犬上郡巡講中

大正二年に八十五歳の高齡で、この世を去つた。同郡久徳村の醫師小菅菟峰氏は、老境に入るまでは、毎日々々十里も徒歩して、近村近郷を廻り、病人を助け、處方は誌すも、藥價は誌しおくことなかりしとのお話をうけたまはりました。

○ アブラハム・リンカーンは禮服をつけて、馬車で何處かへ出かける途中、一匹の小豚が路傍の溝に落ちて難儀をして居るのを見るや、直ちに馬車を止めさせ、自から降りて、禮服の汚るゝをも構はず、小豚を救うてやりました。

友人の一人が、これを見て、「大統領ともあらうものが、ソナナことをして、禮服を泥まみれにするのは、チト考へものだ」と忠告せしに、リンカーンは「しかしね君、何んだかんだと理窟をつけて、行ひかけし善事を中止すると、良心の發動に停止のクセ

がつく。ソレが恐ろしい」と答へられたといふ。

「善事を行ふに敏なれ」この語を日々三唱いたしたいものであります。

四二 仲違ひした場合

ひととの交際を圓滿にし、どんな人とも仲違ひなどせぬやう注意しなくてはならぬことは元よりいふまでもありません。しかし神や佛でない人間である以上、さてイクラ注意しても誰とも仲違ひせず一生を過ごすことはむづかしい。それで「仲違ひした場合」について考へておくことも、強ち無用ではないでせう。

○
昔、ギリシヤで、病氣を治療した方法の中に「深夜、さびしい墓場へ、病人が自分で行つて、黄色な草花をとつて来てせんじて、飲むと治る」といふのがあつたさうです。これは正しく「病人をして、しばらくでも、病氣を忘れしめたら、ソレで病氣治療の上に効力がある」との原理を應用したものに外ありません。同じ道理で不快なことはしばらくでも忘れると、ソレが自分の救はるゝ元となります。しかるに世には「恩を

忘るゝことはあつても怨みは決して忘れぬ」人が多し。さうした人で結局幸福になつた人はありません。

子供が喧嘩しても、直ぐまた仲よしになるのは、直ぐお互にいひ合うたことを忘るゝからである。大人が一度争ふと、ナカ／＼また仲よしとなれないのは、お互にいひ合うたことを忘れかねるからであります。大人は子供の喧嘩かといつて子供がツマラヌ事で喧嘩すると笑ふが、子供の方では、大人の喧嘩が長引くのを笑うて居ることでありませう。

○
自分が救はれると、相手に對し少くとも、左の態度に出ることが出来ます。

「論語」に

或曰。以德報怨。何如。子曰。何以報德。以直報怨。以德報德。（憲問第十四）

或ひと曰く。徳を以て怨に報いば。何如。子曰く。何を以てか徳に報いん。直を以て怨に報い。徳を以て徳に報いん。

句意は、老子の教を信するある人が、一日孔子先生の所へやつて来て、老子の言葉、「怨に報ゆるに徳を以てせよ」についての意見を問はれました。ソコで孔子先生「うらみある者にも、恩徳を施すといふことであれば、恩徳を受けし者に對してはどうするソコの區別が出来ぬではないか。ソレ程にせずとも、怨みある者にも公平無私の態度で接することが出来、恩徳を受けしものには、必ず報恩するといふことであれば、ソレでよろしい」といはれましたと」いふにあるのでせう。

○
藤堂高虎は朝鮮で功を争うてから、加藤嘉明と仲悪でしたが、將軍家から會津へ轉封の相談ありし時、それを辭し、それでは誰を會津へ封じようかと問はれし時、「高藤嘉明しかるべし」と推舉しました。將軍家驚き、「彼はその方と仲悪でないか」といふと高

虎謹んで「私事を以て公事を混ぜず」と答へました。後に嘉明これを聞いて高虎を徳とし、やがて兩人仲よしとなつたといふ。高虎の如きは「怨に報ゆるに道を以てした」もので、斯心あらば、つひには一旦仲違ひしたものと和することが出来ます。若しそれ左の如く積極的に出づるを得んか更に早く仲よしとなることが出来ます。さて自分の言分を通さう、通さうとする中は、何時までしても、一旦仲違ひした人と元の仲よしとなることは出来ません。コチラが言分を通さうとする中は、相手もその言分を通さうとしますから、この争ひに際限がありません。しかし古語に「利害、是非の意、甚だ明かなれば、則ち親、睦まじからず。交友はらず、事成らず」とあるを思ひ。また「昔、支那に王有道といふ人あり、この人は、隣地の人が境に接して家を建て、雨の日には雨滴の我が庭に落つるも怒らず、「雨の降る日は少ないから、迷惑する日は、サウ幾日もありません」といつて居た」といふことなど思ひ出し「モウこんな行きさつは捨てよう」との氣になつて、次の出會頭に、相手に向ひ、無理にも勉強

して、何事もなかつたやうに、機嫌よく挨拶して見たまへ。相手も以外に機嫌よく答禮してくれる。しかしてその次からは更に軽い氣持で挨拶が出来るやうになり。何時とはなしに、元の仲よしになつて仕舞ふものであります。

もつと手剛い相手であつてもたとへば米國の大説教家ヘンリー・ワード・バイチャのやうにやれば元の仲よしになれること請合であります。バイチャは何にかのことで、自分に悪感情をいだくに至りし者に對し、毎日、毎日、何にか書いて、ハガキか手紙を出し、しばらくして、相手の感情のやゝ和げる頃を見計らうて、突然その人を訪問し、いきなり握手して、語り合ひ、仲違ひをしたまへで、どんな人とも別れては仕舞はなんだといひます。

かくして仲違ひした友を永久にすて、仕舞はず、元の仲よしに回復して行くことは、

大切な心掛の一つといはねばなりません。

四三 生活を第一の念願としてならぬ

子曰。君子食無求飽。居無求安。（學而第一）

子曰く。君子は食飽くを求むるなく。居安きを求むるなく。

苟しくも道に志す程の人にありては、美食に飽くことや、大厦高樓に住むことを、第一の念願としてはならぬとの意。

太田錦城先生が、此の句を評せる文の中に

さて小食は養生、養福の術のみには非ず。此の嗜慾をも抑へ制する程の剛明の人は色情をも抑へ制すべく、衣服玩好凡百の欲抑へ制すること難あるまじ。されば身を立て家を起すも、護身節用も何の難きことあるべき。此の如くなれば賢人となるべきことは必定なり……………

朝夕一度蔬食を忍び食へば、一事の善行たりと袁了凡は教へたり……

顔真卿は八省の尙書なれども、家屬多くして俸米少きが故に、粥のみを食はれたると見えたり。

朱晦菴も晩年蔬食のみ食はれたると見えたり。

とあり。味ふべきの言であります。

四四 徳川家康と論語

徳川家康の遺訓

人の一生は重き荷を負うて遠き路をゆくが如し。急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望み起らば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。いかりは敵と思へ。勝つことばかり知りて負くることを知らざれば、害其身に至る。おのれを責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。

曾子曰。士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以為己任。不亦重乎。死而後已。不亦遠乎。(泰伯第八)

曾子曰く。士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁を以て己れが任

となす。亦重からずや。死して後已む亦遠からずや。から出たものである。

士たる者は、其の心、廣く且つ堅忍不拔でなければならぬ。サウでないといふ其の重き責任を脊負うて、何所までも忍んで行くことが出来ない。何れ責任が重いと云ふか。仁徳を行ふを以て己が任と爲すのですから、重いと云はざるを得んやであります。何れ何所までも忍ばねばならぬと云ふか。死して後ち已む覺悟を要するのであるから、而か云はざるを得んやであります。との意。

今一つ。徳川家康、一日、林道春をして、「論語」の一句

子夏曰。賢賢易色。事父母能竭其力。事君能致其身。與朋友交言而有信。雖曰未學。吾必謂之學矣。（學而第一）

子夏曰く。賢を賢として色を易へ。父母に事へて能く其の力を竭し。君に事へて能く其の身を致し、朋友と交りて、言うて信あらば未だ學ばずと曰ふと雖も、吾は必ず之を學びたりと謂はん。

を講ぜしめ、講じ終りし時に、此の一句の中では、能の一字が眼目ぢやなあ。と云はれたと云ふ。

序手に此の一句の講義をしておきませう。

「賢を賢として色を易へ」とは、賢人にお目にかゝりし場合には、同じく人なり、私もなく立派な人とならねばと、發憤し、自然顔色が變る程であらねばならぬとの意。「賢を賢として色に易へ」と讀みて、孔明か醜婦を娶り、楠正行が辨の内侍を辭したのが、ソレだと解する人もあります。

「父母に事へて能く其の力を竭し」とは、子たるものは父母の爲めには勞ををしんではならぬと思つて、誰でも父母の爲めには、多少は力を竭して居るが、併し能く竭して居るかと思はるゝと、ナカ／＼はいとは云へぬ。ソレがサウ云へる様にならねばならぬ。との意。

○ 「君に事へて能く其の身を致し」とは、臣たるものは、主君に其の身を委(致)ねて、何時もさ／＼げ切りの覺悟で居ねばならぬ。とは思ひつゝ、もナカ／＼そこが能く出来ぬ。そこを能く出来る様にせよ。との意。

○ 「朋友と交り、言うて信あらば」とは、朋友と交る場合には一言でも不信な言があつてはならぬ。との意。

「未だ學ばずと曰ふと雖も、吾は必ず之れを學びたりと云はん」とは、以上の四つが立派に行へる様であれば、其人が「私は未だ道を學びません」と云つても、私はもう學んだと謂つていと云ひます。との意。

四五 孔子と隠者

微生畝謂孔子曰。丘何爲是栖々者與。無乃爲佞乎。孔子曰。非敢爲佞也。疾固也。(憲問第十四)

御生畝孔子に謂ひて曰く。丘何をか爲す。是れ栖々たる者か。乃ち佞を爲すならんや。孔子曰く。敢て佞を爲すにあらざるなり。固を疾むなり。

微生畝は、魯の人で孔子よりは先輩、隠者である。其の微生畝が或日孔子先生に對し、「丘(孔子の名)、お前は何をして居るのだ。何時までも未練がましいではないか。若しかしたらお前はお上手を云うて世渡りを上手にしようとするのではなからうか」と云はれた。スルト先生、「私は世渡りを上手にしようと思つて、お上手を云つたりはして居ませぬ。併し私は貴君の様に、世を見限つて仕舞うて、一を執りて通ぜざる人

とは見解を異にして居ます。私はサウ云ふ人を、惡まざるを得ないのであります」と云つて、彼の頂門に一針を加へられました。

親の病める場合、醫者が見はなしても、孝子としては、なほ見はなすことの出来ないのが親に對しての至情である。此の様に、孔子は社會に對し、國家に對し、どうしても見限ることの出来ぬ至情があつたのです。隠者輩には此の熱愛がない。コ、に孔子と隠者との相違があるのです。

子擊磬於衛。有荷蕢而過孔子之門者。曰。有心哉。擊磬乎。既而曰。鄙哉。硜々乎。莫己知也。斯已而已矣。深則厲。淺則揭。子曰。果哉。未之難矣。(憲問第十四)

子磬を衛に撃つ。蕢を荷ひて孔子の門を過ぐる者あり。曰く。心ある哉。磬を撃つや。既にして曰く。鄙なるかな硜々乎たり。己を知るなきなり。斯に已んのみ。深けれ

ば則ち厲し。淺ければ則ち掲す。子曰く、果なる哉。之れ難きことなし。

孔子先生が衛の國に居られし時、一日、磬と云ふ石の樂器を撃ちて、樂しんで居られました。丁度其の時、物賣りとなれる一人の隠者が、フゴ(蕢)を荷うて、孔子の家の門前を通りかかり、之れをきいて、「此の人には救民濟世の心があるわい」と云はれ、しばらくして、又「併し素晴らしいなあ。何んでも世を救はんと、固くなつて居る。自分のことが分らんと見える。今はもう見限るべき時だ。詩經にも「深い川を渡る時は、衣をぬいで渡れ、淺い川を渡る時には、衣をかゝけて渡れとあるではないか」と獨語されました。孔子先生之をきいて「さて、思ひ切りのいゝことだ。併し思ひ切ることは難しいことではない。ソレよりも六つかしいことがあるとは、お前には分るまい」と云はれました。

○

右の二句を、よく讀めば、孔子と隱者と、どちらが偉いか分る。

四六道の活用

正宗の名刀があつても、劍術を知らぬ人の、護身用にはならぬ。道も其の通りで、能く學び、能く味つて、开を體得しないと用をなさない。

子曰。由也。女聞六言六蔽矣乎。對曰。未也。居。吾語女。好仁不好學。其蔽也愚。好知不好學。其蔽也蕩。好信不好學。其蔽也賊。好直不好學。其蔽也絞。好勇不好學。其蔽也亂。好剛不好學。其蔽也狂。

(陽貨第十七)

子曰く。由や、女六言の六蔽を聞けるか。對へて曰く、未し。居れ。吾女に語らん。仁を好めども學を好まざれば、其の蔽や愚。知を好めども學を好まざれば、其の蔽や蕩。信を好めども學を好まざれば、其の蔽や賊。直を好めども學を好まざれば、

其の蔽や絞。勇を好めども學を好まざれば、其の蔽や亂。剛を好めども學を好まざれば、其の蔽や狂。

孔子先生、一日、お弟子の子路に向ひ、「お前は六つの善言にも、六つの弊害ある話を聞いたことがあるか」と言はれましたので、子路は驚いて立ち（目上の人からお言葉をかけらるゝと立つて答へるのが、當時の禮でした）「まだ承はつたことがありますせん」と答へました。

孔子「ソレぢや今、其の話をしませう。まあ坐りなさい。人を愛するはいゝことであるが、併し人の道を學ばぬものゝ愛は、所謂婦人の仁となり易い。知識慾の旺盛であることは、結構ですが、たゞ知識を好む丈で、人の人たる道を學ぶの念がない者、徒に高遠に走せて、人倫に遠ざかるの弊が生じ易い。信を守るといふことは、いゝことですが、人の人たる道を學ばぬものゝ中には、たゞ信を守ることのみを知りて、是非を考へざるに至るの弊が生じ易い。（彼の俠客が、一旦男とみて頼まれたら、悪徒でも

保護するのがソレです。正直を好むことは勿論いゝことであるが、人の人たる道を學ばざるものにおいて、たゞ正直と云ふことに拘泥して、「其の父羊を攘みて、子之れを證す」と云ふ様なことになる危険がある。又人の曲は少しも假借せざるに至る。ソコで絞、（人の喉をしめる様だと云ふ意味）と云つたのである。勇氣のあるのは結構であるが、人の人たる道を學ばぬ人の勇氣は、やゝともすれば、決斷を誤りて世を亂すの弊が生じ易い。剛強不屈であるのも結構ですが、人の人たる道を學びて、之れを制せざれば、其の弊として、猥りに人と争ひ狂態を演ずるの危険がないと云へぬ。斯く六言の美德にも六弊がある。ソコを注意せねばならぬ」と教へられました。

道を學ぶと云ふことは、たゞ格言を覚えればいゝと云ふものでないことは、此の句から能く學ぶことが出来ます。

ホントに道を體得しないものには、道の活用とか、呼吸とか、機を知ると云ふ類のこ

とが分りません。

子曰。可_レ與_レ共_レ學_レ。未_レ可_レ與_レ適_レ道。可_レ與_レ適_レ道。未_レ可_レ與_レ立_レ。可_レ與_レ立_レ。未_レ可_レ與_レ權_レ。

(子罕第九)

子曰く。與に共に學ぶべし。未だ與に道に適くべからず。與に道に適くべし。未だ與に立つべからず。與に立つべし。未だ與に權るべからず。

「何々先生が来て、某所で修養の會がある。君行かないか」と、誘つて見給へ。早速有難うと云つて、同行を請ふものが案外に少ないものである。一度や二度は同行しても、與に熱心に道を研究しようとするものは更に少ないものである。與に熱心に道を研究しても、國の爲めに家を忘れて、與に朝に立ち得るに至るものは、又少なくなる。與に共に朝には立ち得ても、若し夫れ變に處し得るものに至つては、極めて稀れだと云はざるを得ぬ。

ソコに至ることは六つかしい。併しながら道を學ぶからには、變に臨みて權を制し得る所まで修行せなくてはなりません。

四七 人道の要

子曰。人而無信。不知其可也。大車無輓。小車無軌。其何以行之哉。

(爲政第二)

子曰く。人にして信なくんば、其の可なるを知らざる也。大車輓なく、小車軌なく、其れ何を以て之を行んや。

信義を重ぜざる人は、例へば牛車(大車)に横木なく。馬車(小車)に横木なきと同様で、他にどんな長所があるにしても、實際役には立たぬとの意。

民無信不立。(顔淵第十二)

民信なくんば立たず。

民心の去ると云ふことは、何によりも、恐ろしいとの意。

以上の二句の意、信用の出来ぬ人は、要を失うた扇の如くで、何んの役にも立たぬと云ふにあるのでせう。

熊澤蕃山先生、或時。或人より「秀吉公、無道にして天下速やかに手に入たる事は如何」と問はれし時、左の如く答へられたと、書に見えて居る。

秀吉公も初めのほどは悪しからざりしなり。濃州宇留馬の城主大澤次郎左衛門尉を信長公の味方となして同道ありしに、信長公大澤が剛なるに恐れて、又心を變じなば六づかしからん、此度殺すべしとの給ひり。秀吉強てなだめ給へども許容なし、其時秀吉宿所に歸り大澤を招き、貴殿の身の上にも心もとなき事あり、我を人質に取て急ぎ遁れよとて大澤に身を任せられたり。大澤心は剛なりしかど情なかりしかば、心得たりとて世の常の人質の如くに脇指を抜き秀吉公の心もとに押しあて其夜退きたり。是より後敵味方のあつかひにも、秀吉といへば誰も信じて許したりと聞く……

…斯^かく仁義^{じんぎ}共にありし人^{ひと}なる故^{ゆゑ}に天下^{てんか}速^{すみ}やかに手^てに入^いりたり。後^{のち}に不行^{ふぎやう}儀^ぎ無^な道^{だう}に成^なり給^{たま}ひし事^{こと}は凡^{はん}心^{しん}にて道^{みち}を知^しり給^{たま}はざる故^{ゆゑ}に、天下^{てんか}太^{たい}平^{へい}に成^なりて慎^{つし}みの心^{こころ}も怠^{おこ}たり、且^{かつ}凡^{はん}情^{じやう}の樂^{たの}しみ思^{おも}ふ儘^{まま}に得^えたれば亂^{みだ}れたるなるべし。
 之^これは今^{いま}の世^よに於^おいても同^{おな}じ事^{こと}、又^{また}如何^{いか}なる方^{ほう}面^{めん}の^{ひと}人^{ひと}にも同^{おな}じ事^{こと}です。
 凡^{おほ}そ世^よに此^この理^りを知らぬものは、先^まづないでせう。然^しかるに世^よに信^{しん}用^{よう}の出^で來^きる人^{ひと}は至^{いた}つて少^{すく}ない、之^これ何^{なに}故^ぜでせうか。分^{わか}つて居^ゐる様^{やう}で、ホントに信^{しん}の太^{たい}切^{せつ}なること^{こと}が分^{わか}らぬからでせう。よ^{よく}く信^{しん}の一字^{いちじ}を味^{あじ}はねばなりませぬ。

四八 大なるかな

子曰^こ。巍^{たい}々^{たい}乎^こ。舜^{しん}禹^う之^の有^あり天下^{てんか}也^{なり}。而^し不^ず與^らざる焉^{なり}。(泰^{たい}伯^{はく}第^{だい}八^{はち})

子曰^こく。巍^{たい}々^{たい}乎^こたり。舜^{しん}禹^うの天下^{てんか}を有^あちて與^あらざるや。

△巍々乎 高く大きいこと。

舜^{しん}や禹^うは大^{おほ}きいな。天下^{てんか}を讓^{ゆづ}られても、別^{べつ}に喜^{よろこ}びもせねば、誇^{ほこ}りもしない。一^ち寸^{すん}した地位^{ちゐ}を得^えても、得^{とく}意^い滿^{まん}面^{めん}、忽^{たち}ち威^い張^{ちやう}り出^だす輩^{わい}に比^ひし、何^{なに}んと大^{おほ}きいではないか。高^{たか}いではないか。

子曰^こ。大^{たい}哉^{たい}堯^{ぎやう}之^の爲^{ため}君^{きん}也^{なり}。巍^{たい}々^{たい}乎^こ。唯^{ただ}天^{てん}爲^{ため}大^{たい}。唯^{ただ}堯^{ぎやう}則^{すなは}ち之^の蕩^{たう}々^{たう}乎^こ。民^{たみ}無^な能^な名^な。巍^{たい}々^{たい}乎^こ。其^{その}有^あり成^{せい}功^{こう}也^{なり}。煥^{くわん}乎^こ。其^{その}有^あり文^{ぶん}章^{ちやう}。(泰^{たい}伯^{はく}第^{だい}八^{はち})

子曰く。大なる哉堯の君たるや。巍々乎たり。唯だ天を大となす。唯だ堯之に則る。蕩々乎として民能く名づくる無し。巍々乎たり。其の成功あるや。煥乎たり其の文章あるや。

大きいな。堯の天下に君臨し玉ふや。之れより高大なるものは、天ばかりである。天に準ずるものは、堯のみと云ふべきである。餘りに高大なので、誰でも、堯のことは何んと云つたらいいのかわからぬ。

たゞ誰にも分るのは、其の高く大なる功業(成功)と。光り輝く(煥乎)其の文物制度(文章)とのみであつて、堯の徳の全體は、とても分らぬとの意。私共には、時々、カウした大人物と自分とを比較して見る必要がある。一には、之れによりて謙遜を學び、二には之れによりて、感憤興起することが出来ます。

顔淵喟然歎曰仰之彌高鑽之彌堅瞻之在前忽焉在後夫子循々

然善誘人博我以文約我以禮欲罷不能既竭吾才如有所立卓爾雖欲從之末由已。(子罕第九)

顔淵喟然として嘆して曰く。之を仰げば、彌高く。之を鑽れば、彌堅く。之を瞻れば前にあり。忽焉として後にあり。夫子循々然として能く人を誘き。我を博くするに文を以てし。我を約するに禮を以てす。罷めんと欲して能はず。既に吾才を竭くす。立つ所ありて卓爾たるが如し。之に従はんと欲すと雖、由なきのみ。

顔淵或時さてくと、嘆息して云はれました。先生の徳は、見れば見る程高い。どれ程高いかわからない。たゞ高いばかりでなく、錐でついても、其の錐が入らぬ程に堅い。又例へば前にあつたかと思ふと、忽ち後に在ると云ふ風でナカク捕捉されない。けれども先生の教への仕方は順序正しく、我が識見を廣むる爲めには、古今の事を教へ玉ひ。同時に禮によりて行動することを厳しく云はれました。私もつい先生の

教への上手なのに誘引されて、罷めたいと思っても罷められず、吾が才力のあらん限り學ぶに至つた。其の御蔭で、前に捕捉すべからず見えし先生の徳が、卓爾と吾前に立てるを見ることが出来る様になつた。ぢやと云つて、さて手を出して見るとナカナカとよかぬ、ナカ〜追付くことは出来ないとの意。

○
流石は顔淵である。普通の人では、如何に孔子に接しても、これ程孔子の大なることが分らぬ。大人に接して其の大なることを知ること位、私共の魂に大切なる者はありません。

四九 衆賢の力

子曰爲命裨諶草創之。世叔討論之。行人子羽修飾之。東里之子產潤色之。(憲問第十四)

子曰く。命を爲るに裨諶之を草創し。世叔之を討論し。行人子羽之を修飾し。東里の子産之を潤色す。

とあるが、此の句の意は鄭國から辭令を、隣國の諸侯へ遣はす場合には大夫の裨諶が先づ起草し、次に大夫の世叔がソレを審議し。次に使者を掌る官(行人)の子羽が修飾を加へ、尙ほ其の上に東里(地名)に居らるゝ、執權の子産が之を潤色されました。之れ鄭國の辭令のいゝ所以である。

と云ふにあるのです。

辭令に限らず、何事も此の四つがないとト、ノハないものである。

此の言、甚だ味あるかな。

子言衛靈公之無道也。康子曰。夫如是奚而不喪。孔子曰。仲叔圉治賓客。祝鮀治宗廟。王孫賈治軍旅。夫如是奚其喪。 (憲問第十四)

子衛の靈公の無道なるを言ふ。康子曰く。夫れ是の如くなれば、奚ぞ喪びざる。孔子曰く。仲叔圉は賓客を治め。祝鮀は宗廟を治め。王孫賈は軍旅を治む。夫れ是の如くならば、奚ぞ其れ喪びん。

孔子先生、魯の大夫季康子と對坐の折り。衛の靈公の無道なることどもを、細々と物語りしました。スルト康子は驚いて、「先生、ソレ程無道でなほ其の位を失はぬのはどう云ふワケでせうか」と問ひましたので。先生は、「賓客に接するには、仲叔圉あり。

宗廟の祭祀を主るには祝鮀あり。又軍隊を主るには王孫賈の如きがあると云ふ風に、衛には賢臣多きを以て、靈公如何に無道でも其の位を失ひません」と答へられました。

孔子先生の斯く云はれたのは、靈公の無道を以てしても、良臣あらば、其の位を失はず、況んや有道の君、能く天下の人才を用ふるに於てをやとの意を、力説せんとしてでありませう。

五〇 和 直

「論語」は、和と直とに就て、何んと云つてあるか、ソレに就てお話をいたしませう。

先づ和から始めませう。

有子曰。禮之用和爲貴。(學而第一)

有子曰く。禮の用は和を貴しとなす。

禮は云はゞ規則であるから、之れを行ふ場合に、たゞソレを行ふと云ふ丈けでは、親しみの情がない。ソレで内に和の精神を以て行はねばならぬと云ふのである。

子曰。君子和而不同。小人同而不和。(子路第十三)

子曰く。君子は和して同せず。小人は同して和せず。

道を學ぶに熱心な君子と云はるゝ様な人はどんな人に對しても、和の精神をもつて行くが、よく義か、不義かを考へてからでない、何人の説にも雷同はしない。道を學ぶの念なき小人は之れに反し、利のある所何人とも事を共にするも、心底では何人も和せず、親しまない。

孔子先生が如何に和と云ふことを重ぜられたるかは、以上の句でも能く分りますが、併し和して行く中にも、守る所、則ち介と云ふ節もなければならぬと云ふので、左の句があります。

子曰。郷原德之賊也。(陽貨第十七)

子曰く。郷原は德の賊なり。

郷原の中にありて、誰れからも「よく分つた人だ」と云はるゝ人を、郷原と云ふのであるが、かゝるは多くは流俗に媚び、人の氣に逆ふまいとのみして、云ふべきことを

よう云はない場合が多い。ソレで「徳の賊なり」と云つて排斥せられたのであります。

此の「和と介」に就ては、「孟子」にある左の一節が参考になりますから、茲に引用しておきます。

孟子曰く、伯夷は其君にあらざれば事へず其の友にあらざれば友とせず。悪人の朝に立たず、悪人との言はず、悪人の朝に立て悪人と云へば朝衣朝冠を以て塗炭に坐するが如し、悪を惡むの心思を推せば、郷人と立ち其冠正しからざれば望々然として之を去り、汚されんとするが如し、是の故に諸侯其の辭令を善くして至る有りと雖も受けざる也。受けざるものは、之れ亦た就くを屑よしとせざるのみ。

柳下惠、汗君を羞ず、小官を卑しとせず、進んで賢をかくさず、必らず其道を以てす。遺佚して怨みず、陋窮して憫へず、故に曰く、爾は爾を爲せ、我は我を爲さん。

我側はらに袒裼裸裎すと雖も爾焉ぞ能く我を浼さんや。

とあるが、之れはカウ云ふ意味であります。

伯夷と云ふ人は、君とするに足ると思ふ程の人でなくば事へず、友とするに足ると思ふ程の人とでなくば交らず、悪人とは列坐せず、悪人とは言葉をかはすことすらせぬ人でありました。萬一、悪人と與に坐し、悪人と言葉をかはすことあれば、例へば朝衣朝冠をつけて、土や炭の上に坐する時の如き感じをしたものでありました。又悪事を惡むその心を推るに、たとへば郷人と立ち並びし場合、その冠の正しからざるを見ては、望々然して立ち去り、我身の穢されんとする様に思ひました。是の故に、諸侯方より辭令を善くして迎へに來られても受けない。受けないのは官祿につくことを好まぬからであります。

之れに反し、柳下惠と云ふ人は、場合によりてはどんな人でも君として事へ、小官で

も構ひませんでした。これは進んで世用を爲さんとの心があるからであります。けれども遺佚されて厄窮むことがあつても、怨みもせねば憫もせず、爾は爾、我は我だと平然たるものであります。自分の側で、袒裼、裸裎で居るものがあつても平氣であります。右様の心故、由々然俗人と打ち混じてあることから少しも影響されませんでした。苟にも止めるものがあれば止る、之れを止めて止るのは、是れ又その場を屑よく立ちさらぬがその性質だからであります。

次に直に就て談りませう。

直而無禮則絞。(泰伯第八)

直にして禮なければ則ち絞す。

正直と云ふことも、美德の一つに相違ないが之れにも程がある。餘りに正直過ぎると、

人の非を責むること酷で、寛大の徳を失ふに至る。

正直にも程がある。正直過ぎるのはいけない。

葉公語孔子曰。吾黨有直躬者。其父攘羊。而子證之。孔子曰。吾黨之直者。異於是。父爲子隱。子爲父隱。直在其中矣。(子路第十三)

葉公孔子に語つて曰く。吾黨に躬を直くする者あり。其の父羊を攘みて子之れを證す。孔子曰く。吾黨の直き者は是に異なり。父は子の爲めに隠くし、子は父の爲めに隠くす。直きこと其の中に在り。

楚國の大夫で、潛して葉公と稱する者が、或日、孔子先生に向つて、「私の方に、至極、正直な者があつて、其の者は、其の父が他所から迷つて來た羊を、自分の納屋へかくしたことを、羊を亡うた人が尋ねて來た時に私の父がコ、にかくしてありますと云つて出した程であります」とのお話をしました。スルト先生は「私の方では、ソ

ナのは正直と云はない。父に過あれば、子としては隠くすのが人情。子に過あれば、父としては隠くすのが人情。其の人情の中にこそ、ホントの正直がある」と答へられました。

「人情の中に正直あり」との語。能く味ふべきであります。

哀公問曰。何爲則民服。孔子對曰。舉直錯諸枉。則民服。舉枉錯諸直。則民不服。(爲政第二)

哀公問うて曰く。何を爲さば則ち民服せん。孔子對へて曰く。直きを舉げて諸を枉れるに錯ば、則ち民服す。枉れるを舉げて、諸を直きに錯けば、則ち民服せず。魯の哀公が孔子先生に、「どうしたら、人民がよく上に敬服しませうか」と。お尋ねになつた。先生それに答へて、「正直者を舉げ用ゐて、之れを枉れる者の上に置くこととせば、人民が敬服しませう。枉れるを舉げ用ひて之れを正直者の上に置く様であれば

人民が敬服しません」と云はれたとの意。

正直者を舉用することに意を致し、不正直者は不問にしておいてよろしい。

或曰。以德報怨。何如。子曰。何以報德。以直報怨。以德報德。(憲問第十四)

或ひと曰く。徳を以て怨に報いば何如。子曰く。何を以てか徳に報いん。直を以て怨に報い、徳を以て徳に報いん。

怨みに報ゆるに徳を以てする程にせなくても、怨みある者に對しても公平無私(直)の態度であり得たら、ソレでよろしい。以上で、正直と云ふことに對する孔子先生の見方は略ぼ明白になつたと存じます。

仁齋先生の「論孟字義」の中に

和直の二字意義明白解し難き者なし。然れども論語の一部言此の二字に及ぶ者其の

幾と云ふことを知らず。殆んど敬の字と相稱ふ。然るに人敬を主とすることを知つて、此の二字の最も聖門緊要の語たることを知らず。蓋し和すれば暴勵ならず。直なれば邪曲ならず。和なる者は自から寛に。直なる者は自から正し。和する者は圭角の露るゝなく。直なる者は智計の巧みなし。徳に入るの體、心を立るの要、學者必らず心を注げ、愛用せずんば、可ならず。後世の儒者此の二字を以て、容易に看過し、深く意を留めず。故に今表して之を出す。蓋し聖人人に示す切要の語なりとある。

五一天 命

子曰。莫我知也。子貢曰。何爲其莫知子也。子曰。不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎。(憲問第十四)

子曰く。我を知ること莫きかな。子貢曰く。何爲れぞ其れ子を知ること莫からんや。子曰く。天を怨みず。人を尤めず。下學して上達す。我を知る者は其れ天か。孔子先生、或日、「隨分奔走もしたが、とうとう我を知り、我を用ひて、政を執らしむるの君を、發見することが出来なんだ」と嘆息されしに、おそばにありし子貢は、「どうして我を知るものなしなどと云はれますか。先生の聖人たることは、我々門弟をはじめとし、知れるもの少なからずではありませんか」と言つて、慰められました。子貢には先生が失望してござる様に見えたので、かく云はれたのでせう。ソレで先生

は、「私」は用ひてくれる人がなかつたと云つて、失望はして居らぬ。私は別に天を怨みず、人を尤めもしない。私は下い所から學んで、段々高尚な眞理を體得して行くことを心の樂しみとして居ります。人は兎に角、天は此の事を知つてくれるであらうぞ」と云つて、子貢に誤解なき様、注意を與へられました。
孔子の安心立命の「人を相手にせず天を相手にする」所にあつたことは、此の句で能く分ります。
斯く天を畏れし孔子先生のことですから、

迅雷風烈必變 (郷黨第十)

迅雷風烈には必らず變ず。

で、雷鳴のはげしい折りや、烈しい嵐の折りには必らず常容を變じ、天の怒りに對して敬を致されました。

されば

孔子曰。君子有三畏。畏天命。畏大人。畏聖人之言。小人不知天命而不畏也。狎大人。侮聖人之言。(季氏第十六)

孔子曰く。君子に三畏あり。天命を畏れ。大人を畏れ。聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして、畏れざるなり。大人に狎れ。聖人の言を侮る。
との言がある。

○

君子には、己れを修むるの誠あり。ソレで自然天命あるを知りて、畏れ敬ひ。世に大人あるを知りて、畏れ敬ひ、往昔の聖人の言を深く味うて、之れをも畏れ敬ふ。此の恐懼戒心が君子の徳を日に長ぜしむるのであります。小人には、己を修むるの誠がないから、天命あるを知らずして、畏れず。世に大人あるを知らないから、大人たる人

をも狎れ近づいて馬鹿にする。又往昔の聖人の言も、曾て味はないから、之れを尊敬する所以を知らない。ソレで小人には向上と云ふことがないのであります。

三四八

○ 中江藤樹先生、深く善悪の應報を信じ、天命を畏れ、常に「余深く善悪の應報を信ず。故に手の舞ひ、足の踏むところ、畏敬せざるなし。諸子小事と雖も、決して輕々に處理すること勿れ」と云つて居られたと云ひます。

○ 空の荷車は引けない。ソレで荷物のない時には少々石でも載せて引張つて行く様に、人も頭の押へ手がなくなると、始末にをへぬものとなる。畏れ敬ふ者のない人は、人らしい人にはなれません。なほ

子曰。不知命。無以爲君子也。(堯曰第二十)

子曰く。命を知らざれば、以て君子たることなきなり。との言もある。

○ 天命を知りて、之れを信じ、之れに安んじて居るものでないと、君子とは云へない。

○ これが「論語」の最後の句である。「論語」は學の字で始まり、天命の二字で終る。

○ 「人事を盡して天命をまつ」の一句に、論語の趣旨つきてるとも云へる。

五二 思 無 邪

子曰。詩三百。一言以蔽之。曰思無邪。(爲政第二)

子曰く。詩三百。一言以て之を蔽へば、曰く思邪なし。

詩經は三百十一篇の詩より成る。开を略して詩三百と云つたものである。此の詩三百篇の趣旨を一言以て之れを斷せば、つまり思無邪(邪曲の念をなからしむる)の三字に歸する。則ち腹に邪がなくてマコトがあればよいのであるとの意。

伊藤仁齋先生、此の句を評して

思無邪の三字、豈たゞに詩三百を蔽ふのみならんや。夫子の道をも蔽ひ盡すと云つてあります。

五三 孔子の精神的自傳

子曰。吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲不踰矩。(爲政第二)

子曰く。吾れ十有五にして學に志し。三十にして立ち。四十にして惑はず。五十にして天命を知り。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に從へども、矩を踰えず。

此の句は、孔子先生自から、御自分の精神發達の順序を云はれたものである。私が先王の道を學ばんと志したのは、十五歳の時で、三十歳になつた時に、道の上に立つことを得たとの自覺が出來た。併し尙ほ事に當つて惑ふことなきにしもあらずでしたが、四十歳からはモウ惑はなくなつた。而して五十になるまでに天命を知り。六十に

なつた時には、何んと云はれても、人の言葉が耳に逆はぬ様になり。七十を越してからは、心の欲するまゝに行動しても、脱線することがなくなつたとの意。

これは孔子先生の、精神發達の順序を誌したものであるが、併し聖人にありてのみカウだと云ふのでなく、誰でも大體カウあり得るのです。修養につとむれば。

孔子聖人にありてすら、七十になつて「心の欲する所に從へども、矩を踰えず」に達し得たのであるから、私共凡人にありては、ソコまで行くのは容易でない。されば常に恐懼戒心、修養につとめて居らぬと、何時、どんな過ちをするか知れない。修養の一生、必要なる所以コ、にあり。

五四 吾言に於て悦ばざる所なし

顔回のことには就ては「孔門の人々」の中に、一言しておいたが、なほ左の二句がある。

子曰。吾與回言終日。不違如愚。退而省其私。亦足以發。回也不愚。

(爲政第二)

子曰く。吾れ回と云ふ終日。違はざること愚の如し。退て其の私を省れば、亦以て發するに足れり。回や愚ならず。

「顔回と終日話をして居ても、たゞハイ／＼と聞いているだけで、質問一つするではなし、全く愚人かと思はるゝ程である。併し私の前を退いてからの様子を見て居ると感心させらるゝ點が多い。今まで言つたことを、皆なく／＼自分のものにして、私の道を發揮して居る。顔回は愚人ぢやない。どうして、どうして」と。先生が驚いて云はれ

たとの意。

子曰。回也。非助我者也。於吾言無所不說。 (先進第十一)

子曰く。回や我を助くる者に非ず。吾が言に於て説ばざる所なし。

顔回は、孔子の説を聞くや、直ちに了解信受して、反問、再問するが如きことは、曾て二度もなかつた。それで本文の如く云はれたのであります。先生の説明の仕方は、弟子の質問によりて上手になるのです。此の意味に於ては、顔回は孔子を助くるものでなかつた。併し何んでも直ぐ分つたとは、偉いものではありませんか。此の言、實は深く喜ばれての言でありませう。

ホントの弟子は、先生に對し、斯くあるべきでありませう。

五五 人物を見別ける方法

子曰。視其所以。觀其所由。察其所安。人焉廋哉。人焉廋哉。 (爲政第二)

子曰く。其の以す所を視、其の由る所を觀。其の安んずる所を察すれば、人焉ぞ廋さんや。人焉ぞ廋さんや。

之れは人物を見別ける方法を説いたものである。人を見別けるには、先づ第一に其人のして居ることの善惡を視ねばならぬ。而して現在して居ることがよければ、先づいとす。次にして居ることがいゝが、ソレをどんなつもりでして居るかを觀る。其のつもりもよければ第二段の試験にも及第したとする。併し、して居ることも、つもりもよくても、ソレ丈けでは、永持するかどうかわからぬ。ソコで今一回、一體樂しんでして居るかどうかを察してみる。若し、して居ることも、つもりもよくて、而も

ソレを樂しんでゐるとせば、其人のホントの人物であることは、千に一つも間違はな
いとの意。

視——觀——察。何れも見ると云ふ意味の字であるが、視より觀は、詳かに見るを意
味し、察は又觀よりも詳かに見ることを意味してをります。

五六 歴史を忘るゝな

子曰。溫故而知新。可以爲師矣。（爲政第二）

子曰く。故きを温ねて新しきを知る。以て師と爲すべし。

今後どんなことが、起つて来るにしても、過去に必らずソレと似たことのあるもので
す。所謂歴史は繰返すとは、ソコを云つたものです。ソレで歴史を知つてゐるものでな
いと、新しき出来事を適當に判斷して行くことが出来ない。歴史に造詣深く、新しき
出来事を適當に判斷して行くことの出来る人でないと、人の師（學校の先生。社會教
育家。政治家）となつて、人を指導して行くことが出来ないとの意。

歴史々と能く云ふが、人間位、歴史を忘るゝものがない。四五年も好景氣が續くと、
好景氣が何百年も續く様な氣になつたりする。指導者までもが………ソレで孔子は

「故を温ねて新しきを知る」と、力説されたものであります。

五七 聖人、證なきの言を爲さず

子曰。夏禮。吾能言之。杞不足徵也。殷禮。吾能言之。宋不足徵也。文獻不足故也。足則吾能徵之矣。（八佾第三）

子曰く。夏の禮は吾能く之を言ふも、杞徵するに足らざる也。殷の禮は吾能く之を言ふも、宋徵するに足らざる也。文獻足らざるが故也。足らば則ち吾能く之を徵せん。

孔子先生は、周の時代の禮儀のことのみならず。其れ以前の夏の時代、殷の時代の禮儀に就ても、能く調べられて、御自分には分つて居り、又詳しく談ることも出来たのであるが、なほ念の爲めに、夏の後である杞の國や、殷の後である宋の國へ行つて調べて見たが、其の二國に之れと云ふ程の記録（文）なく、又傳説に詳しい古老も存して

居ない。それで説明が出来ても、ソレには之れ／＼の證據があると、證據を示すことが出来ぬ。則ち之れを徴することが出来ぬ。で殘念ではあるが、證據のないことを云ふワケにゆかぬと云はれたとの意。

「夏、殷、二國の禮、我れ之れを傳へざれば、亡んでしまふワケである。併し文献が足らぬから仕方ない」と、深くなげかれての語であります。

斯く聖人は、證なきの言を、云ひ玉はぬ程であるから、勿論、人の惡口などは、ナカナカ口にされない。左の句を見よ。

子曰。吾之於人也。誰毀誰譽。如有所譽者。其有所試矣。斯民也。三代所以直道而行也。（衛靈公第十五）

子曰く。吾の人に於けるや。誰をか毀り。誰をか譽めん。若し譽むる所あらば、其れ試むる所あり。斯の民や三代の直道にして行ふ所以なり。

私には愛憎の念がないから、誰を毀らうの、誰を譽めようのと、思うたことはない。偶人を譽むることあらば、譽むるに足る丈けの實あることを確かめねば譽めぬのであるから、毀るに足る丈けの實あることを確かめずして、どうして人を毀らうぞ。今日の人々は（斯の民）、夏、殷、周三代の時に、直き道を踏み行つた人々と、異りはないのである。たゞ異なるは、今日上に立てる人々で、彼等は三代の上に立ちし人と違つて居る。猥りに今日の人々を毀譽してなるものか。との意。

五八 性情の正を養ふべし

哀而不傷。(八佾第三)

哀んで傷らず。

どんなに悲しいことがあつても、身を損ねる程に悲しむべきでないとの意。

子曰。小子何莫學夫詩。詩可以興。可以觀。可以羣。可以怨。邇之事父。遠之事君。多識於鳥獸草木之名。(陽貨第十七)

子曰く。小子何ぞ夫の詩を學ぶ莫き。詩は以て興すべく。以て觀るべく。以て羣すべく。以て怨むべし。之を邇くしては父に事へ。之を遠くしては君に事ふ。多く鳥獸草木の名を識る。

「お前達(門人に對して云ふ)は、何んで詩經を勉強しないのぢや。詩經には第一に善心を鼓舞作興せしむるの力がある。次には詩經によりて、世態人情を知ることが出来る。次には社交に就て學ぶことが出来る。次には人を怨むことがあつても、怒つて無分別なことをせなくなる。概括して云へば、近くは父に事へ、遠くは君に事ふるの道を知ることが出来る。其の上に詩經を讀むことによりて今の言葉で云へば、博物學をも學ぶことが出来る」と云つて、孔子先生は、門人達に詩經の研究をス、メられました。

「哀しんで傷らず」と云ひ、「人を怨むことありても怒りて無分別なことを爲すに至るな」と云ふ、サウありたいものです。

性情の正しいもの程、自然に斯くあり得る。私共は此の性情の正を養ふと云ふことを、心掛けの一とせなくてはなりません。

五九 仁遠からんや

子曰。我未見好仁者。惡不仁者。好仁者無以尙之。惡不仁者其爲仁矣。不使不仁者加乎其身。有能一日用其力於仁矣乎。我未見力不足者。蓋有之矣。我未之見也。（里仁第四）

子曰く。我未だ仁を好む者、不仁を惡む者を見ず。仁を好む者は以て之に尙ふるなし。不仁を惡む者は其れ仁を爲す。不仁者をして其の身に加へしめず。能く一日其の力を仁に用ふるあらんか。我未だ力足らざる者を見ず。蓋し之れあらん。我未だ之を見ず。

私（孔子）はまだ、ホントに善事を（仁は善の總稱）爲すを好む者、強く不善を惡む者を見たことがない。ホントに善事を爲すを好む者は、最上の人物と云ふべく、此の

上に附け加へをすべきものがない。強く不善を惡むものは、ホントに善事を好むものには及ばぬが、併し其の強く不善を惡む御蔭で、善を爲すことも出来。惡者に誘惑さるゝ等々の影響も受けない。若したつた一日にても、心持を善事を行ふ方へ向けて見玉へ。誰でも善事は出来る。眞に善事を志して見たが力が足りなんだ、出来なかつたと云ふものがドコにある。あるかも知れぬが、私はまだ見たことがないとの意。

子曰。仁遠乎。我欲仁。斯仁至矣。（述而第七）

子曰く。仁遠からんや。我仁を欲すれば、斯に仁至る。

仁と云ふと、大變遠い所にあつて、容易に求むべからざる様に思つて居るものがあるが、實は仁はさう遠くにあるものでなく、求め難いものでもない。求むる心さへあると、直ぐやつて来てくれるとの意。

○

善い事は、しようと思ひさへすれば、誰にでも出来る。

六〇 仁者ご不仁者

子曰。不仁者不可_レ以_レ久_レ處_レ約。不可_レ長_レ處_レ樂。仁者安_レ仁。知者利_レ仁。

(里仁第四)

子曰く。不仁者は以て久しく約に處るべからず。以て長く樂に處るべからず。仁者は仁に安んじ。知者は仁を利す。
不徳な人間は、久しく困窮な境地に置くと、所謂窮して亂する。又長く富貴な境地に置くと、淫樂にふけつたりするに至る。則ち不徳者は順境にも逆境にも善處することが出来ないのである。併し仁徳ある人となると仁と一になるから、順境にも逆境にも善處する。知者は仁者程には行かないが、病人の藥をたよりにする様に、仁をたよりにするから、之れも兎に角、順逆二境に善處するとの意。

子曰。惟仁者能好人。能恶人。(里仁第四)

子曰く。惟だ仁者は能く人を好し。能く人を悪む。

何人をも愛し、どんな人に對しても親切心ある人格者でない、好悪共に當を得ない。ソレでたゞ仁者のみ、人を好むことも悪むことも出来ると云はれたのである。仁徳ある者は、何をしても當を得るも、不仁者の爲す所、何にもかも當を得ないものであります。

六一 朝に道を聞かば

子曰。朝聞道夕死可矣。(里仁第四)

子曰く。朝に道を聞て夕に死すとも可なり。

「私は老人ですから」とか、「今病氣ですから」などと云つて、道を學ぶを怠る者への言であらう。さて人一度びでも聖人の道を聞くことを得ば、聞いて間もなく死んでも構はないではないか。道を學ばずしての一生は、虚生である。ソナ百年の生涯は、道を學び、道を得ての一日の生活にも劣るとの意であります。

吉田松陰先生、獄に下りし時、

昔者、漢の夏侯勝、黄覇兩人獄に下る。夏侯勝は儒者なれば、黄覇、夏侯勝に學問を授かり度き由を云ふ。勝云く、遠からず死罪に遇ふべき身の、學問は入らぬ者な

りと。霸云く、「朝に道を聞きて夕に死すとも可なり」と云ふこともあれば、是非に授かりたしと、勝も其の辭に感じて、遂に授けしに云々。
と云つて、共に下獄せしものと、相共に講學に餘念がなかつたと云ふ逸話があります。

六一 約を以て之を失ふ者は鮮し

子曰。以約失之者鮮矣。(里仁第四)

子曰く。約を以て之を失ふ者は鮮し。

萬事控目にしてをれば、先づ失策することがない。あつても少ないとの意。

熊澤蕃山先生は、此の句に就き

天理に従ひ習つて、人倫を明らかにする時は、人欲日々に損亡す。能く道を學ぶ者には大事化して小事となり。小事は無事となり。多は日々に約に歸し。奢は日々に儉に歸す。是れ皆、日々に損するの義なり。

と云はれてある。

商人も手を出し過ぎて失敗し。學者も氣が多くては成功せぬ。一人一業、専心一意の

人にして、失敗した例は、滅多にあるものではない。

六三 婿選びの標準

子謂_レ公冶長_ニ可_レ妻_也。雖_レ在_レ縲綯_{之中}、非_レ其_ニ罪_也。以_レ其_ニ子_{妻_レ之}。

(公冶長第五)

子。公冶長を謂ふ。妻はすべきなり。縲綯の中にありと雖も。其の罪にあらざるなり。其の子を以て之に妻はす。

「あれになら、娘をやつてもいいなあ。あれはかつて繩目にかゝつたことはあるが、冤罪であつたのだから構はぬ」と云はれ、自分の娘の婿となされた。

南容三復_レ白圭_也。孔子以_レ其_ニ兄_{之子}妻_之。(先進第十一)

南容三たび白圭を復す。孔子其の兄の子を以て之に妻はす。

南容と云ふお弟子は、詩經の中の白圭の詩を、日に三たび誦せられた程に、言葉を慎

しまれし人でありました。

白圭の詩は「白い尊い玉のキズはつくことがあつても、玉工をして、之れを磨かしめば、其のキズを無くすることが出来る。併し一たび口から外へ出た言葉のキズばかりは何んとも仕様がなない」と云ふ意味の詩であります。

ソレ程、言葉を慎しむ人ならば、信用するに足るとて、孔子は其の兄の娘の婿とされました。

以上の二句で、孔子先生、「婿選びの標準」が分ります。

六四言 と 行

宰予晝寢。子曰。朽木不可雕也。糞土之牆不可朽也。於予何誅。子曰。始吾於人也。聽其言而信其行。今吾於人也。聽其言而觀其行。於予與改是。 (公治長第五)

宰予晝寢たり。子曰く。朽たる木は雕るべからず。糞土の牆は朽るべからず。予に於てか何ぞ誅めん。子曰く。始め吾、人に於けるや。其の言を聽きて其の行を信ぜり。今吾、人に於けるや。其の言を聽きて其の行を觀る。予に於てか是を改む。

お弟子の宰予が、或日晝寢をして居る所を、先生に見付けられました。其の時に先生は「どんな彫刻の名人でも、朽木に彫刻は出来ない。どんな左官さんでも、埃屑の塀に上塗は出来ない。晝寢する様な奴は、責めても仕様がなない。小言を云つても役には立

つまり」と云つて嘆息されました。

何ぞ誅めんと云ふ所に、反て深く責むるの意があります。

○ 他日又先生は「始め私は、人の言を聴くと、其人は其の言の如く行ふものと信じたのであつたが、今では、其の言を聴いても、其の行まで見れば、人を信じられなくなつた。斯く改めたのは、宰予の御蔭である」と云はれました。

○ 宰予は、子貢に次ぎての雄辯家でしたが、兎角言行の一致せぬ場合が多かつたので、晝寝の折りの外にも、又幾度もカウした小言を頂戴したものでありませう。

子曰君子不以言舉人。不以人廢言。(衛靈公第十五)

子曰く。君子は言を以て人を舉げず。人を以て言を廢せず。

言ふことはいゝからとて、直ぐに其人を用ひることは出来ない。言行一致しない人が多いからであります。又人が悪いからとて、何を云うても、相手にしないのはよくない。悪人の善言あることも、あるからであります。

子謂子産有君子之道四焉。其行己也恭。其事上也敬。其養民也惠。其使民也義。

(公治長第五)

子、子産を謂ふ。君子の道四あり。其の己を行ふや恭。其の上に事ふるや敬。其の民を養ふや惠。其の民を使ふや義。

孔子先生、或時、鄭の大夫子産を評して「あの人には、君子の行ひに叶うてる點が四つある。第一は、我身を持するに、慎しみ深い事。第二は、能く其の君主を尊ばれし事。第三は、大に民の爲めに利を計られし事。第四は、民を猥りに使はざりし事。此の四つは、君子の道に叶うて居る」と。云はれました。斯く數へて云はれたのは、外に尙ほ至らざる所あるからであります。併し子産丈け

の人でも容易にはありません。

孟子は、子産が一日、輿に乗りて外へ出かけし折り、川を跣足になつて渡つて居るものあるを見て、氣の毒がり、自分は輿から降りて其の輿で、人を渡らせましたことを評して、「惠にして政を爲すを知らず」と云はれてある。成程サウです。政治家たる者は、國中の川々に橋をかけることを怠らねばいゝのであつて、自からの輿で人を渡すには及ばない。孔子の言は茲に及んで居らぬが、コレ／＼はよいと教へてある所を見ると、勿論不滿な點もあるであらう。

諸葛孔明の言にも

世を治むるには大徳を以てし。小惠を以てせず。とある。

六六 人才得難し

子游爲武城宰。子曰。女得人焉爾乎。曰。有。澹臺滅明者。行不由徑。非公事。未嘗至於偃之室也。(雍也第六)

子游武城の宰となる。子曰く。女人を得たるか。曰く。澹臺滅明なる者あり。行くに徑に由らず。公事に非れば、未だ嘗て偃が室に至らざるなり。

子游と云ふお弟子が、武城と云ふ魯の一邑の役人の頭となつた時に、孔子先生は第一に「人才を得たか」ときかれました。之れは「政を爲すには人才を得るを先と爲す」からであります。

スルト子游は「澹臺滅明と云ふ人物を得ました。彼は決して徑を通行せず。公事がなければ、決して私の家へ來ない程に、正大な人物です」と云つて、自慢しました。

此の時、孔子先生「サウかく」と云つて、よろこばれたに相違ありません。

古人が人をとるに、「先づ其の心事を見て、手腕を云はざる」の點、學ぶべきであります。

舜有臣五人而天下治。武王曰。予有亂臣十人。孔子曰。才難。不其然乎。唐虞之際。於斯爲盛。有婦人焉。九人而已。三分天下有其二。以服事殷。周之德。其可謂至德也已矣。(泰伯第八)

舜臣五人ありて天下治る。武王曰く。予に亂臣十人あり。孔子曰く。才難しと。其れ然からずや。唐虞の際に斯れより盛なりと爲すも婦人あり。九人のみ。天下を三分して其二を有ち、以て殷に服事す。周の徳其れ至徳と謂ふ可きのみ。

「舜に賢臣五人ありて、天下が治つた」とあり。又「武王曰く、予に亂を治むるの良臣十人あり」とある。カウした事實を先づ擧げて置いて、孔子先生は云はれました。

「古語に人才を得ることは六づかしいとあるが、ホントだなあ。堯(唐)舜(虞)の時代以後では、周の時代に、一番人才が居たのであるが、ソレで居て、たつた十人ぢや。其の十人の中の一人は婦人ぢやつたから、九人であつたとも云へる」と。コ、の所では、五人と十人の數に拘泥して讀むと、讀み間違をすることになる。周にはソレ程に人才があつたから、次第に有力となりて、遂に天下の三分の二を有つに至つた。ソレでも文王はおとなしく、般に服事して居た。實に至徳と云ふべきであるとの意。

此の徳ありし故に、周室は續いたのであります。

仲弓爲季氏宰。問政。子曰。先有司。赦小過。舉賢才。曰。焉知賢才而舉之。曰。舉爾所知。爾所不知。人其舍諸。(子路第十三)

仲弓季氏の宰となり。政を問ふ。子曰く。有司を先にし、小過を赦し。賢才を舉

げよ。曰く。焉んぞ賢才を知りて之を擧げん。曰く。爾の知る所を擧げよ。爾の知らざる所人ソレ諸を舍かんや。

お弟子の仲弓が、魯の大夫季氏の家臣の長となつた時に、政治の仕方に就て尋ねられたので、先生は「ソレ々の係りに適當な人を選ぶことが先務である。小さな過ちは赦して彼是れ云はぬこととせよ。何處ぞに人物はないかと、人物を求むるに熱心であれ」と云はれました。仲弓之を聞きて、「併し先生。如何にして人物(賢才)を見出すことが出来ませう。擧げ用ひたくても、人物を見出すことが六づかしい」と嘆息されたので、先生は「先づ君の知つてる人物(賢才)を擧用しなさい。サウしたら君の賢才を好むと云ふ評判が立ち、其の評判さへ立たば、彼所からも、是所からも、人が賢才を知らして來てくれますよ」と。お教へになりました。

求めよ然らば與へられんで、眞に賢才を求むる精神あらば、賢才を見出すことも出来、人が知らしてもくれる。併し口では賢才を求むと稱して居ても、眞に求むる心なきも

のには見出せもせず。又人が知らしてくれません。
人才得難きも、眞に求むる心あらば、必らずしも得難くはありません。

六七 僥倖

子曰。人之生也直。罔之生幸而免。(雍也第六)

子曰く。人の生くるや直ければなり。之を罔ひて生くるは幸にして免るゝなり。
正直にして生きて居るのが、ホントに生きて居るのである。正直を無視して生きて居るのは、ソレは生きてるのでなくて、やがて捕へらるべき筈の罪人が、僥倖で、しばらく、捕へられずに居ると同じで、免がれて居るのであるとの意。

○ 二宮尊徳先生此の句を解して、

稗草の中には、稲に似て居る所から、耘る者の眼をのがれて實るものがある。其の實の中には又人の眼をのがれて俵に入るものがある。ソレが又春く時にも篩ひ去ら

れずに残りて、飯に入ることがある。併し口に入る時には吐き出される。丁度其の様に、悪人は遂にはやられる。若し幸に一生のがれられても、其の災必ず子孫に及ぶ。

と云はれてある。

六八 博文約禮

子曰。君子博學於文。約之以禮。亦可以弗畔矣。(雍也第六)

子曰く。君子博く文を學び、之を約するに禮を以てせば。亦以て畔かざるべし。

△文 先聖先賢の遺文 △之 我

博く先聖先賢の遺文を讀みて、其の見識を大にすると共に、我身をシメク、ルに禮(人の行の規矩)を以てすれば、先づ道に畔く様なことはなからう。

いくら博く文を學びても、其の身の持ち方がだらしない様なことでは、ホントに道を踏み行ふ人にはなれない。

同じ文を讀み、同じ道理を聞いても、身の持方の正、不正によりて、了解の仕様が違ひます。

六九 求めぬ者に與へ様なし

子曰。不憤不啓。不悱不發。舉一隅不以三隅反。則不復也。(述而第七)

子曰く。憤せざれば啓せず。悱せざれば發せず。一隅を擧げて、三隅を以て反せざれば、則ち復せざるなり。

△不憤とは、心、通を求めて得ざるを云ふ。

△不悱とは、口云はんと欲して云ふ能はざるを云ふ。

先づ自から其の義を考へ、苦しみに苦しんだものは、ソレはカウだと一言云うて貰ふと、ハツト分るが、サウでないものは、教へられても分らぬ。口云はんと欲して云ふ能はず。どう云へばいゝかと、散々苦しんだものならば、一寸教へられても、成程とうれしがるが、サウでないものは、教へてもキ、メが少ない。例へば一隅の話をした

ら、他の三隅(四角な机の)のことが、云はずして分る程に、前以て自から研究し、工夫し、考へてあるものでなくば、教へても無駄だから、自習の足らぬものは、復び教へぬとまで云はれてあるのです。

子曰。不曰如之何。如之何者。吾末如之何已矣。(衛靈公第十五)

子曰く。之を如何せん。之を如何せんといはざる者は、吾も之を如何ともすることなきのみ。

自分で考へると云ふことは、教を受くる下地である。散々考へぬいて分らぬ者は、先生から一言云はると、ハツト分るが、さつぱり考へたことがないものは、如何に教へられても、耳を受け入れることが出来ません。

全くサウで、求めぬ者に、與へ様がありません。

七〇 子四を以て教ゆ

子以四教。文行忠信。(述而第七)

子四を以て教ゆ。文。行。忠。信。

孔子の弟子を教ゆるや。文を以て教へらるゝと共に、行を以て教へられた。文を以て教ゆとは、書物の講義をしたり、講話をしたりして、理解力に訴へて教ゆることを意味し。行を以て教ゆとは、禮儀作法を喧ましく云ひ、又既に了解したことは、必らず實行せしむる様にすることを意味する。

「文を以て教へ、行を以て教ゆ」と云ふ方は、教への仕方につて云つたもので、次の「忠を以て教へ、信を以て教ゆ」と云ふ方は、其の教ゆる道德の内容に就て、云つたものであります。忠とは忠實。信とは偽りを云はないこと、此の忠と信(マコト)を主

として、孔子は道德を教へられたのであります。

七一 最も非難さるゝ句

「論語」の中で最も非難さるゝは、左の二句であるが、此の二句のホントの意味が分ると、非難の聲は止むであらう。

子曰。民可使由之。不可使知之。（泰伯第八）

子曰く。民は之に由らしむ可し。之を知らしむべからず。

上に立ちて、政治をする人は、下、人民から信頼さるゝが第一と心得べきである。下人民に、其の爲さんとするを、一ち一ち「コレはカウ云ふワケ」と知らしめてから行ふなどと云ふことは不可能でもあり、無益でもあるとの意。

儒教を非難する人は、先づ此の句を引き、「儒教の道徳は專政時代の道徳である」と云ふ。併し今日でも實際の話が、政治の事は、政黨では幹部にしか分らず、甚しきは

内閣に於て二三大臣が相談し、伴食大臣には知らしめない場合さへあるではないか。一般人民としては參政權が與へられてるとは云ふものゝ、誰がホントに知らしてくるか。又何にもかも知らしてよいか。知らすことが可能であるか。考へて見るがよろし。

今日でも、誰が總理大臣になつた。「アノ人ならば」と信頼し。或は「アノ人では」と心配する。此の外に何にが一般に分つてゐるか。又分り得るか。

茲に一寸、附け加へて置きたきは、左の句である。

子夏曰。君子信而後勞其民。未信則以爲厲己也。信而後諫。未信則以爲謗己也。（子張第十九）

子夏曰く。君子は信ぜられて後に其の民を勞す。未だ信ぜられざれば則ち以て己を

やましむと爲す。信ぜられて後に諫む。未だ信ぜられざれば、則ち以て己を誘ふと爲す。

三九四

上に立つ人は、下人民から信ぜらるゝに至つてから、民を使ふべきである。未だ信ぜられざるに民に勞役を課すると、必らず自分等に難儀をさすと怨まるゝに至るものがあります。人を諫むるにも、其人から信ぜられて後に諫むべきである。未だ信ぜられて居らぬものが諫めると、諫めらるゝとは思はれないで、己の悪口を云ふと取らるゝものであります。信ぜらるゝが第一である。

子曰。唯女子與小人爲難養也。近之則不孫。遠之則怨。(陽貨第十七)

子曰く。唯女子と小人とは養ひ難しと爲す。之を近くれば則ち不孫。之を遠ざくれば則ち怨む。

侍女、下婢とか、奉公人などは取扱ひにくいもので、餘りに親しくすると、増長して来るし、疎外すると怨む様になる。ア、取扱ひにくいものだとの意。主人は下男下女其他出入の者に對しては、一方では嚴しい所は嚴しく。正しい所は正しくすると共に、他方に於ては、飽くまで慈悲深くあらねばなりません。

斯く分れば、此の二句も、儒教を非難する役には立たなくなつて仕舞ひます。

七二 詩と禮と樂

子曰。興於詩。立於禮。成於樂。 (泰伯第八)

子曰く。詩に興り。禮に立ち。樂に成る。

詩には、忠臣義士のことを歌うてある。ソレで先づ詩を教ゆれば、人をして感憤興起、道に入り易からしむ。之れ「詩に興り」とある所以。

永い間に、澤山の聖人賢人によりて定められてある禮は、人間の行爲の規矩である。之れによらざれば、人、世に立つこと能はず。之れ「禮に立ち」とある所以。

音樂は、人心を和げ、性情を養ふ、之れ「樂に成る」とある所以。今の教育に、詩と禮と樂と少なし。是れ今日の人物に雅致なき所以でありませう。

七三 盲人其他不具者に對しては

子見齊衰者。冕衣裳者。與瞽者。見之。雖少。必作。過之。必趨。 (子罕第九)

子齊衰の者と。冕衣裳の者と。瞽者とを見れば。之を見て少と雖も必ず作つ。之を過ぐれば趨る。

孔子先生は、喪服の人と、禮装の官人と、盲人とを見られし場合には、一は氣の毒と思ふ所から、他は尊敬する所から、ソレ等が自分より若いものであつても、坐して居る時には起ち、其の前を通る時には趨られたと云ふ。

師冕見。及階。子曰。階也。及席。子曰。席也。皆坐。子告之曰。某在。斯。某在。斯。師冕出。子張問曰。與師言之道與。子曰。然。固相師之道也。

(衛靈公第十五)

師冕見ゆ。階に及ぶ。子曰く、階なり。席に及ぶ。子曰く、席なり。皆坐す。子之れに告げて曰く、某は斯に在り。某は斯に在り。師冕出づ、子張問ひて曰く。師と言ふの道か。子曰く、然り固より師を相くるの道なり。

音樂師の、冕と云ふ盲人が、或日、所用ありて、孔子先生を訪問されました。先生は階段の所まで出迎へられて、盲人が階段の所まで來らるゝと、ソコは階段ですと教へられ、既にして座敷に通らるゝと、其の坐すべき所を示され、右は誰、左は誰と一ち坐上の人を紹介されました。しばらくして、盲人所用を果して歸つて仕舞はるゝと、お弟子の子張は、「先生、盲人に對しては、アノ様に叮嚀にあらねばならぬのでせうか」と問はれました。スルト先生、「サウぢや、盲人に對しては、あゝあらねばなりません」と教へられました。

盲人其他不具者を待遇する場合、私共は何時このくも此句を思ひ出すことにしたいものです。

七四 九十九までは誰でもする後の

一が問題である

子曰。譬如爲山。未成一簣。止吾止也。譬如平地。雖覆一簣。進吾往也。

(子罕第九)

子曰く。譬へば山を爲るが如し。未だ成らざる一簣にして止むも、吾が止むなり。譬へば地を平にするが如し。一簣を覆すと雖も、進むは吾が往なり。

譬へば、築山を拵へる場合に於ての如く、既に九分九厘まで出来上り、後一籠となつてからでも、倦みつかれて止めると、山は完成したとは云へない。前功悉く棄たる。所謂「九仞の功を一簣に虧ぐ」とは、之れである。百のものを九十九までは誰でもするが後の一が問題である。後の一つに力の入れやう如何で、大抵な事の成否が決めら

るゝのである。

二宮先生の左の逸話は、コ、の参考となるから、掲げておきます。

二宮尊徳先生が、野州の櫻町へ来て、开を荒廢のドン底から救はんと、懸命に努力しつゝありし際、江戸から一人の書生さんが訪ねて来て、

私は江戸で十数年學問をしたものですが江戸には本讀みはあつても眞の生きた學者はありません。私は失望して、どこかに生きた學者はないかと、さがして居ました所、或人が先生のことを知らせてくれました。ソレでわざわざ訪ねて来た次第です。よろしく願ひします。

と頼みました。其の時先生は

折角ですが、私は今、村の復興に多忙で書生さんを相手に議論なぞして居れません。

と早速に断りました。併し書生さんは

私は先生と議論しようと思つて来たものではありません。たゞ私はしばらく御そばに置いて下さらばよろしいのです。

と云つて動かぬので、先生も止むなく、しばらくの同居を許されました。

それから幾日か経つての後のことです。或時、急用ありて下男を使に出して後（其の頃先生の家族は小田原に居ました）、先生、朝飯を食へようとした所、澤庵があらせんでした。スルト書生さんが

先生私が出して來ます。

と云つて、物置へ行き、澤庵を出して、裏の小川で洗ひ、俎板の上で切つて、皿に入れてもつて參りました。先生は

有難う。どれ戴かうか。

と云ひながら、箸で一切をはさみて、取り上げしに、二三切つて參りました。先生はソレを振り廻はしながら

サア君、コ、だ。誰が澤庵を出しても、大體同じことをするのであるが、最後にもう一つ、念が入るか、入らぬかで、甘く一切、一切づつになつて居るか、カウした不都合なことになるかの、差が生ずるのであります。コ、の道理が能く呑み込めれば、コレ一つで人間になれる。

と云はれしに、其の書生さんは、言下に大悟されました。

而してやりかけたことを完成せずして止めた場合には、何んと理窟をつけても、ソレを他人の責任として仕舞ふ事は出来ない。どこまでもソレは自分の責任であります。其の代り、譬へば地の凸凹を平かにする場合の如く、凸地から削りて一簣の土を凹地へ持て来て覆しても、したれば、したことになる。ソレ位のこと、してもしたにはならぬと云ふこと勿れ。せねばならぬことは、少しにてもせよ。

やりかけたことを、變な理窟をつけて止めたり。せねばならぬことを、「うんとやれるのなら兎に角、少しばかりしたとて、何になる」などと理窟をつけて、着手を怠つ

てはなりませぬ。

七五 法語の言、異與の言

子曰。法語之言能無從乎。改之爲貴。異與之言能無說乎。釋之爲貴。說而不釋。從而不改。吾末如之何也已矣。(子罕第九)

子曰く。法語の言は、能く従ふこと無からんや。之を改むるを貴しと爲す。異與の言は能く説ふことなからんや。之を釋ぬるを貴しとす。説びて釋ねず。従つて改めず。吾れ之を如何ともするなきのみ。

△法語の言 正しき言葉、則ち格言の如きを云ふ。

△異與の言 諷諫の場合の如き、婉曲なる言を云ふ。

格言とも云ふべき言葉には、誰だつて逆ふことは出来ぬ。もつともと云はざるを得ぬ。併しもつともと云つた丈では何んにもならぬ。此の格言から反省して、自分の悪い

點を改めてこそ貴しと云ふべきであります。

○ 婉曲に云はれた場合、則ち諷諫された様な場合には、誰だつてよろこぶ。別に其の言葉の中に、我が意に逆ふものないからである。併したゞよろこんだ丈では、何んにもならぬ。其の言葉の中にドウ云ふ意味があるかを、釋ねなくてはならぬ。

○ よろこぶ丈で釋ねもせず。従ふ丈で、改めもせぬ様では、何んとも仕様がなない。正面から直言されても、側面から婉曲に云はれても、キ、メがない様では、全く以て仕様がありません。

七六 知 仁 勇

子曰。知者不惑。仁者不憂。勇者不懼。(子罕第九)

子曰く。知者は惑はず。仁者は憂へず。勇者は懼れず。

知者は事理に明かだから、惑ふと云ふことがない。ソレはナカ／＼六づかしいことではあるが、私共の目的は、ドンナことがあつても惑はぬ程に、事理に明かになることであらねばならぬ。

仁者は、天命に安んず。故に何事があつても憂へない。之れもナカ／＼六づかしいことではあるが、サウなり得る様、修行せねばならぬ。

勇者は能く斷ず。故に懼れなし。之れもナカ／＼六づかしいが、サウあらねばならぬのは元より云ふまでもない。

斯く、惑はず、憂へず、懼れざる人にしてはじめて知仁勇三徳兼備の人と云はるゝのである。又知仁勇を稱して天下の達徳とも云ひます。

子曰。君子道者三。我無能焉。仁者不憂。知者不惑。勇者不懼。子貢曰。夫子自道也。(憲問第十四)

子曰く。君子の道とする者三。我能くするなし。仁者は憂へず。知者は惑はず。勇者は懼れず。子貢曰く。夫子自から道ふなり。

孔子先生或時、「仁徳ある者は心に疚しき所なく、無理な願ひなく、且つ天命を知れるが故に、心に憂がない。明知の人には事に惑ふと云ふことがない。又眞の勇者は、懼るゝと云ふことを知らない。之れが君子の三徳であるが、私はドレもまだ能くするところが出来ぬ」と云はれました所。其の時、お傍にありし、お弟子の子貢は、「之れこそ先生の御謙遜のお言葉です。先生でなくて、誰か此の三徳を能くしませうぞ」と挨拶

されました。

他人からは聖人と見て居られし孔子先生も、御自分で自分を見る場合には、斯く「能くせざるものあり」と云つて、絶えず自分を鞭撻して居られたのであります。然るに吾々凡物はどうぢや。やゝともすれば、自己に満足するの風がある。此の點大に反省せねばなりません。

七七 孔子は情にあつき人であつた

顔淵死。子曰。噫。天喪予。天喪予。(先進第十一)

顔淵死す。子曰く。噫。天子を喪せり。天子を喪せり。

孔子は、我が道を傳ふるものは、顔回であると、頗る顔回到望を囑して居たので、回の死せし時、「あゝ、天子を喪せり。天子を喪せり」とまで云つて、悲しまれたのであります。

顔淵死。子哭之。慟。從者曰。子慟矣。曰。有。慟乎。非夫人之爲。慟而誰爲。(先進第十一)

顔淵死す。子之を哭して慟す。從者曰く。子慟せり。曰く。慟する有るか。夫の人の爲めに慟するに非ずして誰が爲にせん。

七七 孔子は情にあつき人であつた

顔淵の死せし時、孔子は泣き悲しみて、遂に氣を失はれました。門人達驚き助け起して、「先生、先生」と叫びますと、先生氣が付いて、「私は今、氣を失つて居たのか。彼の人の爲めにでなくば、恐らく私は氣を失ふ程には哭すまい」と云はれました。

伯牛有疾。子問之。自牖執其手曰。亡之命矣夫。斯人也。而有斯疾也。而斯人也。而有斯疾也。（雍也第六）

伯牛疾あり。子之を問ふ。牖より其の手を執りて曰く。之を亡はん、命なるかな。

斯人にして斯疾あるや。斯人にして斯疾あるや。

伯牛は德行に於て、顔淵、閔子騫に次ぐ程の人である。其の伯牛が疾もあらうに、癩病の如き悪病に罹り、而かも疾重くして再起おぼつかないので、嘆息してかく云はれたのであります。

○

以上の句を讀むと、孔子がドンナに情の人であつたかゞ分ります。

七八 迹を踐まらずんば亦室に入らず

子張問善人之道。子曰。不踐迹。亦不入於室。(先進第十一)

子張善人の道を問ふ。子曰く、迹を踐まざれば、亦室に入らず。

世に善人なるものあり。別に學んだとは聞かないが、其の行ふ所、自然に道に近く思はるゝ。ソコで子張「あれでよろしきか」と、問はれたのであります。

孔子先生は、此の問ひに對して、「善人の行ふ所、自然に道に叶へる點も、多々あれど、元々、古聖賢の道を學び、其の足跡をふまんと修行したのでないから、道の堂奥に入つてるとは云へない」と答へられました。

誰にしても、古聖賢の足跡をふみ、开を學ばねば、ホントに道を如實に體得することが出來ません。

○

聖フランシスなども、此の精神の人であつたらしい。フランシスは神學書を手にした事なく、高尚なる教理を知らない。しかし彼は只十字架につけられしイエスの足跡をそのまゝ行はんとした。基督のなされた通りそのまゝ、何でも實行しようとした。四日間斷食せられたと書いてあるとそのまゝ、四日間斷食し、イエスが癲病人を世話せられたと云ふとその通りこれをなされた。最後にはイエスの十字架そのものを自分も受けたいと思つてラ・ヴルナの山の奥に行つて四日間斷食して祈つて、基督の如く手と足に釘の跡が出來、胸には槍の跡が出來てそれより血が常に流れて居つたと云ふ。我國の宗教家の中では、葛城の慈雲尊者が最も此の精神に富んで居たらしい。此の頃大阪佛教奉仕會で發行した「慈雲尊者の話」(長谷寶秀僧正著)の中に、左の如き言がある。

「尊者の御思召では、凡そ戒律は佛説のまゝに行はねばならぬ。毫も私意を交へて

はならぬ、時節や場所の相應、不相應などを論じて妄りに佛教の戒律を改めてはならぬものである……………

「如來は三世達見の聖者である。如來の説かれた戒律は、千年萬年を経ても行はれない事はない。後に至りて行はれない様な戒律ならば、如來が御説きなされる筈はない。若し後世の凡夫共に改良して貫はねばならぬ様な戒律を説かれたとすれば、大智圓明三世達見の佛とは云はれない。

「尊者の正法律復興は日々の起居動作を悉く如來在世の通りにしたいと云ふ御思召であるが、如來在世の時には如來を初め菩薩聲聞皆梵語を用ゐて居られた。今日々の起居動作は律文に依て如來在世のまゝにしても、日々用ふる所の言葉は皆、日本語や漢語のみであると云ふは、何となく物足らぬ心地である。せめて經文だけは、なるべく梵本を用ゐて、身口意の三業共に如來在世の通りにしたいと云ふのが、尊者の梵學に勉められた、主なる原因であらうと想像致します。

此の頃の人には、斯かる精神が非常に乏しきのみならず、直ぐ愚意を標準にして所謂取捨選擇をする傾がある。之れ近代人の道に入る能はぬ所以であらう。

○ 自己の目標とすべき人を選び、既に選りし上からは、之れを崇拜し之れに惚れ込み、どこ〜までも其の人の眞似をし、其の人に成り切らねばならぬ。

○ 今の教育は、人に取捨選擇、比較、批評ばかり教へて、以上述べしが如き精神を與へる工夫をしないから、深みのある人間を育て上げることが出来ないものである。

七九 應病與藥

子路問。聞斯行諸。子曰。有父兄在。如之何。其聞斯行之。冉有問。聞斯行諸。子曰。聞斯行之。公西華曰。由也問。聞斯行諸。子曰。有父兄在。求也問。聞斯行諸。子曰。聞斯行之。赤也惑。敢問。子曰。求也退。故進之。由也兼人。故退之。(先進第十一)

子路問ふ。聞くがまゝに斯れ諸を行はんか。子曰く。父兄在るなり。之を何如ぞ。レ聞くがまゝに斯れ之を行はんや。冉有問ふ。聞くがまゝに斯れ諸を行はんか。子曰く。聞くがまゝに斯れ之を行へ。公西華曰く。由や問ふ。聞くがまゝに斯れ諸を行はんか。子曰く。父兄在るあり。求や問ふ。聞くがまゝに、斯れ諸を行はんか。子曰く。聞くがまゝに斯れ之を行へ。赤や惑ふ。敢て問ふ。子曰く。求や退く故に

之を進む。由や人を兼ね故に之を退く。

子路一日孔夫子に問ふ。「聞いて成程と合點し、よろしいと思ふことは、直ぐ様、實行してもよろしきや」と。先生は之れに對して「父兄も在ることなれば、一應、父兄に相談して見るがよろしい」と、云はれました。他日、冉有が同じことを問うた所、先生は今度は、「早速實行するがよろしい。躊躇が禁物ぢや」と云はれました。同一の問ひに對し、斯く答へが違はれたので、公西華は判斷に苦しみ、ドウ云ふワケかと問はれました。ソコで先生、「子路は他人の分まで仕かねまじき男だから、之れを抑へ。冉有の方は少々引込思案だから進めたのである」と説明されたとの意。孔子の教育の仕方の、應病與藥的であつたことは、一番能く此の句に見えて居ります。

八〇 請ふ斯の語を事とせん

顔淵曰。回雖不敏。請事斯語矣。(顔淵第十二)

顔淵曰く。回、不敏と雖も請ふ斯の語を事とせん。

私、及ばぬものではありませんが、先生のお言葉通りに致します。其の實行に懸命に努力します。

仲弓曰。雍雖不敏。請事斯語矣。(顔淵第十二)

仲弓曰く。雍不敏と雖も、請ふ斯の語を事とせん。

私、及ばぬものではありませんが、先生の只今の御言葉通りに致します。其の實行に懸命に努力しますとの意。

○

顔淵にしても、仲弓にしても、先生の御説を承はりし場合。「分かりました」と云つて済まらずに、「請ふ斯の語を事とせん」と云はれた所が面白い。彼等が如何に實行に熱心であつたかと、此の「請ふ斯の語を事とせん」の一語の中に躍動して居るではありませんか。

八一 子張明を問ふ

子張問明。子曰。浸潤之譖。膚受之愬。不行焉。可謂明也。已矣。浸潤之譖。膚受之愬。不行焉。可謂遠也已矣。(顔淵第十二)

子張明を問ふ。子曰く。浸潤の譖。膚受の愬。行はれず。明と謂ふべきのみ。浸潤の譖。膚受の愬。行はれず。遠しと云ふべきのみ。

お弟子の子張。「どう云ふ人を、心の明かな人と云つていゝか」と問はれたので、先生は「水が物を潤す様に、ソロ／＼と、繰返し／＼諛言を聞かされても迷はされず。又及を皮膚に突つける様に、急迫して愬へられてもウツカリ釣り込まれぬ人であれば、心が明かな人だとも、近きに蔽はれざる人だとも云へませう」と答へられました。「浸潤の譖」と「膚受の愬」とには、全く誰でも過まられ易い。此の二つに會つても

判断を過らぬ人であれば、全く其の心明かにして、近きに蔽はれざる人と云ふべきであります。

八二 勤め人への良訓言

子路問政。子曰。先之勞之。請益。曰。無倦。(子路第十三)

子路 政を問ふ。子曰く。之に先んじ、之を勞す。益を請ふ。曰く倦むこと無れ。お弟子の子路が、或時、政を行ふ道を問はれたので、先生は「身を以て人民に先んじ、先づ自から勞して民を勤めしむべし」と教へられました。子路は不足に思つて、「外に猶ほ附け加へて教へて下さい」と願はれたので、先生は更に「右の心掛を永く持ち續けて倦ない様にしなさい」と云はれました。先勞の心掛を永く持ち續ければ、政治家として成功するにキマつて居ます。

子路問事。君子曰。勿欺也。而犯之。(憲問第十四)

子路君に事ふることを問ふ。子曰く。欺くことなかれ。而して之を犯せ。

或日お弟子の子路が、君に事ふる道に就て問はれましたので、孔子先生は「實意を以て仕へ、(欺く勿れ)、諫めねばならぬ場合には、顔を犯して言へ(犯せ)」と、云はれました。

今日も後輩の先輩に對する態度。部下の上長に對する態度はかくありたいものであります。

以上の二句は、會社員、銀行員、役人等々への、よき訓言であります。

八三 難きを知れ

定公問一言而可以興邦有諸孔子對曰言不可以若是其幾也人之言曰爲君難爲臣不易如知爲君之難也不幾乎一言而興邦乎曰一言而喪邦有諸孔子對曰言不可以若是其幾也人之言曰予無樂乎爲君唯其言而莫予違也如其善而莫之違也不亦善乎如不善而莫之違也不幾乎一言而喪邦乎（子路第十三）

定公問ふ。一言にして以て邦を興すべき諸ありや。孔子對へて曰く。言以て是の如くソレ幾すべからず。人の言に曰く。君たること難く。臣たること易からず。如し君たるの難きを知らば、一言にして邦を興すに幾からずや。曰く。一言にして邦を喪すべき諸ありや。孔子對へて曰く。言以て是の如くソレ幾すべからず。人の言に

曰く。予君たるより樂しきはなし。唯ソレ言うて予に違ふこと莫ければなり。如しソレ善にして之に違ふことなければ亦善からずや。如し不善にして之に違ふことなければ、一言にして邦を喪はすに幾からずや。

魯の定公から或時孔子先生に「此の一言を守らば邦を興隆さすことが出来る」と云ふ様な、いゝ格言がありませうか」との御質問がありましたので、先生は「此の一言を守らば、キツト邦を興隆さすことが出来る」と云ふ様な、ソレナ重寶な格言はありませんが、ソレと近いものはあります。或人の言に、「君たること難く、臣たること容易ならず」とあるが、此の言などはソレで、若し君たるの人が、君たるの難きを知りて、恐懼戒心一事をも苟しくせざれば、其の邦の興隆、九分九厘まで、期して待つべきではありませんか」と對へられました。

定公から又「此の一言の如くであれば、其の邦必らず亡ぶ」と云ふ様な、人君に注意せ

ねばならぬ。格言かくげんがありませうか」との御質問ごしつもんがありましたので、先生せんせいは「此この一言いちげんの如ごとくならば、必かならず邦くには亡ほろぶと云いふ様な、ソソンナ一言いちげんはありますまいが、或人あるひとの言葉ことばに、「予君よきみたるより樂たのしきはなし。唯ただソソレ言いうて予よに違たがふこと莫なければなり」とある。此この言げんなどは、ソソレに近ちかいものと云いへませう。人君じんくんの言げんが善良ぜんりやうである場合ばあひならば、臣しん下が唯々ただたるのもよろしいが、人君じんくんの言げんが間違まちがうて居ゐても、臣しん下がたゞ唯々ただとして、一言いちげんも諫めぬと云いふことであれば、其その邦くには遠とほからず亡ほろぶに違ちがひないと云いうても、敢あへて過言くわげんでないではありませんか」と對こたへられました。全まく忠言ちゆうげん耳みみに至いたらずして、君きみ日に驕おごらば、未いまだ國くにを喪ほろぶるものあらざるなりであります。

此この言げんは、人君じんくんに對たいして云いはれしものなるも、之これを誰たれの身みの上うへにも應お用ようすることが出來できます。則すなはちドンナ立場たちばの人ひとにしても、其その職務しよくじを全まうするの難かたきを知しりて、飽あまで努力どりよくしようとの心こころあらば、職務しよくじを全まうすることが出來できて、段々だんぐ幸福しあふになるが、若もし其その心こころを失うつて其その地位ちゐを利用して勝手かたてをしようとの氣きになれば、早晩さうばん其その地位ちゐを失う

ひ、身みを喪ほろすに至いたること請合うけあひであります。

八四 硜々然小人なる哉

子貢問曰。何如斯可謂之士矣。子曰。行己有恥。使於四方。不辱君命。可謂士矣。曰。敢問其次。曰。宗族稱孝。鄉黨稱弟。曰。敢問其次。曰。言必信。行必果。硜々然小人哉。抑亦可以爲次矣。曰。今之從政者。何如。子曰。噫。斗筭之人。何足算也。(子路第十三)

子貢問うて曰く。「如何なる斯れ之を士と謂ふべき」子曰く。「己を行うて恥あり。四方に使用して君命を辱しめず。士と謂ふべし」曰く。「敢て其の次を問ふ。」曰く。「言必ず信。行必ず果。硜々然小人なるかな。抑も亦以て次と爲すべし。」曰く。「今の政に従ふ者は何如」子曰く。「噫斗筭の人。何ぞ算ふるに足らんや」お弟子の子貢が、一日「先生、如何なる人を士と稱して、よろしいでせうか」と問ひ

ました。スルト先生、「ソナナ事は恥かしくて出来ぬと云ふのは、則ち恥を知つてゐるである。恥を知らば徳あるものと云ふべきである。其の上に君命を奉じて遠方に使し、使命を辱しめざる丈の才能あらば、士と稱してよろしいでせう」と答へられ

ました。子貢又問ふ。「成程、さうでせうが。サウした人は、サウはありますまい。其の次位はどんな人物でせうか」先生曰く「親類が皆、其の孝を稱し。郷里の者が父老に對して柔順ちやと稱する様であれば、ソレに次ぐの人と云つてよからう。才能はないにしても徳があるからなあ」と。子貢又問ふ。「更に其の次の人物は、どんな人達でせうか」先生曰く「一旦口から出したことは、どこまでも之れを守らうとし。やりかけたことは何にが何んでもやり通さうとして、變通と云ふことを知らないものは、例へば小石の様で、堅いには堅いが如何にも小さい。併しかゝる人物でも、操守ある點は尊い。其の次と云へるでせう」と。子貢又問ふ「今日の政治家達は如何ですか。士と云はれ

ませうか」先生曰く「あゝ、あの人達か、アレは一山何百文と云ふ組で、數の中へは入らぬ」と。

才能なくとも、孝養の徳あらば、なほ士と云ふべし。小さくとも操守あらば、なほ士と云ふべし。才能も、徳行も、操守もなき人は、何んと云ふべきぞ。

八五 迷 信

子曰。南人有言曰。人而無恒。不可_レ以_レ作_レ巫醫。善夫。『不_レ恒_レ其_レ徳_レ。或_レ承_レ之_レ差_レ』子曰。不_レ占_レ而已_レ矣。 (子路第十三)

子曰く。南人言へることあり。曰く。「人にして恒なくば以て巫醫と作るべからず」と。善いかな。「其の徳を恒にせざれば、或は之に差を承む」と。子曰く。占はざるのみ。

或日、孔子先生は、南方の人の云つた言葉の中に、「よく氣の變る。當てにならぬ人柄では、神官(巫)も、醫者もつとまらぬ」とあるが、善い言葉ですなと、云はれ。續いて易の中にも、「よく氣の變る。當てにならぬ人は、他人から羞を承めらるゝ、則ち羞を受ける場合も多い」とある。之れを能く味へば、心に誠のない人の凶たることは、

占はなくても分る。然かるに心に誠のない人程、占をしたがる。さて、馬鹿げたことであるわいと云はれましたとの意。

孔子先生はカウ云ふ調子で、迷信を排斥されました。

山鹿素行先生の言に

卜筮の事古書に多く載す。而して論孟には一語も之れあるなし。孔孟の迷信を排斥されしこと以て見るべし。

とあります。

八六 小人は怪我にも善い事をせぬ

子曰。君子而不仁者有矣夫。未有小人而仁者也。(憲問第十四)

子曰く。君子にして不仁なる者あり。未だ小人にして仁なる者あらざるなり。

或日、孔子先生は「道に志す君子と雖も、時に過つて不善を爲さぬとは限らぬ。さればこそ君子は恐懼戒心するのであります。併し元々道に志さぬ小人則ち俗物は怪我にも善い事をするには至りません」と云はれました。

ホントにサウです。人間として過失は止むを得ないが、道に志し、理想を目標としてどこまでも進んで行きたいものです。

八七 賢をス、むるの美德

公叔文子之臣大夫僕。與文子同升諸公子。聞之曰。可以爲文矣。

(憲問第十四)

公叔文子の臣大夫僕。文子と同じく諸公に升る。子之を聞いて曰く。以て文と爲すべし。

魯の大夫の公叔文子は、自分の家の僕と云ふ者が、賢人であるので、之れを魯公に推薦して自分と同地位の、魯の大夫たらしめました。孔子先生は之をきいて、公叔文子の賢をス、むるに熱心なるに感じ、「此の美德ある上は、此の人の諡の中に文の一字あるも、可なりである」と云はれました。何時の世にも、賢を妬み、能を嫉むものが多い。公叔文子の如きは、稀れに見るの人

物と云はざるを得ません。

これ程、賢をス、むる者をホメる孔子先生のことですから、然からざる者は、大にキラハレました。

子曰。藏文仲其竊位者與。知柳下惠之賢而不與立也。(衛靈公第十五)

子曰く。藏文仲は其れ位を竊む者か。柳下惠の賢を知りて、而かも與に立たざるなり。

魯の大夫の藏文仲は、世人から賢大夫と云はれた人である。併し彼には「柳下惠の賢人であることを知りながら、之れを君にス、めて、與に朝に立たざるの缺點」がありました。此の缺點は小さな缺點ではなく、實に大きな缺點でありますので、孔子先生は藏文仲を祿盗人とまで云はれたのであります。

大夫としては、賢才擧用が、一番大きな仕事である。ソレを怠つたのであるから、藏文仲は祿盗人と云はれても仕方がありません。

八八 君子忠厚人を待つ

子曰。不逆詐。不憶不信。抑亦先覺者。是賢乎。(憲問第十四)

子曰く。詐を逆へず。不信を憶はからず。抑亦先づ覺る者は、是れ賢か。彼は己をダマシに来たのでないかと、人を疑うてかゝつたり。又。彼は己を疑うて居りはせぬかと、邪推してかゝつたりせず。所謂「君子忠厚人を待つ」の心を以て、人に對し。ソレで居て、人の虚實の能く分るものは賢人であるとの意。賢人でなくとも、コチラの心に私のない時には、人の虚實は、能く分るものであります。

八九 下學して上達す

下學而上達 (憲問第十四)

下學して上達す。

下い所から學んで、段々高尚な眞理を體得して行くこと。

此の「下學して上達す」と云ふことに就き、山鹿素行先生に左の如き言があります。

柳生但馬守劍術妙を得たれども、門人に左程の上手なし、これは其身三十年四十年下學して、微妙の實理を得たるを、前方の下學をわすれ、今日當然の妙理と至極せる心を門人に教へんとする故なり……大事極意と云ふことも、下學して後にこれあるなるを、學の功をつまずして是を願ふは、壁の下塗りをせず、上塗りをするが

如し……

又曰く、

或人云へるは、町人百姓の、我れと働きて持てる家金は失はず、子孫の居ながら得たる財は、必らず之れを失ふといへり、學術皆な此の如し、自得せることは盡きず……

全く其の通りです。

下學を怠つて、上達を希望するのは無理であります。

九〇 己を恭しくして正しく南面するのみ

子曰。無爲而治者其舜也與。夫何爲哉。恭己正南面而已矣。

(衛靈公第十五)

子曰く。無爲にして治まる者は、其れ舜なるか。夫れ何をか爲すや。己を恭しくして、正しく南面するのみ。

舜はドウして天下を治めたか、舜自身としては何に一つしたワケではない。たゞ我身を修め禮服をつけて正坐して居るのみであつた。而して天下が能く治つたのである。

△南面は天子 政を聽くの位置

上に立つ人に一番大切なるものは、徳であつて手腕ではない。仕事は家來がしてくれる。君にはたゞ徳望があればよろしい。

〇

お弟子の福住正兄が、函根、湯本、福住樓の養子となりし時、二宮尊徳先生は「論語」の此の句を引きて、正兄に

論語に大舜の政治を論じて、己れを恭しくして正しく南面するのみとあり。汝國に歸り温泉宿を渡世とせば、又己を恭しくして正しく温泉宿をするのみと讀んで生涯忘れぬこと勿れ。

と云とされました。

九一 言忠信、行篤敬

子張問行。子曰言忠信、行篤敬。雖蠻貊之邦、行矣。言不忠、信、行不篤、敬。雖州里、行乎哉。立則見其參於前也、在與則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。(衛靈公第十五)

子張行はれんことを問ふ。子曰く。言忠信、行篤敬ならば、蠻貊の邦と雖も行はれん。言忠信ならず。行篤敬ならずんば、州里と雖も行はれんや。立てば則ち其の前に參はるを見。與に在れば則ち其の衡に倚るを見る。夫れ然る後に行はれん。子張諸を紳に書す。

お弟子の子張。一日。先生に「先生、どうしたら、思ふことが滞りなく行はるゝに至りませうか」と問はれたので、先生は「言葉に誠があり(言忠信)、篤く敬ひ慎みて事

を行はんとする人であれば、南蠻、北貊、如何なる野蠻國へ行つても、信用せられて、思ふこと滞りなく行はるゝに相違ありません。若し言葉に誠なく、何にをするにも敬ひ慎み行はぬと云ふ風であれば、郷里(州里)に於てさへ、相手にする者なきに至りませう。立てる時には「言忠信、行篤敬」の六字、我前に現はれ。車に乗つて居るには、クビキの所に、此の六字が現はると云ふ位に、絶えず此の六字を思うて居れば、何所に行つても信用されて、思ふこと滞りなく行はるゝこと請合です」と教へられました。子張はよろこび「先生、いゝ事を教へて下さいました」と云つて、右の六字を、帯を結びて前へ垂れてる所へ、書き誌して、何時も見ることの出来る様にいたしました。

言行に誠があると云ふこと位、人間にとり大切なものはありません。

九二 言を失ひ、又人を失ふこと勿れ

子曰。可_レ與_レ言_レ。而_レ不_レ與_レ之_レ言_レ。失_レ人_レ。不_レ可_レ與_レ言_レ。而_レ與_レ之_レ言_レ。失_レ言_レ。知_レ者_レ不_レ失_レ人_レ。亦_レ不_レ失_レ言_レ。(衛靈公第十五)

子曰く。與に言ふべくして、之と云はざれば人を失ふ。與に言ふべからずして、之れと云へば言を失ふ。知者は人を失はず。亦言を失はず。談るに足る人を見損うて、與に談らざれば人を失ふことになる。與に談るも無益な人と談れば、無駄に言葉を發して、言を捨てたことになる。與に談るべき人とは談り。與に談るべからざる人とは談らぬ。語黙各節に當る様でなくば、知者とは云へません。

九三 人、賢師友なくば

子貢問_レ爲_レ仁_レ。子曰。工_レ欲_レ善_レ其_レ事_レ。必_レ先_レ利_レ其_レ器_レ。居_レ是_レ邦_レ也_レ。事_レ其_レ大_レ夫_レ之_レ賢_レ者_レ。友_レ其_レ士_レ之_レ仁_レ者_レ。(衛靈公第十五)

子貢仁を爲すことを問ふ。子曰く。工其の事を善くせんと欲せば、必ず先づ其の器を利くす。是の邦に居るや、其の大夫の賢者に事へ其の士の仁者を友とす。お弟子の子貢が、或日、「仁を行ふの助けとなるもの」に就て問はれたので、孔子先生は「例へば職人が善い仕事をしようと思ふ場合には、先づ其の使ふ器具を選択し、且つ之を磨きてかゝらねばならぬ様に、仁を行はんとする者は、是の邦に居るにしても、どの國に居るにしても、先づ其の國の大夫の中の賢なる者、士の中の仁なる者と交らねばならぬ。人、賢師友なくば其の徳成る者ではありません」と教へられました。

子夏曰。百工居肆以成其事。君子學以致其道。(子張第十九)

子夏曰く。百工は肆に居て以て其の事を成し。君子は學びて以て其道を致す。

昔は大工はコ、に居れ。左官は、コ、に居れ。又鍛冶屋は此の町に居れなどと、其の居るべき場所を指定し。勝手に住居させなんだものであります。ソレが肆に居るのである。ソコで自然各職人が競争して、其の業に精しくなつたものであります。丁度其の様に、道を學ぶものも、道を學ぶことに熱心な者を友とせぬと、道を體得して、極所を極むることが出来ません(致すは極むである)。

以上の二句によりて、道を學ぶ者には、賢師友ならざるべからざるの理が、よく分る。

九四 雷同すること勿れ

子曰。衆惡之必察焉。衆好之必察焉。(衛靈公第十五)

子曰く。衆之を惡むとも必ず察し。衆之を好すとも必ず察す。

多數が之を惡むからとて、考へもせず、其の惡むべき事實の有無を確かめずして、これを惡んではなりませぬ。又多數が之を好するからとて、考へもせず、其の好すべき事實の有無も確かめず、好してはなりませぬとの意。

然かり、考察を加へずに、多數者の言に雷同してはなりませぬ。

子貢問曰。郷人皆好之。何如。子曰。未可也。郷人皆惡之。何如。子曰。未可也。不如郷人之善者好之。其不善者惡之。(子路第十三)

子貢問うて曰く。郷人皆之を好せば何如ん。子曰く、未だ可ならざる也。郷人皆之を悪まば何如ん。子曰く、未だ可ならざる也。郷人の善者之を好し、其の不善者之を悪むに如かず。

四四八

或日お弟子の子貢が、「一郷の人皆がいゝ人だと云ふ様であれば、賢人でせうか」と問ひました。スルト先生、「サア、皆がいゝと云ふからとて、必らず賢人であるとは云へまい」と答へられました。子貢又問ふ、「ソレでは先生、一郷の人皆が悪む様であれば其人は賢人でせうか」先生曰く、「さうでもありません。郷人の中の善き者が之を好み、悪い者が之を悪む様であれば、ソレこそホントの賢人でありませう」と。

ホントに道に従うて行動する人には、敵と味方のあるべき筈。誰にもすかれると云ふことは、郷原でなくば、出来ないことであります。

九五 人能く道を弘む

子曰。人能弘道。非道弘人。（衛靈公第十五）

子曰く。人能く道を弘む。道人を弘むるにあらず。

道徳を體得し、道徳を活用する人ありて、茲にはじめて、道は天下に行はるゝに至るのである。道は常に存するも、之れを體得して、活用するものゝない限りは、道は天下に行はるゝに至るものではないとの意。例へて云へば、人は手、道は扇でありませう。手で扇を動かさない限り、扇があつても、風は起りませぬ。

九六 小知、大受

子曰。君子不可小知而可大受也。小人不可大受而可小知也。

(衛靈公第十五)

子曰く。君子は小知すべからずして大受すべし。小人は大受すべからずして、小知すべし。

君子と云はるゝ様な、徳のある人は、多くは小才のきかぬもので、小事に當らしむると愚の如くであるが、さて大任に當らして見ると見事である。徳のない小人は、多くは所謂小才子で、小事には通じて居るが、さて大任を引受けさすことは出来ぬとの意。大石内藏之助は、平常無事の日には、晝行燈と云はれて、無用の長物視されたものでした。併し一朝大事の起りし時、赤穂で一番光りしものは、彼でした。

九七 仁、水、火

子曰。民之於仁也。甚於水火。水火吾見蹈而死者矣。未見蹈仁而死者也。(衛靈公第十五)

子曰く。民の仁に於けるや。水火よりも甚し。水火は吾蹈みて死する者を見る。未だ仁を蹈みて死する者を見ざるなり。

人の生きて行くに、極めて大切なるものは水と火であるが、仁政は其の水火よりも大切である。其の上に、水には溺るゝの危険あり。火には焼かるゝの危険あるも、仁政には一切危険がないとの意。

子曰。當仁不讓於師。(衛靈公第十五)

子曰く。仁に當りては師に讓らず。

善事を行ふ場合には、これは自分のせねばならぬ仕事と考へて、師にだつて、誰にだつて譲らぬがよろしい。之れが則ち仁に當りては師に譲らずである。

「己が出なくても、誰か出るだらう」「己がしなくても誰かするだらう」と云うて、當面の善を爲す機会を逸することは、大抵な人に有勝ちですが、之れは實によくないことです。善事を行ふ機会に遭遇せば、誰にも遠慮せず、斷行せよ。之れが則ち「事に敏にして」であります。但し善名の方は、成るべく人に譲るべきであります。

九八 君子に三戒あり

孔子曰。君子有三戒。少之時。血氣未定。戒之在色。及其壯也。血氣方剛。戒之在闘。及其老也。血氣既衰。戒之在得。 (季氏第十六)

孔子曰く。君子に三戒あり。少き時は、血氣未だ定まらず。之を戒むる色に在り。其の壯なるに及びてや、血氣方に剛なり。之を戒むる闘にあり。其の老ゆるに及びてや血氣既に衰ふ。之を戒むる得に在り。

二十歳前後の時(少き時)には、また肉體が固まつて居らぬから、最も色慾をつゝしまねばならぬ。二十歳前後で色に溺れたりすると、ものになりません。三十歳前後(壯年時代)になると、事業慾なり、名譽慾なりが強くなつて来るから、人と争ふことが多くなる。ソコを注意することが大切である。五十歳前後(老年に入るとなる)肉

體が弱つて来て、モウ色や鬪の心配はなくなるが老後のことを思うたり、子孫のことを思うたりして、所謂死慾が強くなる。ソレで貪慾(得)を戒しめねばならぬと云はれたのであります。
血氣則ち肉體の方から云へば、三時期ともに斯く戒しめねばならぬ。而して此の三つの危険を防ぐには、道を學び、志氣を壯んにすることによらねばならぬのであります。

九九 君子に九思あり

孔子曰君子有九思。視思明。聽思聰。色思溫。貌思恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。見得思義。(季氏第十六)

孔子曰く、君子に九思ある。視ることは明を思ひ。聴くことは聰を思ひ。色は温を思ひ。貌は恭を思ひ。言は忠を思ひ。事は敬を思ひ。疑はしきは問はんことを思ひ。忿には難を思ひ。得るを見ては義を思ふ。

支那太古の聖帝堯が舜に位を譲らるゝ時のお言葉の中に「允に其の中を執れ」とあり。舜が禹に位を譲らるゝ時のお言葉の中にも「允に其の中を執れ」とある。我國の學者で近江聖人中江藤樹の再來と云はれし三輪執齋先生が自から執齋と號したのは、此の執の一字を大切と見たからであります。

道を體得するといふことは、古人の教を執る即ちシツカリ握りしめて、之れを持ち續けなければ出來ないのである。あの拳々服膺も此の執に當つて居るのであります。拳々とは、さげもつこと。供物を神前に供へる時の様が此の拳々である。服膺とは胸にシツカとおさへつけることである。

無論孔子先生も同意見で、「論語」の中に、古人の教を執ること、即ち拳々服膺することの外に、修養の道のないことが、度々説かれてあります。今其の中の一。「君子に九思あり」の一節を講義して見たいと存じます。

聖人君子と云はるゝ程の、立派な人とならうと云ふには、左の九つの點を慎しみ、氣を付けることを要する。ソレが即ち「君子に九思あり」です。九思の第一は、「視ることは明を思ひ」です。

腹の蟲の居所の悪い時には、人の顔色や素振りを見て、何んだ失禮など、腹の立ちかけるものである。其の時には「私の見間違ひかも知れぬと、一先づ腹をおさへて

見直しをせよ。之れが即ち「視ることは明を思ひ」であります。

第三者から、「ソリヤ君の見間違ひだよ」と云はれても、「イヤ、私は確かに此の目で見たと力む者あるも、カウした場合、ソナナ力味方をするよりも、「サウかも知れぬ」と一歩退く人の方が奥床しい。

第二は、「聽くことは聰を思ひ」です。

聽くことに就ても、腹の蟲の居所の悪い折りには、聞き間違のあり勝ちなものである。されば他人の言を、皮肉を云ふと聽いた様な場合。或は聽き違ひかも知れないと、一と先づ立腹を慎むべきである。ソレが則ち「聽くことは聰を思ひ」であります。

(聰とは耳のことといふこと)

確かに此の耳で聞いたなどと、何所までも力むのが小人の常。君子は聽き違ひかも知れないと、罪を自分に歸せしむるのである。其の方が床しい。

第三は、「色は温を思ひ」です。

色とは顔色のこと。顔色に氣を付けて、何時も顔色が温和である様に心掛くる。ソレが則ち「色は温を思ひ」です。

一度腹を立てたら、何時までも怒つた顔をして居る。一遍フケれたら、三日もフクれて居る。ソナナことではいけない。

自分の顔色位、支配出来なくてどうする。

第四は、「貌は恭を思ひ」です。

貌とは身體全部を云ふのです。即ち君子は、顔色に氣をつけるばかりでなく、身體全部に氣を付けて、手にも足にも、何所にも慎しみの現はれて居る様にと、心掛けがあるのであります。

客と對談して居る折り、客を尊敬して居る様な場合には、手も足も何にもかも行儀よきも。少しでも客を粗末に思ふと。直ぐ手が不行儀になつて頭をかいたり。足が

不行儀になつて、投げ出したり。眼が不行儀になつて、アツチを見たり、コツチを見たりする。君子はソナナことのない様にと、何時も心掛けて居る。ソレが即ち

「貌は恭を思ひ」であります。

第五は、「言は忠を思ひ」です。

「言を慎しめ」とは、無駄口をたたくもの、人の悪口を云ふものへの教であつて、言葉の教としてコレ丈けでは足らない。

人をなくさめたり、人を勵ましたり、其他善い意味の言葉の、口から出たらぬものに對しては、別の教へがなければならぬ。ソレが則ち「言は忠を思ひ」であります。

私は青年時代に、父の代理として病氣見舞ひにやられ、行くには行つたが、何んとかつていゝか分らなくて困つたことがある。今の青年諸君の中にも、ソナナ人が少なくなからう。サウした青年には、「言葉を慎しめ」とは反對に、「無口ではいけない。稽古をせよ」と云はざるを得ません。

「君は、昨日の日曜に、何處へ行きまされたか」ときかれ、「へ、ん」と云ふ丈けの人がある。かゝるは問者に不快の念を興へる。カウ云ふ場合、「ハア川へ釣りに行つて來ました。二三尾しか釣れませんでした」と云ふと、問者は満足する。特別にかくさねばならぬことの外は、委曲を盡して申述べる。ソレが即ち「言は忠を思ひ」であります。

主人が家庭へオソク歸へつて、奥様から、「エライおそいでしたね」と云はれ、「ウン、講演をきいて來た」「誰のお話」「何某博士の話さ」「其のお話の筋を話して下さい」「何つまらなかつた」カウ云つて打切ると、奥様が面白く思はぬ。「コンナ話もあつた。アンナ話もあつた。お前もつれて行つて上げたかつた」と云ふと、奥様が満足する。ソレが則ち「言は忠を思ひ」です。

第六は、「事は敬を思ひ」です。

ドンナことでも敬の心です。慎しんです。ハガキ一枚書くにも今の此のハガキは誰に出すのであるかを考へ、一字でも粗末な字があると御不禮になると思つて書く。ソレが即ち「事は敬を思ひ」であります。

女の人でしたら、茶碗一つ洗ふにも、敬の心を以てして欲しい。ぞんざいな洗ひ方をするのは、心に敬の思ひがないからである。

第七は、「疑はしきは問はんことを思ひ」です。

仕事にしても、熱心な人程、「コ、をどうすればよいか」の疑問を澤山持つて居るのである。疑問があつて、ソレを人に問はねば止まぬ人は進歩する人である。疑問のない人。あつても問はぬ人。ソレは進歩せぬ人にキマつて居る。

親に仕へる道に就ても。子供のしつけ方に就ても、熱心であればある程。「コ、をどうすればよいか」と疑問のあるものです。又熱心な人は其の疑問は、得心の行くまで、人に尋ねるものです。

第八は、「忿には難を思ひ」です。

腹立ちまぎれに、飛んでもないことをしたり云つたりして、後へ難問題をのこすことの多いものである。ソレで君子は、腹の立つた折には、「コンナ時には氣を付けぬと、面倒が起るぞ」と云つて、特別に注意する。ソレが則ち「忿には難きを思ひ」であります。

第九は、「得るを見ては義を思ふ」です。

人から甘い話を持ち込まれし場合には、甘い話には兎角曰くのあるものですから、直ぐには乗るな。「一晚考へさしてくれ」と云つて引きさがり、「此の話に乗つても、人の道にはづれはせぬか」と、とつくり考へよ。ソレが則ち「得るを見ては義を思ふ」です。

以上九つの點に氣を付け、慎んで居ると、次第にソレが心の習慣になつて、遂には君子になれます。

ホントの修養の道は、たゞ此の一筋よりないのです。

一〇〇 小人道を學べば使ひ易し

子之武城。聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑曰。割雞焉用牛刀。子游對曰。昔者偃也聞諸夫子曰。君子學道則愛人。小人學道則易使也。子曰。二三子。偃之言是也。前言戲之耳。 (陽貨第十七)

子武城に之きて、弦歌の聲を聞く。夫子莞爾として笑つて曰く。鶏を割くに焉ぞ牛刀を用ひん。子游對へて曰く。昔者偃や、諸を夫子に聞けり。曰く。君子道を學べば則ち人を愛し。小人道を學べば則ち使ひ易し。子曰く。二三子、偃の言是なり。前言は之に戯るのみ。

孔子先生、一日、お弟子の子游の治めて居る、魯の武城と云ふ所へ遊びに行かれました。さて武城の土地へ入つて見ると、彼所からも、此所からも、正しき歌を歌ふ聲。

正しき樂の音がきこえて来て、土地の人々が、樂しげであります。ソコで先生はよろこんで「ア、之れはホンがかりぢや、子游は、先王が天下を治めし大道を以て、此の小邑を治めて居るわい。鶏を料理するのに、牛切庖丁を以てする様だわい」と、少しく戯談を混せて云はれました。子游は眞正直な男ですから、孔子の此の言に對してすら、生眞面目に、正面から「かつて、先生から、上に立つ者、道を學べば、人を愛することが出來。下に居る多勢の者が道を學べば和順の心起るから使ひ易くなるとの教を受けました。ソレで道を以て武城を治めて居るのですが」と答へられたので、孔子「今のは戯談ぢや。假(子游)の云ふ通りぢや」と云つて、ニコ／＼されました。お弟子の子游が、先生平常の教の通り、道を以て小邑にても治めて居るのを見て、先生が如何によろこばれたかは、言外に能く現はれて居ります。

一〇一 郷原は徳の賊たり

子曰。郷原徳、賊也。(陽貨第十七)

子曰く。郷原は徳の賊なり。

郷原の中にありて、誰れからも「よく分つた人だ」と云はるゝ人。則ち郷原は多くは流俗に媚ぶる者であつて、眞の謹厚忠信の人とは、其の選を異にして居る。さればかかる人は、「徳の賊なり」と云ふべきである。との意である。

酒席にあつては、「酒も時々はいゝですなあ」と云ひ、青年の會に臨みては、「若い時には少々は遊ぶのもいゝです」などと云ふのは、所謂俗人から「よく分つた人」と云はるゝ郷原の語であつて、コンナ語位、「徳を害する」ものはありません。

子曰。衆惡之必察焉。衆好之必察焉。（衛靈公第十五）

子曰く。衆之を惡むとも必ず察し。衆これを好すとも必ず察す。

多數が之を惡むからとて、考へもせず、其の惡むべき事實の有無を確かめずして、之れを惡んではならぬ。又多數が好するからとて、考へもせず、其の人に好するに足る丈けの事實あることを確かめずに、好してはならぬとの意である。

子貢問曰。郷人皆好之何如。子曰。未可也。郷人皆惡之何如。子曰。未可也。不如郷人之善者好之。其不善者惡之。（子路第十三）

子貢問うて曰く。郷人皆之を好せば何如ん。子曰く。未だ可ならざる也。郷人皆之を惡まば何如ん。子曰く。未だ可ならざる也。郷人の善者之を好し。其の不善者之を惡むに如かず。

或曰。お弟子の子貢が、「一郷の人皆が、人だと云ふ様であれば、賢人でせうか」と問ひました。スルト先生、「サア、皆がいと云ふからとて、必ず賢人であるとは云へまい」と答へられました。子貢又問ふ、「ソレでは先生、一郷の人皆が惡む様であれば、其人は賢人でせうか」先生曰く、「さうでもありません。郷人の中の善き者が之を好み惡い者が之を惡む様であれば、ソレこそホントの賢人でありませう」と。云ふにあります。

○ 「山鹿語類」に、以上の意味合ひに就き、かく云はれてある。

衆甚だ譽むれば則ち大失あり。そのゆゑは、聖人の徳は天下得て稱すべき所なし。天下の者、多くは愚者にして道を知らず、愚者の人をほむるは一も理に當らぬものなり。故に組の頭をほめ、家來の主人をほめ百姓の地頭をほむること、必らず皆小惠に因て、道を知らず、教を正さざるを以て譽むるのみ也。組の作法を詳かにせず、

家職のつとめを糾さず、禮義をすて、何事も成行次第に仕り、彼が困窮すべしと云ふ忠孝の務をかゞしめ、人倫の禮をも明らめざるの頭奉行を、組下の者大に喜びほむ。主人教戒なく、家來我まゝにて、門戸の出入、勤番の法、義務のたゞし之れなく、朝夕のつとめ怠て更に正さず、家中を以て心安きと喜ぶ。是れ主臣の禮闕て、人々道を知らず、法を明かにせず、只だ禽獸の飽まで食ふに異ならず。民間の毀譽猶以て然り。是れ衆ほむるとも能く察せよと云ふ古の戒め思ふべき也。只だ善人賢者知者のほめ、悪人愚者不肖のものには毀らるゝに有ぬべし。

右の理合ひを能く察して、郷愿たらぬ用心こそ肝要なれであります。

一〇二 徳を之れ棄つる也

子曰。道聽而塗說。徳之棄也。(陽貨第十七)

子曰く。道に聽きて塗に説くは、徳を之れ棄るなり。

善言をきけば、之れを能く味ひ、我がものとすべく努むべきである。此の方へは力を用ひずに、聽いたことを直ぐ話して、博識ぶる方へ傾くと、折角の善言も自分の爲めには、何んにもならない。ソレで「徳を之れ棄つるなり」とまで痛言されたのであります。

何時までしても、世に、聽いたことを直ぐ喋べつて、後は忘れて仕舞ふ人の多きを見れば此の言何時までも世人への忠言と云ふべきであります。

一〇三 陋劣なる人間と一緒に仕事は出来ない

子曰。鄙夫可與事君也。與哉。其未得之也。患得之。既得之。患失之。苟患失之。無所不至矣。(陽貨第十七)

子曰く。鄙夫與に君に事ふべけんや。其の未だ之を得ざるや、之を得んことを患ひ。既に之を得れば之を失はんことを患ふ。苟も之を失はんことを患へば、至らざる所なし。

陋劣なる人物とは、到底一緒に君に事ふることは出来ぬ。未だ富貴權勢を得ざる間は之を得ることばかりを考へ、既に富貴權勢を得れば、ソレを失はんことのみ懼れて居る。此の様なもの、富貴權勢を得ん爲め、失はざらん爲めには、ドンナことでもするから恐ろしい。

今日でも同じことで、陋劣なる人間と一緒に仕事は出来ない。徳を思ふものと、利を思ふものとは、何時の世に於ても一緒に仕事は出来ません。

一〇四 徳を執るここ弘きを要す

子張曰。執徳不弘。信道不篤。焉能爲有。焉能爲亡。(子張第十九)

子張曰く。徳を執ること弘からず。道を信すること篤からずんば、焉ぞ能く有りと爲さん。焉ぞ能く亡しと爲さん。

一善を守るのも徳と云へば、徳と云へるがたゞ一善しか守らぬ様な狭まゝいことでは、何んにもならぬ。衆善奉行を心掛けねばならぬ。斯くの如くならざるを「徳を執ること弘からず」と云ふのであります。道に信ずるには信じて居ても、其の信じ様が淺く弱くては何んにもならぬ。ソレで徳を執ること弘からず、道を信ずる篤からぬものは、道德の有る人か、無い人か分らぬ程の値打しかないと云はれたのであります。

世に徳を守る人ありても、其の多くは、一善若しくは二善に熱心なるのみで狭い。道を信ずる人ありても、其の多くはちぎりにグラつく。昔もソレナ人が多かつたので、子張は斯く云はれたのでありませう。

一〇五 君子に三變あり

子夏曰。君子有三變望之儼然。即之也溫。聽其言也勵。 (子張第十九)

子夏曰く。君子に三變あり。之を望めば儼然。之に即けば溫。其の言を聽けば勵し。君子は遠くから見た所では、其の容貌儼然として居て、近づき難きかの如くなれど、さて近づいて見ると、案外溫和で親しみ易い。併し一度口を開けば、是を是とし、非を非として、寸毫も苟しくもせず、ナカ／＼勵しい所があるから、なれあなどることが出来ませんとの意。

一〇六 大徳、小徳

子夏曰。大徳不踰閑。小徳出入可也。 (子張第十九)

子夏曰く。大徳は閑を踰えず。小徳は出入するも可なり。大徳、大節は嚴重に守りて、寸分も閑を踰えぬ様にと心掛けねばならぬが、小徳小節の方は、多少の出入ありても、差支ないとの意。之れは世間に、小徳小節は喧しく云ふが大徳大節は粗略にする人が多いので、言はれた言葉でありませう。

一〇七 努めずして出来る事

曾子曰。吾聞諸夫子。人未_レ有_ニ自致_ス者也。必也親喪乎。(子張第十九)

曾子曰く。吾れ諸を夫子に聞けり。人未だ自ら致す者あらざるなり。必ずや親の喪か。

私(曾子)は、かつて孔子先生から、「人は他から刺激されずして、哀しみにしても、よろこびにしても、情を極むる所まで行くものでないが、親の喪に居る場合ばかりは、他から何等の刺激を受けずして、哀痛の情を極める」ときかされたことがありますとの意。

全くサウです。親の死を悲しむこと丈けは、他から刺激を受けず。又自から努めず出来るが其他の事は、何れも他から刺激を受けるか。又自ら努めなくては出来ない。

一〇八 五美と四悪

子張問於孔子曰。何如斯可以從政矣。子曰。尊_ニ五美_ヲ。屏_ニ四惡_ヲ。斯可以從政矣。子張曰。何謂_ニ五美_ト。子曰。君子惠而不費。勞而不怨。欲而不貪。泰而不驕。威而不猛。子張曰。何謂_ニ惠而不費_ト。子曰。因_ニ民之所利_ニ而利_ス之。斯不亦惠而不費乎。擇_ニ可_レ勞_ニ而勞_ス之。又誰怨。欲_ニ仁_ニ而得_レ仁_ヲ。又焉貪。君子無_ニ衆寡_ト。無_ニ小大_ト。無_ニ敢慢_ト。斯不亦泰而不驕乎。君子正_ニ其衣冠_ヲ。尊_ニ其瞻視_ヲ。儼然人望_ニ而畏_レ之。斯不亦威而不猛乎。子張曰。何謂_ニ四惡_ト。子曰。不教而殺。謂_ニ之虐_ト。不戒視成。謂_ニ之暴_ト。慢令致期。謂_ニ之賊_ト。猶_ニ之與人_ト也。出納_ニ之吝_ヲ。謂_ニ之有司_ト。(堯曰第二十)

子張孔子に問ひて曰く。如何なれば斯に以て政に従ふべきか。子曰く。五美を尊

び、四悪を屏げば、斯に以て政に従ふべし。子張曰く。何をか五美と謂ふ。子曰く。君子は恵にして費さず。勞して怨みられず。欲して貪らず。泰にして驕らず。威ありて猛からず。子張曰く。何をか恵にして費さずと謂ふ。子曰く。民の利する所に因りて之を利す。斯れ亦恵にして費さざるにあらずや。勞すべきを擇びて之を勞す。又誰をか怨まん。仁を欲して仁を得。又焉ぞ貪らん。君子は衆寡となく。小大となく。敢て慢することなし。斯れ亦泰にして驕らざるにあらずや。君子は其の衣冠を正し。其の瞻視を尊くし。儼然として人望みて之を畏る。斯れ亦威ありて猛からざるにあらずや。子張曰く。何をか四悪と謂ふ。子曰く。教へずして殺す。之れを虐と謂ふ。戒めずして成るを視る。之を暴と謂ふ。令を慢にして期を致す。之を賊と謂ふ。猶しく之れ人に與ふるなり。出納の吝なる、之を有司と謂ふ。

子張「先生。政に従ふ者の心掛けねばならぬことに就て、教を受けたいのですが……」

孔子「五美を尊び、四悪を屏げると云ふことが、政に従ふ者の大切な心掛けであります。

う。

子張「先生、其の五美の説明をして下さい。」

孔子「君子は民を恵んで而かも我が財を費さず。民を勞して而かも怨まれず。欲する所は欲して、而かも貪るとは云はれず。態度は舒やかであるが、而かも驕り高ふるとは云はれず。又威嚴があるが、而も猛々しいとは云はれず。是れが則ち五美であります。

子張「先生、只今お話の「恵して費さず」以下をモウ少し詳細に説明して下さい。

孔子「施せば、恵みて費したことになるが、資を投じて、農業、工業、商業に就事する者の利益になる様、色々の施設をしたことは民を恵むことになつて、しかも投資は後に歸つて来るから、我が財を費して仕舞ふことにはなりません。民に苦役をおほせつても、ソレが結局人民の爲めになることをさすのであれば、人民から怨まるゝ様なことはありません。人の爲めにしようと思つてしたことであれば、何にをしても、貪るとは云はれません。人の衆寡と、事の大小とを問はず、敬して慢らずと云ふことで

あれば、其の態度がどんなに舒やかであつてもどうして驕り高ぶると云はれませうぞ。衣冠を正しくし、横目を使うたりせず。何時も嚴然として居れば、誰れでも之を望み見て畏敬する。之れが則ち威あつて猛からずであります。

子張「五美のことは御蔭で分りました。今度は四惡に就て説明して下さい。

孔子「善を以て教へ導かずして、罪を犯すをまちて、之を罰し或は殺す。之れは虐と云ふもので、殘忍な話であります。豫じめ戒告しておかずに不意打に、ドレ丈け出来たなぞと、其の成績を検査するのは、亂暴至極であります。初めに命令を嚴しくして置かず、後になつてから期限を喧しく云つたりするのは、之れを賊と云ひます。人に物を與ふる場合、出し惜しみをするのも、惡の一つで、兎角出納係にはソンのが多

い。以上が四惡であります。政治に就ての、孔子の意見は、論語の所々に示されてあるが、之れ程に備つて居る句は外にありません。

新講論語讀本



昭和十四年三月十六日印刷
昭和十四年三月二十日發行

定價壹圓三十錢

著作者 西川光二郎

發行者 和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者 今井扶
東京市神田區鎌倉町五番地ノ二

印刷所 東陽印刷株式會社
東京市神田區鎌倉町五番地

發行所 東京・日本橋 春陽堂書店

振替東京一六一七番
電話日本橋五一・一九四八・四三七三

終

